

金山寺、象山砲台見学、午後五時帰着。北島参謀陸大教官、大西参謀支那駐在員に転出。新聞によれば陸士生一、八〇〇名、幼年生徒六〇〇名採用、未曾有ノコトナリ

◇ 二月十一日 快晴

〔予記〕 〓漢詩一編

〔特別事項〕 軍ノ改編ニ就テ公式ニ承知ス

〓紀元節俳句三首。東方遙拜式。軍司令部改変の方面軍公電に接す。新軍司令部への転入者四十三名、帰還者とはほぼ相半す。13 D 方面蚌埠、臨淮関対岸の敵北方に退避開始す。午後安達12 i 長談話に来る。本夜軍司令官在南京の勅任官級を招致せらる。

◇ 二月十二日 曇 天気下り坂

〔予記〕 払曉〇度 / 日中一〇度

〔特別事項〕 〓北極閣其他見学 / 〓伊東師団長来部

〔通信〕 〓来五名

〓午前22 i 長永津大佐の徐立涇口附近上陸戦闘の実戦談。午後軍司令官官殿下のお供で兵站病馬廠、北極閣天文台上防空司令部見学

防空司令部ハ擬寺院内地中深ク坑道ヲ掘リ諸設備整ヒ参考トスルノ価値アリ、我国ニハ未タ見サルモノナリ。

◇ 二月十三日 雨後曇

〔通信〕 〓多数

〓13 D 渡河作戦、両方面とも戦死各二一、負傷約七〇、敵死体約二、〇〇〇、俘虜、鹵獲品多数

憲兵報告ヲ見ルニ軍紀風紀上の事故未ダ相当ニ多シ。常規ヲ脱セル意想外ナルモノアリ。動機ハ酒ナリ。実ニ遺憾千万ナリ。

〓短歌一首

◇ 二月十四日 曇

〓天谷支隊長の招宴、蒋介石の住居で御馳走になる。大坪参謀より方面軍との打合せ事項聴取。十八日南京出発、二十三日上海出帆予定。凱旋近し

◇ 二月十五日 曇後晴

〔予記〕 気温俄ニ高クナル

〔通信〕 〓四名

〓安達大佐の講話。課長以上各個に殿下と撮影。軍司令官の獅子山砲台、雨花台、長屋部隊御視察に随行。六時半より部内訣別会食。目マグルシキ状態ナリキ

中島今朝吾日記

第十六師団長・陸軍中将
15期



獅子山砲台



中島今朝吾中将

「中島日記」について

これは第十六師団長であった中島今朝吾中将の昭和十二年十二月一日から十三年一月二十五日までの日記で、このうち、十二月十一日より三十一日までの分は中央公論社『歴史と人物 秘史・太平洋戦争』（昭和五十九年）に掲載されたものである。

戦史研究資料としては、いささか個性の強すぎる感はあるものの、随所に鋭い観察がひらめき、また対人関係についても歯に衣きせぬ率直な記述が見られ、軍の内情、人心の動きなどを知る貴重な資料といえる。

一方、甚だ感情的で、判断に主観的偏りが多く見られる。多くの部下に尊敬された半面、松井大将以下の司令部幕僚、部下である佐々木少将、片桐、三国兩大佐との間にトラブルがあり、元憲兵司令官にも拘らず憲兵隊関係者の評価が低い。気付いた点若干を記す。

① 軍幕僚に対し批判的である。丹陽における「又又次次」として出し命令」とか、補給の見込みがたたぬのに敵西行の飛行機報告を受けて直ちに南京より退却と即断し追撃命令をくだす。これを「軽率妄動」と批判する【一一・二三】等が目につく。後には官報司令官を戴く軍幕僚の権威主義が不快だったようだ。【一・二〇】

② 第九師団の行動（紫金山、中山門占領。湯水鎮軍司令部救援等）を不快に感じており、入城式を中山門から行うことを嫌うとか、北支移動の際には蘇州（第九師団司令部所在地）泊まりを避けると甚だ感情が露骨である。

③ 指揮官としては陣頭指揮型、なかなかのリアルリストでもある。一般民衆に対する関心は全く無い。

④ 松井大将に対しても冷笑的態度であった。【一・二三】

⑤ 北支移動途中、上海での所見は、日本人の欠点を鋭く衝いており、今日でも通用する批判を含んでいる。いわゆる「聖戦」の目的は曖昧になり、早くも勝利者のおごりと墮落が始まっていた。松井大将が和平工作を極めて楽観的に考えていたのとは対照的に、中島中将の観察は人心の深層に達し鋭いものがある。いずれが是か、いずれが否か。それは歴史が示した【一・二三】。

⑥ なぜか一月九日より二十日まで日記が飛んでいる。解説文を提供された青山学院女子短大・木村久邇典教授によれば、原本そのものに無く、しかも破り捨てた形跡なども無いとのことである。

さらにこの日記の八、九、二十日の記述は飯沼日記の十、十一、二十一日に、それぞれ相当する。

抜けている部分に起こった重要事件は、十二日の参謀総長要望の伝達、十四日の憲兵とのトラブル【飯沼日記・木佐木日記】、近衛声明、及び師団の北支移動の決定である。抜けた理由は解らないが、日付の狂いについては後日のまとめ書きと考えられる。

⑦ 「捕虜ハセヌ方針」【一一・一三】については、軍全体の方針と、第十六師団のみの方針、と二つの解釈がある。一つの参考としてこの仙鶴門鎮の捕虜七千の処置について挙げれば、最初三八に処分を命じたのは師団司令部で、驚いた軍直属の攻城重砲部隊が抗議して撤回させたのは派遣軍司令部であった、と考えるのは如何であろうか。

十二月一日 晴天 常州発

一、各部隊ハ出發シ草場部隊ニ追及セシム

一、此日正午侍從武官後藤中佐ノ到着アリ、司令部ハ正午迄ハ常州ニ止リテ之ヲ迎ヘ後御車ニテ師団行軍ノ状態ヲ視察セシムルコトトシ、午後一時出發奔牛鎮ニ至リ之ヨリ鎮江本道ト別レテ旧道ニ入ル為ニ自動車ヲ捨テ、乗馬ニテ呂城鎮ニ至ル、午後六時稍前到着ス、草場少將ト會シ是迄ノ追撃隊ノ行動報告ヲ受ク

一、先キニ午後十一時半昌城鎮占領ノ報告アリシモ其ハ第一線陣地ノ占領ニシテ次ニ第二線アリ之ガ占領ハ遂ニ夕刻ニ達ス、敵ハ追撃砲ヲ有シ相当広正面ニ亘リ頑強ニ抵抗セリト云フ

一、奔牛鎮以後追撃隊ハ

一大隊ヲ鉄道線路上ニ丹陽ノ東北側ニ向ヒ本道上ニ一中隊ヲ

20 iノ七中隊ヲクリクノ南岸ヲ經テ丹陽ノ西南側ニ向ヒ前進攻撃セシム

依リテ本隊先頭ノ9 iノ一大隊ヲ草場少將ノ指揮下ニ待機セシムルコト、シ

一、此夜侍從武官草場少將ト共ニ昌城鎮ニ宿營ス

一、司令部ノ計画ハ侍從武官ヲ第一線ニ案内シ再奔牛鎮ヘ帰還シテ宿營スル予定ナリシモ、予ハ一旦第一線近くニ出ルノナラ引下リテ宿營然モ晩ニ入りカヘリノ行程ヲ馬行スルハ本意ナラズ、依リテ断然副官ト共ニ殘ルコトトセリ

侍從武官モ亦最前線ニ宿ルコトヲ希望シアリシモ軍司令部ニテ同意セス、今日始メテ實現セシコトヲ大イニ満足シアリ

抑々自己ノ責務ヲ完全ニ果スヲ以テ未ダ足レリ〔ト〕セズ進デ他人ヲシテ其誠実ヲ尽シ易カラシムルヲ要ス

此カル觀念ハ他ニ持合ナキガ如シ

一、此夜軍命令アリ

師団ハ主力ヲ以テ丹陽ニ又有力ナル一部隊ヲ以テ白兔鎮ヲ占領スベシ

抑々予ハ初メヨリ之カラ丹陽ニ集結シテ一部ヲ成ルベク南京ニ近く押シ出ス決心ヲ以テ處理シツツアリ、然レバ此軍命令ハ後ノ祭リナリ

軍統帥ハ常ニ後カラト云フ如ク真ニ腑甲斐ナキ次第ナリ

一、明二日ハ現在ノ態勢ヲ以テ丹陽ニ向ツテ急進スルノ外ナク本夜ノ命令ハ頗ル簡單ナリ

一、一日夜ハ稍曇リ勝雨模様ナリシモ降雨ナクシテ本日モ晴天ナリ

◇十二月二日 晴 昌城鎮、王村西部部落、丹陽ヨリ一K半

一、午前八時侍從武官ノ帰還ヲ送り司令部ハ同九時半出發シテ追撃隊ノ後、主力本隊ノ先頭ヲ行進スルコト、シ

一、午前九時三十分昌城鎮ヲ發足セリ、

一、草場部隊ハ一中隊ヲ正面ヨリ向ハシメ一大隊ヲ右ヨリ

一、二大隊（一中欠）ヲ左ヨリ丹陽西北及西南端ニ向ツテ迂回セシメ、正面ハ砲兵ノ到着ヲ待ツテ突進セシメントセシガ、砲兵ハ奔牛鎮以西道路ナク殆ンド畑中ヲ通過シ然モ諸処ニ地隙様ノ下水溝アリテ工兵ノ作業ヲ要スルガ為前進意ノ如クナラズ、大隊長ハ意ヲ決シテ門橋ヲ以テ砲車ヲ推進スルニ決シタリ（但砲二門ノミ）

一、正面ノ突入ヲ故ラニ少シク控ヘシメ両迂回隊ノ進出ヲ待ツコトヲ命ジタルガ、此両迂回隊ハ午後五時頃各目的地ニ達シ敵ハ全ク包囲ノ中ニ在リタルモ、夕刻退却スル能ハザルヲ以テ恐クハ夜ニ入りテ退却スルモノト判断セリ

一、一方迂回隊ハ四方ノ城門ヲ閉ヂテ敵ノ城外ニ逃避スルヲ妨ゲ、夜六時半頃正面ノ敵ヲ追撃セルモ友軍相撃ツノ危険ヲ避クル為夜間ノ掃蕩ヲ中止シテ明払曉之ヲ為スコトニ決シ、聯隊ハ現在態勢ノ儘村落露營ヲ為ス但佐々木旅団ハ丹陽ニ於ケル宿營地ノ關係上鉄道線路ニ出デシメ其北側ニ宿營セシム

草場部隊ハ步兵第十九旅団（歩九・歩二十）

侍從武官ハ步兵中佐 後藤光蔵²⁹

佐々木旅団ハ步兵第三十旅団（歩

三三・歩三八）

一、彼我ノ状況前述ノ如クナルヲ以テ此夜ハ殆ンド銃声ヲ聞カズシテ明朝ヲ待テリ
丹陽ニ距離僅ニ一Km半此夜直ニ入城セズシテ近クニ宿營スルノ止ムナキニ至レリ

◇十二月三日 晴天 王村西方部落→丹陽

一、午前七時半設營隊ヲ派遣シ爾余ノ司令部ハ午前十時出發ス
此時機中休憩所ニ在リテ太陽ノ昇ルヲ拜ス真紅ナリ、之ガ遠方ニ於ケル火災ノ煙ニ懸リテ景色絶可ナリ

一、早朝拜旭光待丹陽城内之掃蕩

拜東丹陽則西負丹陽

四門既閉敵是囊中之鼠

旭光鮮明鼠賊不掃蕩逃

勿犯古訓窮鼠却食猫

不損兵破敵戰之要訣

一、途中各部隊ノ間隙ヲ縫フテ城内ニ入レバ古色愴〔蒼〕然タリ

クリークト名ハ称スレドモ幅狭ク水浅クシテ濁リアリ、但岸壁高ク二丈ニ達ス
街道上石ヲ並ベテ馬ノ為ニ故ニ危険ナリ

今度ハ數日ノ休養ヲ予期シアリタレバ宿舎ノ選択モ稍入念ニ為シタルモ思ハシカラズ。遂

ニ我々ガ最初一時休ミタル家ヲ定メテ夫ヨリ宿營準備ニ着手、自ラ整頓シテ午後二時昼食ス

一、草場部隊ハ引続キ白兎鎮ニ向ツテ前進ス

一、野砲隊ハ此日聯隊段列ヲ除ク外全部到着ス

一、軍司令官ヨリ次デ句容ヲ攻略セヨトノ命令アリ、又々次々トシボリ出シ命令ヲ受クルコトトナル

一、此処ニ何日滞在スルカハ後方ノ追及情況ト前方ノ戰況トニ依ルコトナガラ、次ハ南京ヲ目

標トス、而シテ是ハ何トイフテモ首都ナレバソウ易々トハ陥落セザルベク或ハ上海戰ノ狀況
デ一部ニハ突出スルコトモアラン、然ルニ部隊ノ携帶彈藥ノミデ以テ着手スルハ迂濶ナリト
判断セザルベカラズ、急グトシテモ後方ノ狀況ヲ確メテ南京ノ最前線ニ到着シテ戰闘開始ス
ル頃ニハ後方ノ補給円滑ナリト見込立タザレバ前進スベキニアラズ、是ガ全般觀念ナリ
一、然ルニ軍司令官ハ南京西南方ノ道路上ニ敵ノ部隊ガ西行シアリトノ飛行報告ヲ受ケテ直ニ
南京ノ敵ハ退却スト判断シ、本朝命令ニテハ南京ニ向ツテ敵ヲ追撃スベシトイフコトニナリ
タリ、六十師團ノ敵ノ殘部ハ皆南京ニ集結セリ、其ガ果タシテ南京ヨリ退却スルヤ否ヤハ？
ナリ

カカル兆候ヲ速決シテ南京ノ敵ガ退却中ナリトノ判断ハ或ハ過早ニアラザルカ

一、草場部隊ハ此夕、白兎鎮ヲ占領シテ兵力ヲ其前方ニ集結ス

◇十二月三日〔四日〕晴天 丹陽城外

一、本日丹陽在休養ス

一、早朝貴族院ノ慰問団中ノ一人徳川義親侯爵來訪ス、朝食ヲ提供シ且本人ハ是非第一線ノ銃
砲声ノ來ル処迄出度シトノコトナリ依ツテ予ガ副馬ヲ与ヘテ宮本大尉、大須賀中佐ト共ニ白
兎鎮ニ追及セシム、彼大喜ナリ

一、宮本大尉ヲ前線ニ派遣シテ前線ニ活動中ノ各兵種ノ隊長ニ謝勞頒賜トシテウキスキ、ウ
エストミンスター及恩賜ノ煙草30本ヅツヲ贈リテ我等ハ休養シアリテノセメテモノ心慰メト
セリ

一、一日室ニ在リテ洗濯、入浴、次ノ食料ノ準備ヲ為ス

一、江陰要塞陥落シ鎮江ニハ第十一師ノ天谷旅團ヲ基幹トスルモノ之ヲ攻略スル予定トノコト
一、第九師ハ句容ノ西方四里ノ処ニアリ

徳川義親 一八八六—一九七六

(明治19〔昭和51〕明治・大正
・昭和期ノ華族〔侯爵〕。松平慶
永(春岳)の六男、母は勇子。
東大卒。尾張徳川家の養子とな
り、襲爵。貴院議員。一九一四
(大正3)徳川生物学研究所
を、'27(昭和2)徳川林政史研
究所を設立した。貴院改革を唱
え、'25治安維持法の制定に反対
したが、同年慈善ダンスパーテ
ィーを黒龍会に攻撃され、議員
を辞職。この間、「源氏物語繪
巻」の研究・保存、聲教育など
に活躍。'31の3月事件で大川周
明に資金を援助し、'36の二・二
六事件では栗原安秀中尉に連絡
をつけようとし、反乱幫助罪容
疑となるが不起訴。'41ラッフル
ズ博物館長となりマレー語を研
究。'44帰国し、終戦工作を行な
い、敗戦後、日本社会党結成を
支援し、資金援助をした。党顧
問となるが公職追収。'56自民党
推薦で名古屋市長選に立候補し
たが落選した。日ソ交流協会会
長。(『コンサイス人名辞典』)

師團副官II歩兵大尉 宮本四郎 34

夕刻大須賀中佐ノ報告ニ依レバ草場部隊ハ本日句容ノ陣地前ニ推進シ、明払曉ヨリ攻撃開始スルトノコトナリ

一、徳川義親君ハ予ノ副馬ニ乗ツタ儘草場少將ト同行セリト云フ

一、参謀長ハ明日日出発シテ可成前方ニ在ル方凡テノ処置ニ好都合ナリトノ理由ノ下ニ明日日出発説ヲ唱フ、然シ是ニハ軍命令ニ対シ面目上ノ顧慮相当強ク加ハリアリ
後方未〔ダ〕追及セズシテ戦力ヲ前方ニ延伸スレバトテ結局ハ南京ノ手前ニテ停止シテ待ツコトトナルベシ

軍ノ敵情判断ニハ輕率ト思ハルル点アリ、又面目ナドハ妄リニ考フルニ及バズ、吾人ハ實質的ニ行動スルヲ主義トスルモノナリ專田中佐モ滯留案、然シテ今日迄ノ行動ヨリスレバ一日二日ノ休養ハ当然ニシテ其モ前方ニハ既ニ一旅団ヲ基幹トスル部隊ヲ出シ追撃セシメアリ、何モ師団全力ヲ進ムル必要モナシ

一、依リテ予ハ更ニ一日滯留スルコトニ決シタリ
一、然ルニ夕刻ニ至リ

野砲ハRSTノ外全部到着シ、歩兵ハ33iノ大小行李未着、輜重及野戰病院ノ一部モ途中追及ノ見込立ツ

一、殊ニ兵站自動車隊ハ金檀城ヲ迂回シテ明朝丹陽ニ到着ノ軍通報アリ

一、状況如此ナレバ後方モ至極確實トナリタリト云フヲ得ルヲ以テ

予ハ中沢案明日前進ニ決セリ

但明朝到着スル兵站自動車隊ノ車輛ヲ以テ正午頃ヨリ司令部ハ一氣ニ句容ニ躍進スルニ決ス

一、夕刻行李ヲ収メテ明日ノ出発ヲ準備ス

◇十二月四日 晴天 丹陽滯在

◇十二月五日 晴天 丹陽↓祝家辺

一、深更軍ノ通報アリ、兵站自動車ハ金檀城ノ手前橋梁大破壊ノ為遅レ、夕刻ニアラザレバ丹陽着ノ見込ナシト、依リテ車行ヲ變ジテ騎行トシ午後九時出発シ先ヅ白兔鎮ニ次デ大平庄ヲ經テ句容ニ入ラントセシモ

(1) 草場部隊ハ正面ニ歩兵一中隊ト砲兵ヲ残置シテ他ヲ以テ右マハリ句容―湯水鎮道方面、句容ノ敵ノ側背ニ迂回セリ

之ガ為句容ニ入ル能ハズシテ祝家辺ニ止ル

(2) 此夜草場部隊トノ連絡絶エ状況不明トナル

(3) 此頃ヨリ草場部隊ハ成可迂回迂回スルモ常ニ正面ト連繫ナキ迂回ニシテ、句容ノ直前ニハ僅ニ歩兵一部隊夫モ句容攻撃任務トイフヨリモ砲兵掩護ノ任務ナリ

是程ノ迂回行動ハ是非共統制スルノ要アリ

◇十二月六日 祝家辺↓句容

前夜句容ヨリ歩兵中隊侵入シ之ヲ占領シタルモノト知り且又草場部隊ト速ニ連絡シテ前面ノ状況ヲ確メン為先ツ句容ニ向ツテ前進ス

一、句容ノ橋梁破壊セラレアリ、且又其北方本道上ニ敵ノ小機銃アル為、一方砲兵ノ追及ナキ為之ガ突撃ハ損傷大ナレバ、砲兵ノ一部ニ推進ヲ命ジテ射撃セシメタルモ、此夜ノ前進見込立タサレバ本夜句容ニ宿營スルコト、ナレリ

一、此夜草場部隊トノ連絡確實ナラズ

佐々木部隊ノ一部ハ山中ニ入りタルラン

大須賀 応 27期 16師団参謀

参謀長 歩兵大佐 中沢三夫 24期

第十六師団参謀 騎兵中佐 專田

盛寿 30期

RST 野砲兵第二十二聯隊聯隊
段列

◇十二月七日 晴天 句容—陸軍砲兵学校(宿營)

一、句容ヲ出發シ兎モ角草場旅団司令部ト会シテ前面ノ狀況ト部隊ノ態勢ヲ擷ムベク本道ヲ急進セシモ遂ニ行進交叉シテ会スルヲ得ズ

一、逐次着スル情報ニヨレバ本道方面ノ部隊ト草場部隊トハ中間ニ間隙出来約二里隔離シアルモノノ如シ

一、一度主力ヲ本道兩側ニ進マシムベク計畫シ又別案トシテ本道左側方面案モ有セシガ現状ハ何レノ案トモナラズ、本道ノ右ヨリ正面十kmニ亘テ分散セル狀況トナリタリ、分水嶺通過後如何ニシテ之ヲ統制スベキカハ問題ナリ

本道上ニハ33iノ一大隊ヲ前衛トシテ前進セシメ砲兵其他師団車輛部隊全部ハ本道上ニ前進セシメアリ

一、陸軍砲兵学校ノ台上ニ至リ湯水鎮ノ盆地ヲ望メバ各方面ニ掩蓋MG座アリ、敵ノ存在スルヤ否ヤ不明ナルモ、之レハ本道デハアリ且迂回部隊ガ手ヲツケズシテ前進シタルモノナレバ是ヨリ後高地線ヲ下リテ盆地ニ入ルニ何等処置ナクシテ入ルベカラズ、依リテ33i第一大隊ヲ右翼ヨリ進マシメ砲兵及聯隊砲(9iノモノヨリ)ヲ展開シテ先ヅ一通リMG座ヲ射撃セシメ、大体一通リノ打撃ヲ加ヘタル後歩兵ノ前進ヲ命ジタルガ、歩兵ノ前進スルヤ始メテ敵ノ小銃MGノ射撃ガ開始セラレ、始メテ相当ノ敵ノ抵抗ガアルコトヲ知リタリ

矢張戦闘ハ搜索ガ必要ナリ

9i聯隊砲ハ一門一MG座ヲ配當シテ射撃セシメタルガ成績概シテ良好ナリ

之ニ反シテ砲兵ハ聯隊砲ノ間ニ割リ込ミテ陣地進入シ、直前断崖上ノ稜線ニ暴露陣地ヲ占領シテ其射撃其行動誠ニ狼狽多シ射撃トシテモナツチョラン、此儘乱射乱発ヲヤリタレバ又中隊長ヲ怒鳴リタリ

斯クテ稜線上ニ砲兵ガ暴露集結シタレバ、敵ノMGト迫撃砲ノ御見舞ヲウケ漸次損害ヲ出

スニ至レリ

予ハ道路北側陣地ニ在リテ聯隊砲ト砲兵ノ射撃ヲ指導シアリシガ敵ノ迫撃砲ノ彈着二三ヲ見タレバ之ヲ避クル為道路南側野砲兵隊觀測所タル独立家屋ニ至リ、其一側ニ在リタル聯隊砲ノ下方防楯ナキ為砲手ノ膝下ヲMG彈ニ曝シアルヲ以テ、土煉瓦ヲ以テ之ヲ防グコトヲ指図シアリタル際一発ノ小銃彈ハ来リテ左鎖骨ヲカスリテ貫通セリ

尤モ独立家屋ニ遮蔽シアリタルモノナルガ其外側ニ垣アリテ杭アリタレバ之ニ跳リテ〔跳飛シ〕来リタルモノナルベシ、側ニアリタル兵ハ左肩胛部ノ擦過傷ヲ受ケタリ

瞬間ニ於ケル感覺ハ鎖骨ヲ貫通セズト感ジタレバ大シタコトナント思ヒ徐々ニ外套ヲトリ応急の手当ヲ宮本大尉ニ頼ンデ血止ノ為再ビ腹巻ヤ千人鉢〔針〕ヲ締メ上ゲタリ

暫時該処ニ腰カケ休憩セシモ爾後皆ガ皆無用心ニ此觀測処ニ集合シ来リ目標ヲ表ハス度ニ敵彈ヲ誘引スルノミナラズ、敵ノ迫撃彈モ此方ニ向キタルヲ見タリ

混雜ヲサケ危険ヲ避クル為閑ヲ得テ本道上ノ凹道ニ入り次デ一氣ニ砲兵学校ニ歸レリ当初負傷シタルケ処ニ軍医部長来リ治療セントセシモ、兵卒ノ眼前ニテハ考慮スベキコトナレバ容諾セス

帰途各種車輛混雜シテ道路閉塞セル側ニテ此家ニ入り治療セントセシモ、兵ニ師団長ノ負傷ヲ知ラシムルコトガ統率上不利ナリト信ジテ、予ハ聞カズシテ痛サヲカクシ遂ニ砲兵学校ニ手取〔辿〕リツキタリ

此処ニ軍医部長ノ手当ヲウケタルガ至極輕傷ナリ

唯為念破傷風ト瓦斯エソニ對スル予防注射ヲナス

一、夕刻ニ至リ喝〔渴〕ヲ覺フ、注射後三十七度頭痛ヲ覺フ、此夜花岡ト天竜寺和尚ニ看護ヲ依頼ス

一、夜半、見舞者ヨリ安眠防〔妨〕害セラル

内山少將ヨリポートワイン、ジャポテン、チョコヲ見舞トシテ贈ラル

從軍画家 花岡万舟

村上独潭和尚

野戦重砲兵第五旅団長 内山英太

郎 21期

- 一、始メ傷部ノ直接痛ヲ感ジ、又筋ニハ極メテ微痛ヲ感ジタルモ、睡眠足ルニ從ヒテ気分モ治リ傷部ノ痛モナヘテ輕減セリ
- 一、デモクラシイノ頭ノ人ニハ師団長ヤ聯隊長ハ戦死モ負傷モセズ戦死傷者ハ兵ノミトイフ感
〔觀〕念ヲ有スルモノアリ、彼等ニ対シテハセメテモノ申訳モ立ツベシ
- 一、真ニ第一線ノ状況ヲ知ル為（之ヲ知ラザレバ図上戦略トナル）
- 一、時々第一線將兵ヲ慰勞スル為（戦場ニ苦勞ヲ共ニス）
- 一、予ハ幸運ナリ、負傷セルモ極メテ輕傷ナリ生理的機能ニ何等支障ナシ 無傷モ幸ナリ負傷シテ極メテ輕キハ更ニ幸福ナリ

武運尚未ダ尽キズ

謹ンデ神ニ感謝ス

◇十二月八日 晴天 砲兵学校↓湯水鎮

- 一、前夜33 iノ第一大隊ハ東方ヨリ、9 iノ第一大隊ハ北方ヨリ湯水鎮ニ突入シテ之ヲ占領シタリ
 - 一、八日朝本道ヲ突進シテ分水嶺附近ノ小敵ヲ驅逐シテ進ムノ報アリ
 - 一、八日朝部隊ハ湯水鎮ニ入り、車輛部隊ハ湯水鎮東北端ノ橋梁及對戰車壕ノ改修ヲ待チテ前進ス
 - 一、師団戰鬥司令所ハ乘馬シテ先行シ、予ハ橋梁ノ改修ヲ待チテ午後五時出發湯水鎮ニ至ル
（歩兵一中隊ノ警戒ヲ解キ歩兵衛兵ト共ニ自動車行）
 - 一、司令部ノ宿舍ハ温泉旅館ラシク各室ニ湯ノ設備アリ、湯質ハ明硬ラシキモ温度ハ四十度前後シタリ、好適ナガラ負傷シタ結果入湯ノ出来ザルハ一寸遺憾ナリ
- 此夕分散セル各縱隊ノ連絡成リ其情況ヲ明ニスルヲ得タリ

- 一、昨日見舞ヲウケタルニ本朝聞ケバ内山少將ハ胃痙攣トカニテ休養シアリトイフ
- 一、今夜モ又花岡ヲ室ニ止メテ看護ヲ頼ム

十二月九日 晴天 湯水鎮↓湯山頭歩兵学校

- 一、前夜本道ノ兩大隊ハ本道ヲ突進シテ隘路口ニ進出シ右方面38 iノ主力ハ少シク後方ニテ同ジク隘路口左方面20 iハ左下リニテ岩壁ニ引カカリアリ一寸鳥草ニハ進出シ能ハザルベシ
- 一、大体山徑ヲ越ヘテ所謂南京平地ニ進出シ得タリ、爾後ハ各方面各所ノ障碍ヲ排除シテ占領シ易キ一地区一地区毎ニ躍進ヲ続行スルヲ企圖ス
- 一、午前九時半戰鬥司令所ハ前方ニ躍進ス予ハ午後三時出發躍進予定ナリ
- 一、正午前軍司令官朝香宮殿下ヨリ御見舞トシテ御附武官ヲ差向ケラレ御見舞品ヲ頂戴ス感激ノ至リナリ

一、軍作戦主任來ル

砲兵及戰車ノ行軍宿營区処ノ件ヲ話シテ置ク

- 一、33 iノ第五中隊ハ警備ノ為殘留ス、師団歩兵衛兵ト共ニ司令部入浴セシム

句容入城前ノ所感

隔丘森遙望白塔 無風白煙如競高
根底没有迫不及 白塔從容聳九泉

- 一、朝來隘路口ニアル五貴山及孟家庄高地ノ敵ニ對シ9 i第一大隊ト33 iノ第一大隊ハ之ヲ攻撃シ野砲及輕榴一中隊之ニ協力シテ攻撃進抄ヲ図リ、正午過ニ至リテ協調成リ午後二―三時頃見事ナル突撃決行ニヨリテ兩高地ヲ占領シ、又砲兵ハ夏家場付近ニ退却中ノ敵ニ對シ氣球ノ射撃指導ニヨリ追撃射撃ヲ実行シ兩大隊ハ敵ヲ急追シテ、夕刻ニハ下麒麟〔麟〕門ニ入ル
- 一、予ハ午後五時出發歩兵学校ニ躍進ス、當時戰鬥司令所ハ尚前方ニ在リ、依リテ速ニ復帰シテ戰況報告セシム

軍作戦主任 騎兵大佐 西原一策
25期

一、午後五時頃參謀長歸來シテ爾後ノ戰鬪指導ニ関スル処置ニツキ報告アリ、之ニ依レバ紫金山北方ニ33iヲ増加シ結局佐々木旅団ヲ該方面ニ、本道前面ニ草場旅団ヲ使用シ、砲兵ハ一大隊宛ヲ兩旅団ニ、爾余ニ野砲十二ノ一大隊ヲ加へ、三大隊ヲ本道方面ニ用フルコトトナリ歩兵ノ兵力ヲ全ク二分スル案ニシテ、既ニ之ヲ33i長ニ命ジタリトノコトナレドモ尚取返シノ余地アリトノコトナレバ、此案ヲ修正シテ佐々木支隊ハ依然三大隊基幹トスルコトトセリ

一、此結果中沢大佐ハ直ニ自動車ニテ33i長ノ許ニ急行シタルハ可ナリトシテ中々歸リ来ラズ宿營命令モ下サス午後八時ニ至ルモ明日作戦命令ノ準備モ出来ズ、之ト同時ニ參謀長ノ狀態不安トナリタレバ午後七時半小林独〔曹?〕長ニ伝令ニテ附シ連絡ノ為突〔派〕遣ス

一、參謀長ト共ニ大須賀作戦主任モ前方ニ残留シアリタレバ、專田中佐ニ筆記セシメ作戦命令ノ起草ヲ為シ、若シ速ク歸レバ之ヲ骨子トシテ再攻〔考〕セシムベク、歸來遅ケレバ此儘要旨命令トシテ下達スベク準備中、午後八時二十分中沢大須賀兩名歸來シタレバ該案ヲ渡シタル上、内山砲兵ニ要求シタル件戰車トノ協定事項並ニ明日ノ交通整理ノ件ヲ伝ヘテ爾後ノ処置ヲ講ゼシム

一、此夜歩兵学校宿營者ニ敵眼ニ対シテ絶対ニ遮蔽スルコトヲ命ジ、且火災予防巡察ヲ命ジテ取締セシメタルヲ以テ少クモ校内ニ在リテハ失火ナキヲ得タリ

一、軍ガ後方ノ追及ニ関シテ少カラズ配慮スルニ至リ、彈藥ハ逐次到着シ当分歩兵学校ヲ以テ彈藥集積地トナシ、野砲聯隊段列ナキヲ以テ兵站自動車隊ヲ第一線ノ直後マデ推進セシムルコトトシ、先ヅ先ヅ彈藥ノ補給ハ間ニ合フコトトナレリ

☆此日飛行機ノ捉來セル軍情報ニ依レバ、第九師団ノ一大隊ハ本日夕迄ニ既ニ紫金山最高峰ヲ占領シタリトイフ

飛行機ノ誤認ヤラ第九師ノ誤報ヤラ不明ナレドモ眼前ノ敵情ヨリ推断スレバ余リニ虫ガ好過クルモノアリ、誤リカ功名心ノ発露カ真ニ淺間敷次第ナリキ、カカルコトガ真ナリト信シテ通報シ来ル軍司令部ノ情報主任モ又如何ハシキ男ト言ハザルベカラズ、參謀殿モ效ニ

至リテ聊カ低級ニ思ハザルヲ得ス

第九師団ニモ又相当功名心ノ権化アリテ自己宣伝スル奴アルガ如シ、真ニ可憐ノ至リナリ

◇十二月十日 稍暖ナリケレバ降雨ヲ憂ヒタルモ漸次好天トナル、但シ此日ハ終日薄モヤカカリアリテ通視ヲ妨ゲラレタリ

湯山頭陸軍歩兵学校↓下麒麟門

一、第一線ノ戰鬪ヲ計画的ニ指揮スル為、參謀長以下ハ午前九時出發、先ヅ下麒麟門附近ニ至ラシメ

予ハ午前十時過自動車ヲ以テ戰鬪司令部ニ向ツテ躍進ス

一、本朝本道兩側ノ正面部隊9iノ一大ト33iノ一大ハ上麒麟門附近ノ敵ヲ驅逐シテ馬群西側高地ノ敵ノ頑強ナル抵抗ヲ突破シ、又33iノ主力ハ紫金山東南角ヨリ稜線伝ニテ逐次頂上線ニ沿フテ前進シタルガ、頂上線各所ニハ掩蓋MG座アリトノ報アリ、或ハ急襲的ニ砲兵ノ援助ヲ要請シ来リタルガ此事ハ射線方面ヲ考フルヲ要スルモノニシテ、該頂上線ノMG座ガ恐クハ東北方ニ面シアルニアラザルカ、然ルトキハ軍直砲兵トシテ此目的ノ為ニハ何トナク彈丸ノ浪費ニ陥ルノ懸念大ナレバ、結極〔局〕野砲ノ一中隊ヲ33i長ニ配属シ急進セシメタリ

一、20iノ左翼ハ比較的前進シテ陸軍兵營ヲ占領シアルモ此方面砲兵ノ協力意ノ如クナラズ、9iノ富山大隊及第二大隊ノ二中隊ハ全ク草場少將ノ手裡ヲ脱テ本道ノ北側ニ至リ、大隊長及二中隊ハ山腹ニ在リテ正面ヲ避ケアルガ如シ、後程富山大隊〔青柳大隊〕ハ陣没將兵ノ慰靈塔〔桂林石屋〕付近ヲ占領シテ比較的有利ナル態勢ヲ作りツツアリ

一、33iハ觀理台北側高地ヲ占領シ引続キ最高峰ニ向ヒ前進シツツアリ

一、佐々木支隊方面ハ楊坊山乃至西方高地〔鷄宝山〕ニ在ル迫撃砲ヲ有スル四、五百ノ敵ヲ攻撃シ且ツ野砲ヲ以テ鎮江ヨリ退却中ノ五、六千ノ敵ヲ射撃セシム、直ニハ下関ニ突進スルコトハ容易ナラズ

33i長||歩兵大佐 野田謙吾 24期

作戦主任||歩兵中佐 大須賀 27期 忠

一、砲兵ハ今迄ノ如ク唯臨機応変的ニ本道近クノ第一線ニ協力シテ戦闘シタルコトハ確ナレドモ

(1) 其戦闘指導モ一モ計画的ナラズ、行キアタリバツタリ也

(2) 砲兵ノ観測配置ハ唯単ニ砲兵ノ戦闘任務ノ為ニアラズ、師団ノ為ノ一ノ情報収蒐機関ナルノ意義ヲ知ラズ、從ツテ本日モ此意味ニ於テ観測所ノ配置ハナシアラズ

一、砲兵モ砲兵ダガ幕僚モ又幕僚ナリ、從來ト同様歩兵ニ砲兵ヲ配属シタルト同様ニ放棄トイヘバ失言スルカモ知レヌガ放任主義ニアラザレバ無責任ニ勝手ニ戦闘セシメテ其結果ヲ知りテ後方ヨリ戦力ヲ培養シタ丈ノコト、進ンデ戦闘ヲ指導スルト云フ点ニ至ラズ
從ツテ

○本日敵ノ砲兵ノ砲種配置其活動状態モ知ラズ

○我砲兵ガ如何ナル時機如何ナル目標ヲ射撃セルカモ知ラズ

○歩兵ノ直前ノ敵情モ又唯敵ガ頑強ニ抵抗スルトカ掩蓋MG座ガアルトイフ丈ニシテ其配置ノ詳細ヲ知ラズ

結局司令部ガ戦闘ヲ直接指導スルノ意思ニ乏シトイフノ外ナシ

一、砲兵ニ観測配置、戦闘報告ヲ尋ネテモ少シモハツキリセズ、結極〔局〕之レハ矢張り行キアタリバツタリ戦闘

殊ニ昨夜ノ命令ニテ15K大隊ヲ併セ指揮スル様命令シタルモ、今朝十一時尙未ダ之ヲ掌握シアラズ

師団砲兵指揮官タル聯隊長代理ハ自己ノ大隊観測所ニ引ツケラレテ聯隊長半分大隊長半分、師団司令部ハハナレテモ第一線ニ在ルヲ至当ナリト考ヘ居ルニ似タリ

一、依リテ砲兵聯隊本部ノ観測掛ヲ自動車ニテ迎ヘタル上、前記ノ敵情ヲ尋ネテ見タガ矢張りハツキリセズ サレハ

明十一日ハ聯隊本部観測所ハ紫金山上紀念館東側△227高地ニ、換言スレバ戦闘司令部〔五

標松北側丘陵〕ニ在リテ全般ノ戦闘指揮スベキヲ命ジ、又観測配置ハ連絡及通信設備、効力射準備ヲ計画スルコトヲ要求セリ

特ニ陣地ノ変換ヲ要求セルガ、是等ガ明朝払曉マデニ仕事ヲ完成シ得ルヤ否ヤハ真ニ知ル能ハズ

一、午後五時半砲兵連絡者ニ砲兵ノ情况ヲ尋ネ直ニ之ニ明日ノ為ノ要点ヲ述ベテ実行ヲ命ジヌ
一、第一線諸隊ハ今夜森林ヲ有スル通視不十分ノ地方ナレバ、思ヒ切りテ石油ヲ利用シテ敵陣地ノ焼打セヨトノ命令ヲ下ス

☆本日軍ノ連絡ノ佐々木、9Dノ35iノ一大隊ハ真ニ16Dニ先ジテ紫金山本峰ニ進出シタルナド、一寸今日迄ノ自己宣伝ニ属スルモノトモ思ワルルガ軍司令部幕僚モ幕僚ナリ、果シテ可能性ノ有無位ハ考ヘソウナモノダガ無考ナリ然モ16Dノ作戦地境内ニ勝手ニ入りタルナド軍律ニ触ルルトカイフコトハ毛頭考ヘアラズ

此等ハ矢張り時代カズレノ出現ト見ルノ外ナシ

一、明日ハ基本的ニ所謂戦闘指揮ヲ為スベク至極面白カルベシ

◇十二月十一日 晴天 下麒麟門——馬群西側部落（於五顆松）

一、此日ヨリハ統一のニ計画的ニ攻撃ヲ指導セントシ先ヅ砲兵聯隊本部ノ観測所タル△227ノ山

ニ至リタルガ各方面トノ電話尚不通多ク從ツテ砲兵指揮官ハ全部ヲ掌握シアタハズ

一、兎角スル内無用心ナル人ノ敵ノ注意ヲ引キタル為迫撃砲ノ御見舞ヲ受ケタルガ殆ソド全部逸弾ニシテ後方ノ稜線脚下ニ展〔転〕落シ毫モ損害ナカリキ

一、此日佐々木支隊方面ニ在リテ烏竜〔山〕砲台ニ背射セラレツツ西碼頭附近ノ敵ヲ駆逐シテ夕刻堯化門ニ進出シ其西北高地ノ敵ニ対シテ攻撃中

一、師団主力右翼隊タル33iノ二大隊ハ紫金山頂△386ヲ占領シ次デ△371高地ニ進出シテ第一峯ニ対スル攻撃準備中

一、左翼隊タル草場旅団ノ片桐部隊ノ二大隊ハ無樑油西南側陣地ニアリテ中山陵及其南側陣地ニ対シ攻撃準備中ナリト稱シテ遂ニ夕刻之ヲ準備シテ終ル、

二、20 iノ一大隊ハ魏家鎮西側高地ヲ占領シテ魏家鎮ノ敵ニ対シアリ

20 i主力ハ孝陵衛附近ヨリ先ヅ溝山ヲ次デ財神磨東側85高地ヲ占領シテ直前ノ敵ニ対シテ次ノ攻撃ヲ準備スル筈ナリ

一、33 iノ此〔西〕南進行動ハ砲兵ノ協力少キガ為ト片桐大佐ニハ兵力ヲ前方ニ推進セシメザル為全ク進展セズ

一、元来此日ハ新參砲兵聯隊長ガ四大隊ヲ掌握シ得ズ是レ通信線切断モアリ或ハ又聯隊本部ノ主要機関ガ隊長ト共ニチブスニテ天津ニ残リタル為機関ノ不足モ原因ス

從ツテ師団ノ企図スル火力機動ハ意ノ如クナラズ唯草場旅団配属ノ一大隊ト他ノ一大隊ニシテ左ニ在リシモノガ直接草場部〔隊〕ニ連絡シテ20 iノ進出ヲ支援シ得タルヲ著シキ活動トス

一、夕刻ニ至リ右ハ第一峯ノ東側、片桐隊ハ中山寮〔陵〕ノ手前ニ又20 iハ孝陵衛北側高地ニ在リ、当時第九師団ノ35 iハ遺族学校西南側高地ニ在リトイフ功名話アリタルモ明ナラズ要之右左ガ進出シテ中央片桐部隊ガ後退シアリ

一、此日正午頃朝香宮殿下ニ謁シテ状況ヲ報告シ四方山話シテ司令所ニ帰ル 大宮御所ヨリノ贈物ノ分贈ヲ受ケ帰リテ司令部諸官ニ分配ス

一、此夕天津市ヨリ通信員来リ青木亮貫ヨリ贈リ物ト留守宅ヨリ預リ来リタル強壯菓ト褌トヲ受取ル〔悦子〔妻〕ノ手紙アリ〕

又野戰郵便等到着シテ知行〔長男〕ヨリノ通信アリ中ニ乙女〔郷里〕ノ姉共〔マツトマサ〕ノ写真アリ大姉〔*マツ〕ノ衰弱シテ骨ト皮ノ様ニナリアルニハ驚キタリ最初ハ誰ノ写真カワカラヌ程衰ヘアリタリ小生帰朝マデ達者デ居ルヤ否ヤ一寸信ジ難キ程ナリ

一、此夜20 iハ夜襲ヲ以テ西山〔溝山・中山門外約二キロの丘陵〕ヲ占領シタルガ敵ハ南京防禦

ノ鎖鑰点ヲ占領セラレタル為四回ニ互リ逆襲シ来リタリ全夜殆ソド絶エ間ナクMG声ヲ聞ク

一、砲兵ハ射程大ナル為此夜大部ヲ前方ニ推進シ聯隊本部モ又前方ニ移ル

◇十二月十二日 晴 但薄霧アリ 小五頼松

一、早朝前面ノ状況ヲ確メタルニ概シテ次ノ如シ

佐々木支隊ハ堯化門ヲ越ヘテ西進中 33 iハ第一峯東側安〔鞍〕部ニ在リ

片桐部隊ハ依然中山陵ノ手前ニ在リ彼曰ク中山陵ハ極メテ堅固ニシテ攻撃困難、然ルニ20 iハ大ニ進出シタレバ9 iノ右大隊ヲ左ニ移シタリトイフ他人ノ褌デ角力ヲ取ラントスルモノ是デハ師団ノ企図スル左翼隊右方面ヨリ戦局ヲ進展セシムルコトトナシアリシニ然ルニ片桐ハ難ヲ避ケテ易ニツクノ処置ヲ取レリ

!! 大隊長ハ兩名共勇敢ナルモ彼聯隊ノ長ノ為活躍ノ余地ナシト見テ二大隊指揮ヲ青柳少佐ニ委シタル後大佐ハ予備隊ノ位置ニ後退セシムベク決心シ一応統帥系統上草場少将ニ意見ヲ求メタルニ少将ハ直ニ司令所ニ来リ

何トカシテ局面ヲ打開セシムルヲ以テ一任セラレタシトイフ
依ツテ一ト先之ニ一任スルコトトセリ

乍然實際ニ於テハ依然トシテ進展セズ 中山陵ヲ奪取セシモ其ハ33 iガ第一峯ヲ奪取シタル後即敵ガ其鎖鑰点トセル第一峯ト西山ノ高地ヲ奪ハレテ戦意ヲ捨テテ退却ヲ開始シタル後落梨ヲ拾フタルニ過ギズ

一、此日砲兵ハ陣地ヲ整理シテ前方ニ進メ又第一峯ヲ射撃スベク野砲一中隊ヲ33 iニ配属シニ方面ヨリ第一峯ヲ射撃セシム

一、中山陵既ニ敵兵少ク〔或ハナシ〕片桐部隊僅ニ進出シタルガ如キモ大ナル成果ニアラズ一、昨夜西山ヲ取り本日午後五時三十五分又遂ニ第一峯ヲ占領シ南京東面ノ主支撐点ノ略取ト共ニ敵ハ逐次退却スルニ至ル

一、更ニ城壁ニ抛リテ抵抗スルカト判断シ此夜ハ砲兵ノ陣地移動ヲ制限シ、夜襲阻止 明払曉攻撃 明日ノ計画攻撃ニ備ヘシム

一、全ク日没ニ至リタルモ昨夜ニ比シテ極メテ静ニシテ逆襲モナク又MG射撃モナシ恐クハ退却カ逃避シタルナラン

果シテ然ラバ南京城ハ茲ニ第十六師団ノ第一峯及西山占領ニヨリテ陥落ノ動機ヲ造リタリ一、深更三時夢ヲ破リテ救援ヲ求ムルモノ10K大隊本部及第一中隊、集成騎兵隊アリ此等ハ南京外線ヨリ又ハ城内ヨリ退却逃避セントスル敗殘兵ノ為ニ襲ハレタルモノナリ

一、後方ナレバ安全ト横着ヲ極メテ警戒モセズ奇襲セラレテアハテ来リタル言ニハ千人トイヒ二千トイフ大ゲサナコトナリ

司令部ニテハ予ガ速ク醒メタレバ幕僚副官ヲ起シテ応急処置ヲ講ゼシム

◇十二月十三日 天気晴朗

早朝20iノ將校斥候ハ中山門ニ入りテ敵兵ナキヲ発見シ茲ニ南京ハ全ク解放セラレタリト知ル

一、33iハ第一峯ヲ下リテ午前八時天文台ヲ占領シ次デ各隊ハ逐次城壁ニ迫リタリ於茲砲兵ヲシテ万ニ備ヘシメ歩兵工兵協同機堂〔動〕ノ上ヲ全ク帰〔期〕シテ徐々ニ城内ノ清掃ニ任ズベク処置ス

又昨日来佐々木支隊方向ニ於テハ南京ヨリ脱出シタル敵ト鎮江方面ヨリ退却シタル敗殘兵トニ会シテ進行遅延スルト共ニ後方ニ相当ノ掩護兵ヲ残置シアリ

下関ニ進出ノ時機ヲ失スルノ憂アリ依リテ33iニハ速ニ大〔太〕平門ニ下リタル後主力ヲ以テ直ニ玄武湖東北側ヲ経テ旅団ニ追及スルヲ命ズ

(昨日既ニ一大隊ヲ分派セリ)

又前方ヲ追及セントスル野砲二中隊輕榴一中隊ヲ反転セシメテ直ニ佐々木支隊ヲ追及セシム

輕榴＝十榴の意

一、騎兵聯隊ハ午後一時頃始メテ下麒麟門ニ到着シタレバ直ニ佐々木支隊ヲ追及セシム

一、昼間ニ於テ敗殘兵ハ仙鶴門附近ヨリ概シテ紫金山東側林道ニ進出シテ我後方部隊ヲ騷擾セシムルモノアリ依リテ予備一中隊ヲシテ之ヲ掃蕩セシメ紫金山西南南側ハ片桐部隊ヲシテ掃蕩セシム

一、正午過20iノ先要〔発〕ノ大隊ハ城内ニ入りテ掃蕩ヲ開始ス

○予ハ第九師団ノ先ヲ争フテ入城セントスル当初ヨリノ面白カラザル心ニ不快ヲ感ジ居ルモノナレバ中山門ヨリノ入城ヲ止メテ彼等百姓根性ノ奴ニ譲リ、旁々下関方面ノ戦鬪ノ進捗ヲ指導スル為メ該方面ニ転進スルニ決シ

中沢大佐ヲ草場少將ノ許ニ出シ中山門方面ノ状況ヲ確ムルト共ニ其後ノ処置ヲ一任シタル上出發スルコトトシタル処紫金山東方道路ハ敗殘兵ニ遭遇スル公算多ク富貴山附近スラ安全トナレバ此方面ヨリ転進スルヲ可トスルヲ以テ之ヲ待チタルガ

午後一時中沢大佐ノ報告ニ依リ大〔太〕平門ハ之ヲ占領シ富貴山ノ清掃ニ付イテ此方面ヨリ転進スルヲ可トスル意見ニ同意シ直ニ西山戦鬪司令所ニ移転スルニ決ス

此日戦鬪指導ノ為此地ニ躍進スル為既ニ通信設備ヲ完成シアリタリ

一、天文台附近ノ戦鬪ニ於テ工兵学校教官工兵少佐ヲ捕ヘ彼ガ地雷ノ位置ヲ知り居タルコトヲ承知シタレバ彼ヲ尋問シテ全般ノ地雷布設位置ヲ知ラントセシガ、歩兵ハ既ニ之ヲ斬殺セリ、兵隊君ニハカナワヌカナワヌ

一、斯クテ西山郵便局ニ於テ爾後処理中午後六時ニ達シタレバ今夜茲ニ宿營ス

一、午後三時半佐々木支隊ハ下関ヲ占領ストノ報アリ

一、正午前後ノ敵爆撃機ハ南京市内ヲ爆撃ス

○昨夜33iガ第一峯ヲ占領スルヤ軍司令官宮殿下ヨリ賞詞アリ酒一樽ウキスキ一三、果物ヲ賜リタレバ之ヲ33iト之ニ協力セシ砲兵隊ニ分贈セリ

○一昨夜第一線各隊ノ奮闘ニ対シ聊カ謝意ヲ表スル為南京攻略後ノ祝酒トシテ携行セシ酒ヲ第

獨立攻城重砲兵第二大隊15Kの誤記

一線ニ追送分配シタリ

一、本日正午高山劍士来着ス

捕虜七名アリ直ニ試斬ヲ為サシム

時恰モ小生ノ刀モ亦此時彼ヲシテ試斬セシメ頸二ツヲ見込〔事〕斬リタリ

一、午後司令部ハ躍進シテ西山ノ麓ニアル郵便局ニ移リ此処ニテ事後処置ヲ為ス

一、閑ヲ得テ西山ノ古戦場ヲ視察ス

東側ニ鉢巻シタル散兵壕陣地ニシテ概シテ応急施設ニ属ス 之ニ依リテ見レバ支那側モ南京迄方攻撃セラルルモノトハ考ヘアラザリシナラン後ニ至リテ聞ク処ニ依レバ南京ノ電灯会社モ十三日朝迄運行シアリタリトモ云フ

一、昨日午後、中山劍士、捕虜七名、試斬、見込、斬リタリ
時恰モ小生ノ刀モ亦此時彼ヲシテ試斬セシメ頸二ツヲ見込〔事〕斬リタリ
午後司令部ハ躍進シテ西山ノ麓ニアル郵便局ニ移リ此処ニテ事後処置ヲ為ス
閑ヲ得テ西山ノ古戦場ヲ視察ス
東側ニ鉢巻シタル散兵壕陣地ニシテ概シテ応急施設ニ属ス 之ニ依リテ見レバ支那側モ南京迄方攻撃セラルルモノトハ考ヘアラザリシナラン後ニ至リテ聞ク処ニ依レバ南京ノ電灯会社モ十三日朝迄運行シアリタリトモ云フ

「中島今朝吾日記」(部分)

一、陣地内ニ獵用12番ノ彈藥アリ収集シ婦ル銃ヲ探シタルモ見当ラズ後兵キ〔器〕部員大中少佐ガ12番ノブローニングヲ発見シ呉タリ

之レハ近接防禦ノ為兵ガ携行シタカ將又銃砲店主ガ自主的ニ戦線ニ参加シタルカ何レニシテモ近迫戦ニ散弾ヲ使用シタル考案ハ予ノ天津、大連ニテ自衛用トシテ獵銃ヲ探シタルト相

似タル点アリ

一、夕刻附近ノ独立家屋(医者ノ別邸ラシキモノ)ニ宿泊ス

◎捕虜掃蕩

一、十二日夜仙鶴門堯化門附近ノ砲兵及騎兵ヲ夜襲シテ尽〔甚〕大ノ損害ヲ与ヘタル頃ハ敵モ亦相当ノ戦意ヲ有シタルガ如キモ其後漸次戦意ヲ失ヒ投降スルニ至レリ

一、十二日夜湯水鎮附近ニモ敗殘兵ノ衝突アリタリトテ軍司令部衛兵、警備中隊ガ戦鬪シタリトテ師団輜重ノ通行中、彈藥補給ヲ要求セラレタリト云フ

一、宮殿下ノ御身辺ヲ護衛スルノ必要ヲ感ジタルヲ以テ參謀長ハ一―二中隊ヲ増派セントシテ之ヲ軍參謀長ニ打合セシメタルニ既ニ

*第九師団ヨリ歩兵一コ聯隊ヲ出シタリト云フコトヲ聞ケリ

己レノ作戦地境内ニハアラズ又第九ノ隊ハ第十六ノ隊ヨリ近キニアラズ敗殘兵ニ対スル目的ヲ以テ歩兵一コ聯隊ヲ派遣シタル人ノ心ノ底ハ真ニ同情ニ値スルモノアリ依リテ我方ハ手ヲ引キタリ

一、此日城内ノ掃蕩ハ大体佐々木部隊ヲ以テ作戦地境内ノ城門ヲ監守セシメ草場部隊ノ二大隊ヲ以テ南京旧市ヨリ下関ニ向ツテ一方の庄迫ヲ以テ掃蕩セシムルコトトセリ

一、然ルニ城内ニハ殆ンド敵兵ヲ見ズ唯第九師団ノ区域内ニ避難所ナルモノアリ老幼婦女多キモ此内ニ便衣ニナリタル敗兵多キコトハ想察スルニ難カラズ

一、中央大学、外交部及陸軍部ノ建築内ニハ支那軍ノ病院様ノモノアリ支那人ハ軍医モ看病人モ全部逃ゲタラシキモ 一部ノ外人ガ居リテ辛フジテ面倒ヲ見アリ

出入禁止シアル為物資ニ欠乏シアルガ如ク何レ兵ハ自然ニ死シテ往クナラン

此建築ヲ利用セルハ恐クハ外人(数人アリ)ト支那中央部要人トノ談合ノ結果ナルベシ

依リテ師団ハ 使用ノ目的アレバ何レヘナリト立除〔退〕クコトヲ要求セリ

又日本軍ガ手当スルコトハ自軍ノ傷者多キ為手ガマワリ兼ヌルトシテ断リタリ

一、斯クテ敗走スル敵ハ大部分第十六師団ノ作戰地境内ノ森林村落地带ニ出テ又一方鎮江要塞ヨリ逃ゲ来ルモノアリテ到ル処ニ捕虜ヲ見到底其始末ニ堪ヘザル程ナリ

一、大体捕虜ハセヌ方針ナレバ片端ヨリ之ヲ片付クルコト、ナシタル「レ」共千五千一万ノ群集トナレバ之ガ武装ヲ解除スルコトスラ出来ズ唯彼等ガ全ク戰意ヲ失ヒゾロ／＼ツイテ来ルカラ安全ナルモノ、之ガ一旦「騷」擾セバ始末ニ困ルノデ

部隊ヲトラツクニテ増派シテ監視ト誘導ニ任ジ

十三日夕ハトラツクノ大活動ヲ要シタリ乍併戰勝直後ノコトナレバ中々実行ハ敏速ニハ出来ズ 斯ル処置ハ当初ヨリ予想ダニセザリシ処ナレバ參謀部ハ大多忙ヲ極メタリ

一、後ニ到リテ知ル処ニ依リテ佐々木部隊丈ニテ処理セシモノ約一万五千、大「太」平門ニ於ケル守備ノ一中隊長ガ処理セシモノ約一三〇〇其仙鶴門附近ニ集結シタルモノ約七八千人アリ尚統々投降シ来ル

一、此七八千人、之ヲ片付クルニハ相当大ナル壕ヲ要シ中々見当ラズ一案トシテハ百二百二分割シタル後適當ノケ「カ」処ニ誘キテ処理スル予定ナリ

一、此敗殘兵ノ後始末ガ概シテ第十六師団方面ニ多ク、從ツテ師団ハ入城ダ投宿ダナド云フ暇ナクシテ東奔西走シツ、アリ

一、兵ヲ掃蕩スルト共ニ一方ニ危険ナル地雷ヲ発見シ処理シ又殘棄兵キ「器」ノ收集モ之ヲ為サザルベカラズ兵キ「器」彈藥ノ如キ相當額ノモノアルラン

之ガ整理ノ為ニハ爾後數日ヲ要スルナラン

◇十二月十四日 西山高地野滞在

一、此日尚城内ノ掃蕩未完

加之城外ニ分散シタル部隊ノ集結、敗殘兵ノ処理等ニ大多忙ヲ極ム

一、花岡ヨリ中山陵視察ヲ進メラレタルモ地雷ノ尚未ダ整理出来ザル時万一ノ事デモアツタ時

師団長ハ見物ニ出テ地雷デ怪我シタトアリテハ武士ノ面目丸潰レナレバ一切他出セヌコト、セリ

一、入城式ノ件、

予ハ中山門ヨリノ入城ヲ肯ンセズ

ソノ功名ヲ争フ奴隷アリ之等ト共ニ行動スルヲ恥辱トスレバナリ

十二月九日十日歩兵第三十五聯隊〔第九師団〕ノ一大隊ハ紫金山ヲ占領セリトノ報告セル

モノアリ

次デ此聯隊ハ我作戰地境内ニ進入シテ十日―十一日突擊路ヲ開キタル中山門ノ方向ヨリ一

番乗リヲ企図シタルコト是ナリ

師団ノ正面ハ紫金山ヨリ流レタル併行セル稜〔稜線〕ヲ越ヘ谷地攻撃ニ抱〔掛〕リテ谷地攻撃ヲ以テスルト此攻撃ハ是非高キ方ヨリ進マザルベカラズ 然ルニ第九師団正面ハ平地ニシテ又敵ノ主防正面ニアラザルヲ以テ速ニ光華門ニ近〔ヅ〕キ且其扉ノ破壊セラレタルヲゾキハシタレドモ入城スル能ハズ戰況發展セズ加之護城河ノ障碍アリテ進ミ難キヲ以テ敢テ他師団ノ区域ニ進入シ来リタルハ背徳行ヲ為モ亦甚シ

十三日朝我方20ノ一中隊ガ午前三時半突入スルヤ引続キ第35ノ件ノ大隊ガ進入セリトテ20
i ニテハ大ニ憤慨シアリタリ

次テ十三日夜湯水鎮ニアリタル軍司令部附近敗殘兵ノ攻撃ヲ受ケタルトキ第九師団ハ速ニ歩兵一聯隊ヲ護衛ノ為ニ派遣シタルガ如キハ第十六師団ノ作戰地境ヲ無視シ、タカガ殘兵ニ對シテ歩兵一聯隊ヲ出スナリ之ヲ巧言令色ノ行動ト見ズシテ何ゾヤ 以上ノ如キ奴ノ団隊ト共ニ南京ニ入城スルコトハ予ノ肯ンズル処ニアラズ依リテ予ハ南京入城ヲ彼等ニ譲リテ下関ニ向ツテ転入セントセリ

然ルニ幕僚間ニハ異議アリタルモノノ如ク師団長ハ屈シテ師団將兵ノ名譽ノ為ニ先登ニ立チテ中山門ヨリ齊々堂々入城スベシトノ意見アリタレバ是モ尤ノコトナレバ予ハ茲ニ中山門

ヨリ入城スルニ決セリ

◇十二月十五日 晴天ニシテ暖、中央飯店

一、既ニ一部掃蕩隊ガ入城シアリタルモ此日新タニ入城式ノ形式ヲ以テ南京占領ノ一段落ヲツクルコトトセリ

一、各隊ハ事後処理ノ任務遂行ニ差支ナキ範圍ニ於テ代表部隊ヲ堵列セリ師団司令部各部隊長培〔陪〕從ノ上午後一時三十分中山門ヨリ入城シ

国民政府庁舎ヲ師団司令部ニ充当シアリタレバ同庁舎ニ入り国旗ヲ掲揚シ各部隊長及將校ノ参列ノ上大元帥陛下ノ万歳ヲ三唱シ 今日コソ真ニ樽酒ニロツケ飲〔マ〕ントイフコトニシテ祝盃ヲ挙ゲタリ

一、次デ午後四時頃師団司令部宿舍ニ充当シタル中央飯店ニ入り宿泊ス

一、敗残兵掃蕩

十三日夜ヨリ各方面ヲ掃蕩スルノ必要ヲ感ジ軍ヨリ各師団ニ区域ヲ配当シテ之ヲ行フコトナレリ

一、十五日ヨリ直ニ実行スベキモ一ト先入城ノ上各隊ノ宿舍ニ落付カセ爾後輕裝シテ全員ヲ以テ之ヲ実行スルコト、シ十五日ハ宿營ノ応急設備トセリ

一、十六日十七日二日間ヲ以テ掃蕩スルコトトシ兩旅団ニ区域ヲ配当シ各隊ハ各併行路ニ一部隊ヲ進マシメテ隘路ノ出口ニ至リテ一泊シ翌日又同様ニシテ宿營地ニ帰還セシムルコトトス爾後ハ兩旅団ヨリ各一警備大隊ヲ出ササシメ他ノ二大隊宛ハ城内外ニ近ク宿營シ何時タリトモ一大隊宛ノ増援ヲナン得ル如クシテ待機姿勢ニ移ル

〔十二月十六日の記事なし〕

◇十二月十七日 晴天寒クナル 中央飯店

一、此日午後一時三十分ヨリ方面軍司令官各軍司令官ノ中山門ヨリ入城式アリ、各師団其他ノ

部隊ハ代表部隊ヲ堵列セシメ次デ予メ準備セル式場タル国民政府ニ至リテ国旗掲揚式、

大元帥陛下ノ万歳三唱 次デ祝宴ヲ設ケ式ヲ終ル

海軍側ヨリハ司令官長谷川〔清〕中將参加ス

一、当日マデ南京附近ハ殊ノ外暖カナリシガ午後ヨリ寒氣頓ニ加ハリ夜ニ入り小雪降りタリ

◇十二月十八日 晴天寒シ 中央飯店

城内飛行場ヲ慰靈祭場トシ第十六、第九、第三、第六、第十八、第百十四〔師団〕其他砲兵旅団外独立部隊全員集合ノ上壯嚴ナル慰靈祭ヲ行フ

一、予ハ兼テヨリ考案シアリタル宿舍ヲ軍官学校内校長官舎トシテ蔣介石ノ為ニ建テタル家ニ引移リ

一ハ中央飯店ノ煩ヲ避ケ一ハ部下ヲシテのんびりセシメントシタルガ帰途立寄りテ下検査セリ

一、南京入城前後ノ往来

(1) 西本願寺法主大谷光照慰問ノ為来訪

(2) 青木亮貫一行ガ留守宅ヨリ預リ来リタル「リユクサク」ヲ受取ル中ニ手紙ト鹿皮シヤット沢山ノ禪トアリタリ

(3)

於常州城

上陸直進軍攻略常熟無錫常州更占領丹陽城 整軍容 準備南京攻略

泥濘連雨行路難

車不通歩行不易

大道橋壞修復進

集舟進軍正南船

常熟攻撃我砲無
熟果落碎僅拾片
無錫攻略何讓
勿言火砲僅三門
敢以機動進又勝
常州奪取勢所然
江上風荒揚？滯
行李輜重在上海
前後相距八十里
集結不成機難逸
更進鋒屠丹陽城
休兵準備南京攻

第九聯隊大原隊第四中隊第三小隊一等兵松村清太郎
塘沽碇泊大隆丸古川虎三郎天津丸

昭和十二年十二月中旬

支那事變第三号

南京以降〔以上、日記帳表題〕

濟南をぶんに過ぎて

さいなんをよけて通れば

養安大安の

除 愁（徐州）

かなしみよけの銅山の空

かたくともすかたやさしく

（蘭）すくな葉に

こころの花のかほり

ゆかしき

一、昭和十二年十二月十五日第十六師団南京中山門ヨリ入城式ヲ行ヒ 同十七日方面軍司令官
松井石根大將、上海派遣軍司令官 朝香宮殿下 第十軍司令官柳川平助中將ヲハ又中山門ヨ
リ入城式ヲ行フ

一、第十六師団ハ將來南京附近第一線警備ニ任ズル為デモアロウガ其ニシテモ軍司令部ガ南京
ニ来ルニ係ラズ国民政府庁舎ヲ第十六師団ニ充当シタルハ師団トシテノ名譽ナリ

一、十八日兎モ角方面軍トシテノ慰靈祭ヲ行フ師団ニ在リテハ遺骨整理モ未ダ出来ズ何レ其内
改メテ内〔地？〕向ニ懇親的ニ慰靈祭ヲ行フ筈ナルモ全軍主力ノ集結シタル時ノ催シトシテ
真ニ機宜ニ適シタルモノナリ

之ヲ以テ一応南京占領ノ儀式ハ終リタルモノナルモ然シ此後ニ残サレタル實際的整理ハ是
カラナリ

以下南京占領事後処理次デ南京警備日誌ニ移ル

◇十二月十九日 薄曇リ

一、此日中央飯店ヨリ軍官学校内校長（蔣介石）官舎ニ移ル警備ノ為ノ歩兵一小隊アリ

別ニ趣味生活ノ相手トシテ天竜寺村上和尚、花岡萬舟、高山劍士、浄土宗黒谷本山派遣白
崎軍僧ト映画班ノ二名ト当番及宮本副官ト共ニス

一、戦勝後ノかっぱらい心理

我々が入ルトキハ支那兵が既に速クヨリ占拠シタル処デアル彼等ニハ遺棄書類ニヨツテ見レバ大体四、五月以降給料ハ払フテナイ其代リカツバライ御免トイウノデ如何ナル家屋モ徹底的ニ引カキマハシテアルカラ日本軍ノ入ルトキハ何モノモナク整頓シテハ居ラヌ

一、ソコニ日本軍ガ又我先キニト侵入シ他ノ区域デアロウトナカロウト御構ヒナシニ強奪シテ往ク此ハ地方家屋ニツキテハ真ニ徹底シテ居ル 結極〔局〕ズフシイ奴ガ得トイフノデアル

其一番好適例トシテハ

我ラ占領セル国民政府ノ中ニアル既ニ第十六師団ハ十三日兵ヲ入レテ掃蕩ヲ始メ十四日早朝ヨリ管理部ヲシテ偵察シ配宿計画ヲ建テ師団司令部ト表札ヲ掲ゲアルニ係ラズ中ニ入りテ見レバ政府主席ノ室カラ何カラスツカリ引カキマワシテ目星ノツクモノハ陳列古物ダロウト何ダロウト皆持ツテ往ク

予ハ十五日入城後残物ヲ集メテ一ノ戸棚ニ入レ封印シテアツタガ駄目デアアル翌々日入テ見レバ其内ノ是ハト思フタモノハ皆無クナリテ居ル金庫ノ中デモ入レネバ駄目トイフコトニナル

一、日本人ハ物好きデアアル国民政府トイフノデワザノ見物ニ来ル唯見物丈ナラバ可ナルモ何か目ニツケバ直ニカツハ〔バ〕ラツテ行ク兵卒ノ監督位デハ何ニモナラヌ堂々タル將校様ノ盗人ダカラ真ニ驚イタコトデアル

自己ノ勢力範囲ニ於テ物ヲ探シテ往クトイフナラバセメテモ戦場心理ノ表現トシテ背徳トモ思ハヌデモヨカロウガ他人ノ勢力範囲ニ入り然モ既ニ司令部ト銘打チタル建築物ノ中ニ入りテ平氣デカツハ〔バ〕ラウトイフノハ余程下等ト見ネバナラヌ

一、中央飯店内ニ古器物ノ展覧会跡アリ相当ノモノガアツテ之ヲ監視シタガ矢張りヤラレタトウノ師団長ガ一度点検シタ上銃ヲカケテ漸ク喰止メタ位デアル

一、軍官学校校長官舎ハ蔣介石ガ居タトノコトデ予ガ占拠スル筈ニシテアツタ 第九聯隊ヲ出

シテマデ取りテ置イタノニ自己ノ宿營区域ニモアラザル内山旅団〔野戦重砲兵第五旅団〕司令部ガ侵入シテ之モ亦遺憾ナク荒シテ仕舞ツタ

トウノ中央飯店ノ家具ヲ持チ運ビテヤツト住ヘル様ニシタノデアアル

一、戦場ニハ所有權否定案ガ如実ニ表現シテ居ル我々モ支那人ニ対シテハ怖ラレテ居ルガ日本人仲間ノ間所有權否認ハ之レ亦功利主義利己主義個人〔主義〕ノ發達シタ一大現象ト見ルコトガ出来ルダロウ

一、軍隊デ自動車ヲ捕獲シテ検査小修理ヲ兵卒ガヤツテ居ル

通りカカリタル將校ガ一寸見セロトノゾキ込ム ツヅクツテ其儘乗り逃ゲシテ往ク

一、最モ悪質ノモノハ貨幣略奪デアアル中央銀行ノ紙幣ヲ目ガケ到ル処ノ銀行ノ金庫破リ専門ノモノガアルソシテソレハ弗ニ対シテ中央銀行ノモノガ日本紙幣ヨリ高値ナルガ故ニ上海ニ送りテ日本紙幣ニ交換スル此中〔仲〕介者ハ新聞記者ト自動車ノ運転手ニ多イ上海デハ又之ガ中買者ガアリテ暴利ヲトリテ居ル者ガアル

第九師団ト内山旅団ニ此疾病ガ流行シテ張本人中ニハ輜重特務兵ガ多イソシテ金ガ出来タ為逃亡スルモノガ続出スルトイフコトニナル 内山旅団ノ兵隊デ四口、計三、〇〇〇円送金シタモノ其他三〇〇、四〇〇、五〇〇円宛送りタルモノハ四五十名モアル 誠ニ不吉ナコトデアル

◇十二月二十日 晴レタレドモ稍寒シ

一、師団ノ警備区域定リ各師団モ逐次其新配置ニ向ツテ行動ヲ始ム

◇十二月二十一日、二十二日

一、十二月分増俸ヲ受領ス年末賞与十五割支給トノコト

其全額ヲ留守宅ニ送金スル様ニ手續ス

◇十二月二十三日

一、小泉軍医中将来ル夕刻会谈シ東京ノ事情ヲ知ル

杉山〔元〕陸相近衛ノ小僧〔文麿〕同様省内気骨アル人士ナク軍ノ一般情態並政界並一般社会状態ハ全ク二二六事件前ト同様トナル 彼ノ杉山氏陸軍ヲ毒スルコト宇垣ニ勝ルトイフ

共ニ現時及将来ヲ慨嘆シテ会食シ終リニ茶ヲ立テテ進ム小泉予想外ナルニ驚ケリ用フル処ノ茶碗ハ古器トシテ珍ランキモノ記念ノ為之ヲ提供シ名ヅ〔ケ〕テ

紫金山ト称ス

一、引越以来暖房ノ為烟突ナキストーブニ木炭ヲ用ヒタル為毎朝後頭部ノ痛ヲ感ジタリ

一、此頃何トハナシニ健康勝レズ恰モたががゆるみタル様ノ氣持アリ一酸化炭素中毒カト思ヒタルガ他ノ同僚ニ尋ネテ見ルニ皆同様ノ感ジアリト云フ 疲労ノ表現ナラン

脚股ノ肉落ちテ我ナガラ瘦セタルヲ感ジタリ

一、此日新暖炉ヲ備ヘ烟突ヲツケ石炭ヲタキ始メタレバ始メテ一酸化炭素中毒症状ヲ見ザルニ至レリ

但胃腸ノ具合面白カラザレバ飲食物ニ注意シ漸次恢復スルノ感アリ

◇十二月二十四日 晴天 小雨

一、午前小泉医務局長来司令部

午後下関方面ノ状況視察 同時ニ第二野戦〔病〕院ノ患者見舞ヲ為ス 取扱親切ナラザル点多ク之レ令旨ニ副ヒ奉ル所以ニアラザルヲ以テ中央医院ニアル第四野戦病院ニ引移ラシムルコトニ決定ス

◇十二月二十五日 晴

一、午前十時首都飯店ニアル軍司令部ニ集合、軍司令官ヨリ各兵团長ニ対シテ訓示アリ次デ懇談、会食ヲ為シ午後二時帰リテ師団司令部ニ入ル

一、小泉軍医中将ノ贈物ヲ展開シテ村上白崎両和尚、高山劍士、志波、大岡映画班、梶画伯共々料理ヲ為シ副官、護衛小隊長 当番一同ニテ会食ス

五貫五〇〇―参貫目ノ大鯛ハ我輩生レテ始メテモロフタコトトテ十五六人ニテ食ヒキレズ明朝ノ味噌汁ニ加ヘテ更ニ味フコトトセリ

◇十二月二十六日 晴天白日 暖氣トナル

朝砲七ニアリタル永井砲兵大尉来訪ス

第十六師団ノ南京攻略

昭和丁丑年月日十二

敢期南京攻略進銳鋒

紫金山第一峰與西山

偕是国都防守両眼目

十一二〇先奪略西山

十二三三強取第一峯

双眼既瞑敵復戦意亡

黎明尾逃突入中山門

国府庁上高翻日章旗

万歳之声響四百余洲

大本營野戦衛生長官 小泉親彦

天竜寺村上和尙返賦

將軍中島閣下 奉大命 率第十六師團將士 昭和丁丑秋九月初五日 發京師 奏功於朔北之路 軫銓於江南之丘 連日連夜 奮戰健闘 百戰百勝 攻略金陵一百里之要関矣 臘月十三日 我邦之風習稱事始之吉日也 恰是出師以來 相当一百日大紀念日也 黎明攻略 六朝之盛都敵國之首府南京矣、卜月望拳入城之式 蓋入城敵國之首都前代未聞之盛事也 予何幸乎 附驥尾 從征軍応在陣中 親參觀曠古之盛典 此日天晴地朗也 国旗翩翩映旭光 軍容肅々 入中山門 仰瞻將軍馬上之英姿 則是拔山蓋世之雄也 直入國民政府 改為第十六師團司令部 統率三軍 以奉応 聖明广大之恩沢 嗚呼盛哉 皇軍之威 嗚呼大哉 閣下之勲 予充滿感 激而恨無辭焉 將軍偶示 南京攻略所感一篇 似攀玉韻 聊聯卑辭 欲詠將軍之壯圖 雖然意句共不到也 將軍幸垂叱正賦 伏請、

從軍僧 独潭士

奉命出師正百日

河北江南逞銳鋒

將軍士氣力拔山

勇猛果敢驚耳目

六代誇險青竜山

奪取紫金第一峯

赤魔紅毛顔色無

威風堂々庄城門

樓上高掲日章旗

武勲千古耀神州

未稿

十二月十五日入城式ニ方リ堵列部隊中戦友ガ遺骨ヲ頸ニカケ参列セルヲ目撃シ入城ノ盛事ト

戦没諸將士ノ忠烈トヲ偲ンテ馬上落涙禁ジ難シ

入城の式勇ましく見つれども

鬚ぬらす白骨の礼

深夜目覚めて再び陣没者を偲ひ枕のぬるゝを見る

ねさめさめて見れば枕はぬれてけり

遺骨持つ友のすがたしのひつ

天竜寺村上和尙一日風氣にて床につく

曇りても復霽るるものと

知りなから

一しほさびし旅空の床

毎朝國民政府司令部ニ出頭シ居室窓ヨリ紫金山第一峯ヲ望ミ三三勇士ノ靈ヲ偲ブ

○紫金山第一峯の頂に

鬼とりひしく武夫そ住む

○観る度にそゝろ涙をさそひける

頂にねむる益良夫の靈

○南京をまるのみにせる

若武者は

今第一峯の頂にねむる

十二月二十七日ヨリ三十一日ニ到ル行事

一、各隊ノ警備配当略完了シ 又各隊ノ宿營設備中ナリ 依リテ各部隊ノ整備掌握ノ為師團長

ノ巡視ヲ行フ

全般的ニ見テ目下準備最中ニシテ完備ノ時期ニアラズ

二十九日巡視ノ結果所見左ノ如シ

(1) 一般ニ記〔凡〕帳面ニシテ又マメナ歩兵隊ノ設備ハ極メテ不完全ニシテホンノ一時凌ギノ状態ニ止ル

(2) 師団命令ニ基ク炊事ノ統制ハ全ク実行セラレアラズ 分隊単位多シ又各分隊各小隊ノ糧食庫ヲ見ルニ特別徴発物資多クシテ其ガ又非常ニ不平均ナリ

口実トシテハ釜ノ大ナルモノナシトカ云ヘドモ其真相ハ予後〔備〕少中尉ノ威厳行ハレズ、下士官以下ニ引ズラレテ斯クナレルモノナルベシ

各分隊小隊トシテハ個人主義利己主義上ヨリ見テ各々ノ徴発シタル物資ヲ小隊又ハ中隊ニ提供スルコトヲ好マザルニ出デタルモノナルベシ

(3) 元來歩兵ハ所謂修羅場ニ活動シ来リタルモノニシテ最モ痛切ニ戦場心理ノ体験ヲ為シタルモノナレバ此場裏ニ於ケル各人ノ態度ハ延ヒテ人間ノ真価ヲ定ムルニ足ルベク、志願兵出身者ナドハ大部ノ者ハ此等ノ下士官以下ニ見限ラレタル傾大也

(4) 由來志願兵出身將校ハ役ニ立タヌトノ批難少カラズ

然シ物ノワカラヌノハ止ヲ得ザルコトナリ何トナレバ我々ハ十年以上三十四十年モ此仕事バカリ為シテ來タカラ軍事上ノ事ハ広ク深ク知リテ居ルケレドモ彼ハ僅ニ一年カ一年半ノ軍隊生活ニ過ギズサレバ物事ニ通ゼザルガ寧ロ至当ナリト信ズレドモサリトテ具合ノ悪い事ニハ上級者ガ此ヲ親切ニ指揮スルノ意思ヲ欠ク 教育セズシテ役ニ立タヌ立タヌト云フ傾アリ 指導教育セザレバ役ニ立タヌコトハ誰ガ見テモ考ヘツキ理解シアルコトナガラ此ニ手ヲ下スコトヲ為サザレバ之ガ矯正ハ至難ナリ

二、今中部隊ノ工兵隊

此処ハ隊長ノ熱心懇篤ナル指導ニ依リテ設備モ支度モ略十分ニ備ヒツ、アリスガハ工兵

ハ専門技術家ガ多ケレバ今後大ニ發展シ得ベシ

兎モ角今中大佐ハ能ク掌握シ又能ク部下ノ面倒ヲ見テヤル男ト認メタリ

三、次ハ衛生隊長ノ松田中佐之モ亦中ミシツカリ者ニテ能ク掌握シ統制シテ相当ノ設備ヲ為シアリ

在郷者ナレドモ地方ニ在リテモ相当ニ活躍シアリ又活躍シ得ル人物ト見ルヲ得ベシ

四、野砲隊ハ何トイフテモ聯隊長ガ掌握シアラズ各隊ハ概シテノロマボンヤリノ集合体ナリ

小林中佐森中佐ノ順序ガ引クリカヘリテ中佐進級シタル点モアルベク他ノ大隊長モ又森ヲ助ケテ聯隊ノ為ニトイフ感〔親〕念ハナイラシク正直ナ氣ノ小サイ森中佐ニハ大骨折リナリ從ツテ宿營設備トイヒ馬ノ管理トイヒ余リ感心セズ寒心スル方多シ

五、中々能ク掌握シ指導シアリテ師団ノ統制ニ入ルベク勉メタル点ノ昭〔ラカ〕ナルハ唐〔柄〕* 沢隊長ナリ

六、殊ニ三三ノ隊ハ戦場デ勇敢ナル丈其失多ク粗奔ニ流レアリ是ハサスガノ野田大佐モ急ニハ手ガツカヌモノナラン或ハ其辺ハ少シ磊落風デ頓着セヌノカモ知レヌ

七、野戦病院長ハ医者ナレバ専門事〔ニ〕傾キ易ク軍医ノ軍人ラシキ点ハ中々六ヶ敷キ点ナルガ然シ中々能ク掌握シ統制指導シアルモノアリト心強シ

全般ヲ通ジテ唐〔柄〕沢部隊ヲ除ク外馬ノ保管不十分ナリ殊ニ管理部ノ衛兵騎兵ノ馬ハ少数ニ係ラズ不行届

慰靈祭

一、師団ノ慰靈祭モ年内ニ行フヲ要スル行事ノ一ツデアルノデ成ルベク速ニトイフコトニ力メタルガ三八ノ聯隊ハ遺骨還送ノ為全般ニ遅レテ三十日ニ之ヲ取行フコトトナル

二、此ノ際中支作戦ニ於ケル戦死者ノ慰靈祭トイフ意見アリタルモ其ハ少シク考ノ足ラヌモノト信ジ出征以來ノ全英靈ニ対スル行事トセリ

今度ハ三長官府原知事ノ弔電代拜モアリタルニ万一北支ト中支トヲ区分シタルナランニハ

工兵第十六聯隊長 工兵大佐 今
中武義 18期

輜重兵第十六聯隊長 輜重兵中佐
柄沢畔夫 22期

待遇上ノ不公平ヲ来スモノニテ之ヲ全般トシタルコトハ大ニ可ナリト思ヘリ

三、式場ニハ軍司令官宮殿下モ臨場セラル

祭文

茲ニ祭壇ヲ設ケ師団出動以來北支及中支ニ於テ壯烈ナル最後ヲ遂ゲタル故陸軍歩兵大尉田代瀧藏君以下九百十四柱ノ英靈ヲ迎ヘテ慰靈ノ式ヲ行フ

曩ニ北支ヲ去リテ將ニ中支ニ向ツテ転進セントスルニ方リ寧晉城頭ニ於テ諸士ノ靈ヲ慰ムルト共ニ我等ハ諸士ノ忠勇義烈ヲ龜鑑トシ諸士ノ上天ノ擁護ニ依リテ奮闘努力以テ皇國ノ武威ヲ宣揚センコトヲ誓ヘリ

次デ再ビ海ヲ越ヘテ揚子江岸ニ上陸シ支塘鎮ニ常熟ニ無錫ニ常州ニ丹陽ニ將又句容ニ到ル処敵ヲ驅逐シ未ダ三旬ナラズシテ一躍國都南京ニ迫ル

昇天ノ英靈天ニ在リテ常ニ我等ヲ導キツ、アルヲ信ジテ地上ノ戦友ハ真ニ意氣昂天ノ概アリ天地相應シテ十三日南京ヲ占領シ十五日師団ノ入城式ヲ行ヒ国民政府ヲ占拠シテ楼上高ク日章旗ヲ掲ケ万歳ノ声四百余州ヲ震撼シ茲ニ皇國ノ武威ヲ揚シテ僅ニ大命ニ応ヘ奉ルヲ得タルハ真ニ壯烈ト謂フベキナリ

然リ入城ノ式ハ真ニ壯烈ナリキ去リナガラ翻リテ在天ノ英靈ヲ思ヒ又堵列部隊戦友ノ肩ニ捧ガラレテ此盛儀ニ加ハル諸士ノ姿ヲ觀ルトキ感慨胸ニ迫リ落涙ノ禁ズル能ハザルモノアリ

今茲ニ改メテ諸士ノ靈ニ敬謝ス此功績ハ悉ク是ノ諸士ノ功也

又改メテ諸士ニ誓フ我等ノ使命遂行ハ前途尚大ニ重キヲ加フルモノアリ我等驚鈍ニ鞭チテ苟モ諸士ノ令名ヲ傷ケザルベシ願クハ在天ノ英靈常ニ我等ヲ導キテ最終ノ目的ニ向ツテ進マシメヨ 師団ノ戦力ハ実ニ物的ニ諸士ヲ失フテ心的ニハ百千倍ノ増加ヲ得タルモノニシテ我等ハ常ニ諸士ト常住シ諸士ト從軍ノ行ヲ偕ニスルモノト信ジテ疑ハザルモノナリ
英靈希クバ享ケヨ

慰靈祭モ滞リナク終リタリ楮テ翌日遺骨奉安所ニ来リテ見レバ前日祭場ニ使用シタル器物ガ旧ニ復シアラズ 清水モアケテナイ、人間ノ薄情サ加減ニハ驚キタリ側ニ居タル從軍僧ニ頼ンデ整備セシムルコトトセリ

年越支度

戰場ノ正月 松飾リナド不用論ナドモアリタルコトヲ耳ニスレドモ三千年來伝統ノ慣習ハ人カヲ以テ如何共スル能ハズ 言ハズトモ各隊ハ思々ニ松竹ヲ採取シテ立派ナリ〔ル〕飾リヲ立テタリ

酒ハ十分準備シアリ又雑煮餅モ追送セシメアルモ何トカシテ糯米ヲ手ニ入レもちつきヲヤラセテ正月気分ヲ味ハセテ心氣新シクセシメント經理官ヲ上海ニ遣リテ準備セシモ十分トハ出来ズ僅ニお重ねヲ搗ク丈ノコトヲ為シ得タリ

正月ノ馳走ハ内地ヨリ鯛マデ入レタル缶詰到着シタリ
是ニテ兎モ角正月ノ支度ハ出来タリ

予ハ三十一日鳥打ニ出テ鴨一、雉子一ヲ獲タレバ元日ハ鴨雜煮 二日ハ雉雜煮トイフコトニシテ提供セリ

晦ソバノ事ヲ考ヘタガ遂ニ発見セズシテ此事丈ハ成シ遂ゲ得ズ

大晦トナレバ何トナク今年ノ締メククリヲセネバナラヌ様ニ思ヒハシタルモノノ中々ニ一朝一夕ニハ出来ズ
手許ノ書類丈応急的ニ片付ケテ除夜ノ鐘ヲ待ツコトトセリ

一、大晦ノ夜七時南京ニ電灯ツク

入城後南京ニ最モ必要ノモノハ水道ナリ晦頃ハ漸次石油ノ欠乏ヲ訴フルニ至ル

大連ヨリ積込ミタル燒却戦用ノ一万缶ノ石油ハ一タビ行衛不明トナリタルモ此頃上陸シテ逐次追及シ来ルトノ報アリタルモ未ダ入手セズ
南京ノ電灯ト水道ハ十三日朝迄運轉シアリタリトノコトナリシモ軍隊ノ入城掃蕩ノ際技師

モ職工モ片付ケタラシク之ヲ運転スル要員ナシ

軍ニ於テモ考ヘハアルトノコトナルモ手足持タヌ考案ハ何時実現スルトモ明ナラズ、予ハ之ニ関セズ直ニ着手スルニ決シ師団内ニ於テ曾テ電灯又ハ水道会社ニ勤務セシ技師技手職工ヲ調査セシニ四十五名ヲ得タリ 工兵隊ニ技師少尉アリ依リテ之ヲ召集シテ検査、運転ヲ命ジタルハ十八日頃ナリ

下関ノ發電処ハ米式ニシテ日本ニテハ多ク独式ナレバ技師等ハ稍々不慣ノ点アルヤニ見ヘタルモ之ヲ激励シテ試運転セシメントシ結極「局」城南ノ小發電処ヨリ着手シ送電ノ上下関ノ發電処ノロストルノ散炭機ヲ動かスコト、シテ着手セリ

一、然ルニ努力ノ結果此大晦日ノ夜七時半宿舍ノ電灯一時ニ点火シタルトキハ天下光昭トナリタル思ヒニテ言フニ言ハレヌ喜悅ノ感ニ打タレタリ

早速管理部ニ命ジテ酒壺樽ヲ贈リタルガ是又大ニ彼等ヲ喜バシムルコトトナリ翌日技師少尉ハ年賀ト共ニ礼ニ来レリ

一、斯クテ数日間ハ線ノ整理ノ為時ニ消ヘルコトモアリタレドモ送電ハ逐次整理拡張セラレテ南京ノ夜ハ漸次明クナ「レ」リ

一、一月七日頃ニハ下室ニハ水道モ出ルコトトナリ十五日頃ニハ二階ニモ又水ガ出ヅル如クナリ、欠乏シテ供給不足ヲ訴ヘタル南京ノ水問題モカクシテ其大部ヲ解決スルコトヲ得タリ

一、併シ世間誰独リ師団ノ此努力ニ対シテ礼ヲ言ハザル迄モ賞讃スル者ハナシ

人間モ斯ク簡單ニナレバ呑氣ニテサゾカシ長命スルコトナラン、あなかしこあなかしこ一、門松モ立ツタ、室内ノ生花ハ白崎君ノ技ヲ表ハシ紅梅ニ鉢モアリ

大元帥陛下ノ御真影ハ雜誌ヨリ収メ来リ額ニ収メテ村上和尚ガ用意シ 勅題新年ノ春ハ花岡ガ描キテ壁ニ掲ゲ室内ノ裝飾モ正月ラシク出来タリ此夜ハ皆除夜ノ鐘ヲ聞ク積リニテ遅クマデ支度ヲナシ程々ノ物語リナドシテ過グル内、誰ガツキタルカ南京ニ除夜ノ鐘ノ音ヲ聞キツツ床ニ入りテ事多カリシ丁丑ノ年ヲ送ルコトトセリ

◇昭和十三年戌寅正月元日 晴天 暖

一、正月元旦ハ真ニ朗カナ日デアアル、朝早く起キテ昨夜点イタ電灯ノ下デ 顔ヲ洗ツテ旭光ヲ拝シテ遙ニ

聖寿万歳ヲ禱ツテ後

皆ガ各所デ御雑煮ノ支度ヲナシ 準備ノ出来ル間ニ新年ノ所感トテモ云フモノヲ駄句リテ

書キテ見タノデアアル

勅題 神苑ノ朝

○陣中に仰ぐ朝日にうつりける

戦勝いのる神苑(鹿?)のむれ

敵国正月の雑煮餅

○敵国の水で雑煮の味をまし

○玄武湖の鴨は雑煮の味をそへ

○蔣君のかまどでにたる雑煮餅

味はやつぱり日本式なり

午前九時皆一室ニ集ツテ賀詞ヲ交換シタル後同ジ釜ノ雑煮餅ヲ味フ事ニシタ、其面々ハ

宮本大尉 天竜寺村上和尚 黒谷白崎和尚 花岡萬舟 高山劍士 映画班ノ大浦、岡両君

当番三名 運転手二名 衛兵少尉以下拾名 其二迷児ノポインター一疋トカナリヤ三羽デア

ツタ

一、午前十時師団司令部ニ集合シ

遥拝式 国旗掲揚式

聖寿万歳三唱

次テ団隊長以上ト共ニ祝盃(団隊長ハ南京附近ノモノノミ)

樽酒ニ一杯機嫌トナリテ正午一旦帰宅シ
一、午後二時宮殿下ノ許ニ年賀ニ参上ス

来リ集ル将校等ト宮様ト一同年頭ラシキ光景ノ中ニ元旦ヲ祝シテ午後四時頃帰宅ス
此日ハ少シク気力増シタノニ体力尙未ダ十分恢復セヌノデ、酔フタ様ナ氣持モシタノデ午
後五時頃ヨリ睡眠セリ

一、元日ト同時ニ早朝ヨリ久シ振りニ始リタルハ敵ノ空襲ナリ 但シ彼等ハ二三千米以下ニ降
下セズ

且又目標トスル処ハ上海、杭州、蘇州、南京共ニ飛行場ノミニシテ他ニ及バズ

此頃ヨリ南京市街各所ニ支那人ノ放火アリ実ニツマラス家ノ火災ナレドモ、注目スベキハ
其ガ朝火事ナルコト、重要建築物ノ近所ナルコトヨリ判断シテ、何等カ空襲ト直接関係アル
ラシク思ハレタリ

予ハ此空襲ヲ日露戦ノ開始ト判定セリ

何トナレバ支那軍ヨリ見タナラバ、今日日本ノ空軍ヲ少シ位ヒ壊シタ処デ大局ニ影響ハナイ
ガ、其ヨリモ軍司令部殊ニ宮様方ヲ空襲シタ志氣ノ影響ノ方ガ大デアアルニ相違ナイ

元来此頃ノ飛行機ハ露国品デアリ、操縦将校モ又恐クハ露国将校ナラン、ソシテ日本ノ空
軍ガ補充難ニ陥リテ居ルコトハ彼等ハ百モ承知ノコトナレバ、今日日本空軍ノ実力ハ第一線ニ
在ルコトナレバ、是レヲ少シデモ破壊スルコトハ日露戦争ノ発動ヲ永久ニ喰止メルコトナ
ルノデ、此度ノ空襲ハ露国軍ノ日本軍攻撃ニシテ、故ニ日露戦争ハ今正ニ開始セラレタルモ
ノトモ見ルヲ得ベシ

且上海ニ於テハ飛行場ノミナラズ軍艦ヲモネラヒアリ

是レハ飛行機ト共ニ軍艦ヲ攻撃シ得ル一挙兩得ナルガ故ト見ルベシ

(*一月二十七日南京ニ於テ海軍ガ二機高射砲ガ一機撃落シタリ 操縦将校ハ皆露国将校
ナルコトヲ証セラレタリ)

◇一月二日

朝カラいろ／＼ノ年始客アリ、今日ノ鳥打モ止メルコトトシテ終日在宿シかはる／＼御相
手セリ

◇一月三日

初猟ノ為玄武湖附近ヲ歩キテ運動セリ

◇一月四日

此日ハ軍人勅諭御下賜当日ナレバ、午前十時ヨリ師団司令部ニ於テ勅諭奉読式ヲ行フ勅諭
写シヲハ携行セザリシヲ以テ勅諭集ヨリ謹写シテ之ヲ用ヒ行事ヲ終ル

◇一月五日

年末ニ巡視シ終ラザル各隊ノ宿营地巡視ヲ行フ
余程整頓シアルモ各隊毎ニ宿営用毛布布団ノ供用数ニ著シキ差異アリタレバ、附近ニテ融
通ツクモノハ若干ツツ融通シテ使用セシムルコトトセリ

◇一月六日 休

◇一月七日 湯水鎮句容方面視察ス

湯水鎮ニ於テ入浴シテ其水ノ奇麗ナルニ一興ヲ得テ帰ル

*中沢大佐曰ク 出征後自分ノ身体ノ見ユル様ナ風呂ニ始メテ入りタリト

湧出ズル水ハ真ニ奇麗ナリ

十二月七日負傷シタル為八日夜湯水鎮ニ宿リタルモ入浴スル能ハズ、僅ニ四肢浴ヲ為シタ

ルガ、此日完全ニ入浴ノ目的ヲ遂ゲテ恨ム処ナキニ至レリ

◇一月八日

歩兵学校ニ騎兵聯隊ヲ視察シ

午前十時天文台ニ帰ル

賀陽宮殿下御来京ノ上戦蹟御視察トノコトニテ十時集合

其ヨリ紫金山ノ戦蹟御視察(第三三聯隊長 第七中隊長 速射砲隊長講話)

次デ天文台ニ帰リテ御昼食ノ後、烏龍山、幕府山砲台御視察

午後四時頃ヨリ師団幕僚一同ト御会食トノコトニテ予ノ宿舍ニ準備シ御懇談御会食ノ上首都飯店御旅舎ニ帰ラル

◇一月九日

午前十時城内飛行場発杭州ニ御移動セラルルヲ以テ飛行場マデ御送り申上グ

南船還北馬

北馬再越海南船 既渡三途河

一氣屠国府牙城 天国門扉開

雪道更有一重閣 三過洋還北

深入於山中孤烟 後落陽遥拜旭光

◇一月二十日

十九日ヨリ降雪シ紫金山雪化粧ヲ為ス、依ツテ映画班ニ命ジテ国民政府樓上ヨリ四周ノ雪景色ヲ撮影セシムルコトトセシガ果シテ実施セシヤ否ヤ

一、此日午後六時ヨリ宮殿下御旅舎ニ於テ送別ノ宴ヲ設ケラル

先是、軍司令官宮殿下ヨリ御訓示アリ奉答ス
ドウモ軍ノ高級副官ヤ幕僚共ハ馬鹿ニ宮様ヲカツギ上ゲテ下々トノ間ヲ疎隔セントシ 其尊嚴ヲ守ルトイフヨリハ寧ロ下ニ対シテハ虎ノ威ヲカル狐的ニ又宮様ニ対シテハ敬遠主義ノ如ク見エ、結局ハ自己等ノ貧弱ヲ蔽ハントスノ風アリ
此晚モ亦宮様ヲ速ク御退座願上ゲ、客分ヲ速ク帰ス様ナ態度が見エタレバ一喝ヲ喰ハセテ 帰リタリ

一、移動ノ為荷物ヲ整ヘテ結束スルニ

- (1) 追送品ヤ慰問品ガ輻輳シテ山ヲ為シ、結局大トランク一箇ハ此等ノ食料品デ一杯ニナル
- (2) 次ハ寢具ナリ、北ニ向フ、然モ既ニ他部隊ノ居住シタル後ニ入り込ムノデ宿営用雜具ノ欠乏ヲ予想スレバ荷物ハ増加スルトモ、何トカシテ寢具丈ハ携行セザルベカラズ 依リテ兵ハ各人分捕布団一枚宛トシ、予ハ今迄使用セシ四枚ノ布団ヲ携行スルコトトシタレバ、之レト毛布ヲ加ヘテ結局又トランク一ヲ増ス
- (3) 更ニ増加セシハ筆具ト紙ト地函類一式、之レガ又合シテ支那カバン一個トナル
- (4) スクシテ分類シテ入レテモ入レテモ終リニナレバ雜物ガ集ルノヲ、之ヲ打チ込ンデ纏メテ往クニ又柳行李一個ヲ増ス
- (5) 此外従来カラ携ヘタル洋酒箱アリ、新シク獵用彈藥箱アリ、結局当初ヨリ携行シタル三個ノ行李ヨリモ

カバン トランク各二個 計四個

小箱 三個

ヲ増加スルコトトナル、船舶次デ汽車輸送ナルガ故ニ移動モ出来ルガ、之ガ行軍デ移動スルトセバ大変ナコトナリ

因ニ記ス師団全般ノ行李モ大体定数ノ二倍トナリタリト云フ

南京滞在モ後一日トナリタルガ別ニ心残りモナシ 降雪後ナレバ鳥打ニモ出デズ、此頃天谷

騎兵第二十聯隊長 騎兵中佐 笠井敏松 21期

旅団が交代ノ為漸次入り込ミ来リアリ

今迄ハ南京モ住民ノ数少ク群集ノ力無ケレバ不穩ノ行動モナカリシガ、此平穩無事ノ時機
丈駐在シ、爾後漸ク事ヲ生ゼントスルノ虞アル時、南京ヲ距リテ転進スルコトハ、少シク虫
ガ良過グルノ感アリ、サレド之レハ命令ナリ

致方ナシ

◇一月二十一日 雪後晴天

一、愈々明二十二日出発ト定リタレバ、御暇乞ノ為挨拶巡リスルコトトセリ

先是飛行機ニテ上海行ヲ計画シタルモ、十九日降雪後ハ曇リ勝ちニテ欠航シアリ

一般ニ南京地方ニハ二回ノ雨期アリ、今ハ其一期期ニシテ、寒ケレバ雪トナリ暖ケレバ曇
リトナルトイフコトモ佐々木少将ヨリ聞キタルコトナレバ

飛行機ハ確實ニ見込立タズト判断シ、汽車行トスルニ決セリ

自動車行ノ方法モアレドモ、途中蘇州ナドニ一泊スルコトガイヤナレバ、最モ確實ナル方
法トシテ汽車行ニ決定セリ

一、列車ハ人員ノ為ニモ荷「貨」車ヲ用ヒ頗ル寒シトノコトナリシモ、兵ガ之ニ堪ヘテ居ルコ
トナレバ我々ガ堪エヌコトモアルマイシ、又我々モ経験シテ置ク必要モアルコトナレバ断然
汽車行トセリ、ソコデ工夫シタカ結構緩急車ノ利用其ニ煖炉ヲ設付クルヤラ安楽椅子ヲ持チ
込ムヤラシテドウヤラ一等ノ展望車式トナリタリ

一、御暇乞トシテ、殿下 軍經理、軍医、獣医、兵器各部長ヲ訪ヒ、兵站司令部ニ織田三郎大
佐ヲ訪ヒシモ寒冒氣味ニテ休ミタリトテ面会セズ

*天谷少将ヲ訪フテ別ヲ告ク

◇一月二十二日 晴天

一、列車ハ下関停車場ヨリ午前七時四十分発トイヘバマダ薄暗イ時刻ナリ、マタ寒クモアルコ

ト故宮様ニモ各部長ニモ見送りハ絶ツテ断リタルモ、停車場ニツイテ見レバ皆送りニ来ラレ
タリ

殊ニ宮様ノ御送りニハ恐縮セリ

一、日本赤十字社副社長徳川侯爵一行モ同車ニテ上海ニ往クトテ一緒ニナリ、從ツテ小サイ緩
急車ハ一杯トナリタリ

降雪後寒シトハ云ヘ煖口(炬)ガ小室ノ中ニアレバ、ソシテ私ハ其近クニ在リタレバ少シモ
寒クナシ

唯発進ノ際急動スルノデ煖炉ハ引クリカヘラントスル、薬缶ノ湯ハコボレル、其度毎ニ手
デ押サヘ足デ押サヘ、之ヲ幾度カ繰返シテ上海ニ着キタルハ午後八時過ナリ

一、往々古戰場ヲ眺メ、又蘇州方面未踏ノ地形ヲ眺望シツツ上海戰場ニ入ル頃ハ既ニ日没トナ
リタレバ、何モ見エズ

一、上海駅ニハ司令官、軍參謀一名ト先行ノ片岡輜重兵少佐トガ迎ヘニ来リアリ、直ニ東和洋
行ニ入ル

東和洋行トイフホテルハ上海駐在武官ノ菓ナリ

後、千田侃次郎大佐(兵站司令官)ノ語ル処ニ依レバ、師団長格ノ人ノ宿舍トシテハ貧弱
ナレバ別ニ上等ノ宿ヲ準備シアルケレドモ、其処ニ止「泊」メズシテ斯ル下等ノ宿ニ入レタ
ルハ不届ナリト

何処ニ往ツテモ妙トイヘバ妙ナコトガアルモノ哉

一、此夜大木憲兵大佐来訪シ、知行等通過ノ節ノ御礼ヲ述フ

一、古城少将モ同宿ニテ朝食ヲ共ニスルコト、セリ、氏ハ大本營ノ囑託トシテ外国通信員トノ
間ニ往来シテ宣伝工作ニ従事スルト云フ、參謀本部ノ最初ノ意圖ハ、古城ヲ特務機関ノ方ニ
手伝ハシムル筈ナリシガ、原田少将トノ關係上任務ノ範圍ヲ極限シテ、一方ヲ担当スルコ
ト、セリトイフ

歩兵第十旅団長 天谷直次郎 21期

徳川 愷順

中支憲兵隊長 大木 繁 22期
子備役陸軍少将 古城胤秀 15期 支
那駐屯軍附、陸軍省新聞班長等
の経歴あり

何処モ同ジ中々情実ノアルモノ哉

一、往ク先ハ何処〔カ〕ノ問題漸ク明トナリカケタリ、第十六師団ガ移動スルトイフ噂ハ年末頃ヨリ仄聞シタ

(1) 宮様ノ戰略構想デハ

二月中旬ヨリ行動ヲ起シ13Dト併行シテ北上シ隴海線ニ突進スル計画ガアツタ、之レハ師団ノ転進ノ噂ノ以前カラノ計画デアツタ

(2) 其後師団ハ滿洲ノ東辺道ニ往ク、其目的ハ兵力ヲ集結シテ露国ニ向ツテ漁業權問題ノ解決ヲ迫ルトノ話ナリ、之レハ多ク附ケタリノ想像案ナラン、万一ニモ左様ナ馬鹿ナ猿知慧ヲ振り廻シアリトセバ言語道断ノコトナリ

(3) 正月ノ元旦飯^{*}沼少將ノ話デハ、再ビ北支ニ転進スルラシイトノコトデ話ガ段々確カナナリ、滿洲ニ往カヌコト、其丈デモホツト安神シタ

(4) ソコデ北支ニ往クトシタラ何処ニ往ク

10Dハ濟南ニ出テ5Dモ山東ニ出テ、国崎支隊ハ青島ニ入り徐州攻撃計画モアルラシイガ其ニ16Dガ往カヌデモ可ナルベク

ソウスレバ平漢線方面カ山西省ニ定リテ居ル、マサカ綏遠デハアルマイ

(5) 上海ニ来ル前後、上海派遣軍カラモ北支那方面軍カラモ北支第一軍カラモ電報ガ来タ、16Dハ北〔支〕方面軍ニ属シ第一軍ノ隷下ニ入ルトノコトナリ

併シ旅団長ノ指揮スル混成部隊ヲ石太線ニ配置スル為一月末マデニ先着セシムベシトノコトナリ

斯クテ山西カ平地カ種々考ヘタガ、平漢線ニハ前方ヨリ14、108、20ガ縦列ニ配置シアリ、之ニ反シテ太原ニハ109丈ニシテ而モ山岡ハ殆ド敵ノ配置カラ見レバ包围セラレタ形ニナツテ居リ、之レハ特設師団デアリ山砲ナルガ故ニ

又既ニ草場支隊ハ石太沿線ニ配置セラルルコトナレバ、之カラ見テモ16Dヲ本道上太原

ヨリ南下セシメ109ヲ其西方山系ヨリ前進セシムルコトモアリ得ベシト判断セリ、果シテ然ル場合ニ於テハ

山中ニ残レル共產軍ヲ片附ケ、太原西方黄河ノ線ニ在ル毛沢東ノ軍ニ対シ処置ヲ必要トス

予ノ推断ヲ以テスレバ

露国ガ蔣介石ニ強要セル条件中ニ

中央軍ヲ改組シテ共產軍及露軍將校ヲ入ルベシトイフコトアリ

是ヨリ見テモ共產軍ノ編成裝備ハ勿論、其指導ニハ恐ク露軍之ニ加リアリト見ルベク、

然ルトキハ此軍ヲ撃ツコトハ他ノ支那軍ヲ撃ツ如ク同様ニハ参ラサルベシ

依リテ共產軍ノ内容ヲ計画的ニ偵知スルノ必要ヲ感ジタリ、上陸後直ニ之ガ諜知ニ力ムベク、腹案ヲ以テ大連ニ向フコトトセリ

(6) 二十一日宮様御暇乞ノ節ノ宮様ノ御話ニ依レバ16Dヲ北支ニ用フルナラバ何故ニ13Dト共ニ北上セシメザルカ、戰略上カラ見テモ將又船舶輸送ノ状況ヨリ見テモ之レヲ最モ有利ナリト信ズヘキ旨意見具申セラレタルモ遂ニ採用ニ至ラズ

宮様曰ハルルニハ

私ガ余リヤキモキシテ勝手ナ意見ヲ出シテ居ル様ニ見フルガ故ニ、利害關係ハ明白ダト思フケレドモ、何ダカ私人ヲだゝをこねる様ニ思ルルヲ以テ少時沈黙シテ状況真相ヲ確實ニスルノ外ナシ

之ヲ要スルニ、誰ガ如何ニ考ヘテ決定シタノカ知ラスケレドモ、余リ明〔名〕案トモ思ハレズ案ズルニ極メテ単純ナル構想デハナイカトモ思ハル、即チ歐洲大戰後特ニ我國兵學界ハ包围迂回ヲ常用スルコトニナツタ、其ガ手段方法ハ教ヘズシテ何デモ迂回何デモ包围ト包围迂回病ニ罹ツタ様ニ思ハレタ時ガアル丁度昭和五六年頃予ガ陸大教官時代ノ高等司令部演習ヤ大軍ノ作戰ニ於テ見タ処デアル、然モ其方法タルヤ欠陥ダラケデアツタ、此迂

派遣軍參謀長 飯沼 守 21期

第百九師団長 山岡重厚 15期

回包围トイフ熱病患者ハ既ニ兵力転用トイフ余病ヲ併発シテ居ツタ
此度ノコトモ恐クハ兵力転用病ノ熱発デハナカロウカ

◇二月二十三日 晴 昼少ノモヤアリ 比較的寒シ

一、午前十時松井大將面接トイフノデ新市街企業地ニアル音楽学校ヲ占拠スル方面軍司令部ヲ訪ネタ、自動車デ約二十五分、新市街トイフガ碌々家屋ハナイ。其片隅ノ一軒屋交通極メテ不便、建築モ余リ立派デナイ処ニ能クモ方面軍司令部ヲ選定シタモノト思ツタ
空襲ヲ避ケタ積リカ何レニシテモ隷下部隊ノ出入ハ極メテ不便デアル、自動車ヲ持ツモノハ何トカナルトシテモ否〔然〕ラザルモノニハ一日仕事デアル
高等司令部ハ団隊アリテノ司令部ナリト考ノ足ラヌモノナリト言ハレテモ致方ハアルマ
イ

一、松井大將ニ面会シテ隷下ヲ離ル、ノ申告ヲシタ、次デ第十六師団ニ対スル挨拶ノ辞ガアツタ、声ガ極メテ小サイノト時々細ク切レル様ニナルノト、小生少シク耳ガ遠クナリテ居ルノデ半分シカ明瞭ニ聞キ取レズ

モウ声量ガナクナツタノカ或ハ小生ノ前ナレバ消極的声音ニナリタノカ、最〔尤〕モ少シ顔ガ振レル様デアル

何ト言フカト思フテ聞ヒテ居タガ

(第十六師団ハ南京攻撃ノ中堅ト成リ)

トイフ言葉丈ハ聞キ取レタ

是レハ後ニナリテ他カラモ聞イタガ、前カラ上海ニ居ツタ師団ハ死傷ハ多シ志氣沮喪シテ居ルノデ、南京トイフ首都ヲ攻撃スルト決心シタ時ニハ余リ期待シテ居ナカツタランイノデ、或ハ第十六師団ヲ信頼シタノカモ知レヌト思ツタ

併シ是モ彼等ノ認識ノ不足デアツテ、予ヲシテ言ハシムレバ成程従前ヨリノ師団ハ上海ノ陣

地戦ニ就イテハ余程考ヘサセラレタロウケレドモ

陣地戦ト機動戦トハ要領ガ異ルノデ事実追撃戦ニナリテ我々ノ師団ト併行シテ前進シタ師団ハ大ニ活動シタ様ニ思フ

ダカラ陣地戦ニ於テ志氣昂ラズトシテモ機動戦ニナレバ又大ニ用フルニ足ルト知ルベキデア
ルノニ、思致ニ到ラザリシハ之ヲ認識不足ト云フモ誤リニアラザルベシ

要スルニ師団ハ大ニ用ヒラレタリ、ソシテ重要正面ヲ担任シテ南京ハ師団ガ占領シタ様ニナツタガ、是レハ高等統帥部ニ兵力誤認モアリ、先入観ニ誤ラレタル点モアリ、師団ガ独リ功ヲ私スベキモノニアラザルナリ

一、其ヨリ一応ホテルニ帰リテ休憩セシガ

午後首藤氏(大連商工会副会頭)ヲ中心トスル大分県人会ノ人ノ訪問ヲウク、見舞トシテ林檎及蜜柑三箱ヲ贈ラル、記念写真ヲ撮影シテ夕刻去ル

一、午後六時ヨリ方面軍司令官邸ニ於テ会食ヲ催サル、此夜ノ御馳走ハササガ上海ガ長崎ニ近イ丈アリテ料理人モ相当ノモノ材料モ中々珍シキモノアリ

鯛ノ生ノ塩焼ト瀬戸ノ鯛ノチリトハ極メテ美味ニシテ

南京ノ朝香宮様ノ処ガ御氣ノ毒ニ感ジタリ

一、話中かっぱらいの話あり

予ガ軽重機ノ分捕品ト小銃ヲ以テ装備強化ノコトヲ語リタルニ対シ、大將ハ其ハ軍ニ差出シテ呉レネバ困ルトイフ様ナコトヲ述ベタリ、此男案外ツマラヌ杓子定規ノコトヲ氣ニスル人物ト見ユタリ

次ニ国民政府ノ中ノかっぱらいノ主人ハ方面軍ノ幕僚ナリト突込ミタルニ、是ハササガニしらばくれテ居リタリ

家具ノ問題モ何ダカケケチンシタコトヲ愚須愚須言イ居リタレバ、国ヲ取り人命ヲ取ルノニ家具位ヲ師団ガ持チ掃ル位ガ何カアラン、之ヲ残シテ置キタリトテ何人カ喜ブモノアラン

中島中將は大分県出身

ト突バネテ置キタリ

一、午前ノ申告、午後ノ会食時ニ共ニ一騎兵中尉ヲシテ衛兵十名ヲ率ヒテ案内兼護衛セシメ、然モ此中尉君中々慣レテ居リ、氣持能クヤリテ呉レタコトハ快ナリキ

一、午後六時將ニ出発セントスル時、伊東政喜ガ来軍シタレバ一寸室ニ帰リテ会話十五分ニシテオ互ニ武運長久ヲ禱リテ別レタリ、彼モ中々ニ元氣ニ見エタリ

一、二十二日到着後千田大佐来リ何処カへ案内スルトノコトナリシモ、予ハ随分不羈ナ言動ヲ敢テシアリ之ニ對シテハ、ねたみモアルベク恨モアルベク、此等ノ分子ハ半面穴探シモシテ居ル筈ナレバ君子危キニ近カズトイフ考へニテ遠慮スルコトトセリ、彼又能ク諒解セリ

一、村上和尚、誓山君、白崎君来訪、同時ニ贈物ヲ頂戴シタリ

一、師団ノ遺骨ハ予ノ隷下部隊ノ分ハ後方ノ病院ニテ死亡セシモノヲ合シテ九四〇柱、其他ニテ第十六師団ニテ動員担任セシ部隊ノモノニ六柱、合計九六六柱トナリ、全部用意完成シテ西本願寺ニ安置シアリタレバ、昨日ノ告別式ニ間ニ合ハズ予ハ午前中御詣リセリ

規則通りニスレバ遺骨ハ各隊ヨリ直接兵站ニ届クルコトニ為シアリトイフモ

斯クテハ兵站ニテハ整理ニ困ルベク、又其丈ノ手モナケレバ隷屬關係上其程親切丁寧ニモ出来ザルベシト考へ、一方遺骨還送遅レタル為内地ヨリ飛行機ニテ上海ニ来リタル父モアルトノコトニテ、一日モ速ク且ツ確實ナル方法ニテ送ルヲ要スルト信ジ、予ハ規則ニ拘泥セズ先ヅ師団ニテ取纏メタル上從軍僧ヲシテ整理ト供養ニ任ジ、次デ上海護送ノ時從軍僧全部ヲ派遣シテ兵站ニ於ケル整理ヲ手伝シメタレバ、間違モナク迅速ニ出来テ22日他師団ニ先ケテ告別式モ済ムコトトナリ、兵站司令官モ喜ビ居リ、又千田大佐ガ便船モ心配シテ呉レテ、結局二十五日出航スルコトトナリタリ

聞ケバ今迄ハ全部広島ニ揚陸セシカハ其數ノ多キハ國民ヲ刺戟スルコト大ナリトテ、一回四百五十柱ト定メタルモノナリト、

然ルニカクテハ時日ヲ遅延スルコト甚シク遺族ニ對シテモ済マヌトイフコトニ成リ、揚陸

地ヲ逐次變更スルコトトシテ多数出帆ヲ計画セリトイフ

丁度此時機ニ会シタレバ師団トシテハ最モ仕合せナコトニナリタル訳ナリ

一、上海ニ於ケル海、陸、外ノ三巴戟

一、上海市在留日本人ノ新団

一、上海市ニ於ケル自治維持委員会要人ノ得ルノ困難

上海ニ来テ見レバ市内到ル処ニ水兵ノ歩哨アリ、印度人ノ警官アリ、憲兵アリテ陸軍ノ歩哨ヲ見ズ

聞ケバ市内ノ警備ハ海軍ガヤリ市外ノ警備ハ陸軍ガヤルコトニナリアリ、其上憲兵ハ陸海軍ヲ通ジテ軍事警察ニ從事シテ居ル

此外ニ又領事館警察トイフモノガアリテ三頭カ四頭政治ヲヤリテ居ルトノコト
一寸開店シ度ト云フテモ領事館ト海軍ト憲兵ト何処ニ往ツテ認可ヲ得テ宜敷ヤラ、人民ハ当惑ノ態ナリトノコトナリ

何故ニ海軍ハカクモ出シヤバルノカ、何故領事館ナドニ物ヲ言ハセルノカ、陸軍ノ特務機關ハ何ヲシテ居ルノカ、統制ナキ國民トイフ小林順一郎大佐ノ評ハ不幸ニモ此処ニハ露骨トイフハ余リニ露骨ニ展開セラレテ居ル、是レハ上海市場ニ於ケル新日本居留民否ナ占領地ノ行政ノ確立ナド何時ノコトヤラ

其ヨリモ先キニ、一体上海ハ占領シタ積リナノカ其共敵ヲ驅逐シテ居留民ノ保護ノ任務ヲ達シタトイフ積リナノカ、何ガ何ヤラ明カナラズ

○今度ハ上海ニ復帰シ又ハ新ニ乗込ム日本人仲間ノ間ニ又モ庄擡「軋轢」ガ生ズル、旧居留民ハ我々ニ先任権ヲ与ヘル位ノコトハ当然、サナクバ亡失シタル資産ノ賠償ハ出来ヌト主張スルシ、其ヲ其通りヤラレテハ、折角新正「生」面ヲ開拓セントシテ来タ新人ノ活動ヲ制限セラルルコトニナルトイフ

上ニ一定ノ主義方針ナク多頭政治デノラリクヲリスルシ、下ノ分子ガ又相互ニ競争スル

第一百師団長陸軍中將 伊藤政喜
14期 共に千葉縣四街道 野戰
砲兵学校の主である。

第九師団第一兵站司令官 歩兵大
佐 千田侃次郎15期

小林順一郎 一八八〇〜一九六
三(明治13〜昭和38) 大正・昭
和期ノ陸軍軍人(大佐)。(生)新
潟県。(学)陸士13期。近衛野砲
兵隊隊付となり、日露戦争に出
征。一九〇九〜一二(明治42〜
大正1) フランスに駐在し、第
一次大戦にはフランス軍に從軍
した。³³ ³⁶ (昭和8〜11) 平
和条約実施委員として欧州に出
張した。³⁸ 砲兵大佐の時、予備
役となり、その後フランスから
の兵器輸入にたずさわって財を
積み、それを資金として右翼運
動の黒幕となり、三六俱樂部を
主宰した。(著)「陸軍の根本改
造」一九二四。

(「コンサイス人名辞典」)

シ、是デハ日本人ハ何ヲスルノカ外カラ見テモ受取レヌハ最〔尤〕モ千万デアル
○スル状態ニアリナガラ虫ノ好過グルノハ日本側ナリ、矢張り上海ニ確乎タル自治機關ヲ設ク
ルコトヲ企図シテ居ルトノコト、一体支那側ノ人物カライヘバ支那政府ダラウガ日本政府ダ
ラウガカマハナイ、己レガ安全ニ權利利益ニ預レバヨイノデアルガ儲テソノ安全ガ保証セラ
レナイ、日本側ニ確乎不拔ノ決心ガ見ユレバ、ソシテ先キノ見込ガツケバ誰デモ来テヤラウ
ト云フ者ハアラウケレドモ 明日ニモフラフラニナリソウナ日本側ノ態度デハ、今日ハ日本
側明日ハ斬殺トイフノデ到底此危險ナル瀬戸際ヲ乗切ラウナドイウ者ハ出テハ来ヌ筈ナリ
其ニ氣附イテ居ルノカ氣付カズシテ御芽出度ノカ、御天氣ヲネラツテ居ルト来テハ矢張り
言語道断トイフ外ナイ

◇一月二十四日(之レハ大連二十九日ノ記事也)後数日ニシテ記述シタレバ転倒セリ

明二十五日乗船スルノデ別ニ面会スベキ人モナシ、一日余裕ヲ取り買物ヤ軍装ノ支度ヲ完成
スルコトトセリ

一、寒イカラトイフノデ毛皮ヲツケタ編上靴ヲ注文シタガ正午過ニ出来タ、今迄ノ靴ハ底皮ヲ
焼イテ割レタノデ切カヘタ、今度ノモノハ非常ニ軽ク出来タ

一、外套ノ袖裏ノ毛皮ガ入用トイフノデ安物ヲツケテ其モ出来タ、毛皮ガ厚イノデ少シ窮屈ニ
ナツタ

一、食料品買入ヲヤツタガ中々良品ガナイ

一、毛皮ノ手袋ヲ買ハントシタガ大連ハ比較的暖ナル為メ軍用ナドトイフ実用向ノモノナシ奉
天ニ往ケバアルトノコトナレバ買入レヲ止メテ普通ノ革手袋二三ヲ買ツテ置クコトトセリ

一、是迄ズツクノ混ル革靴ヲ使用シタガ不十分ナノデ上等ノ革靴ヲ二個買求メタリ

一、午前中村上昇一君来訪ス、満鉄入社後ノ様子ヲ聞キ将来ノ事ナド長談シテ一旦別レタル
ガ、夕刻又土産物ナド持チテ来レリ、依リテ夕食ヲ会食シテ別ル

一、夕刻同志社ニ居リタル長島君来訪シ、是モ同時ニ会食シテ別レタリ、氏ハ満鉄ニテ研究部
ニアリ露国方面ノ研究ヲ担任シアリトノコトナレバJ u i f 問題ヲ閑却セヌ様注意シ置ケリ

一、小川君(栃木県人ニシテ株式取引所ニアリト云フ 千葉、市川時代カラ熟知ノ様ニ話シ居
ルモ、小生ノ記憶明ナラズ)来訪、種々大連ノ事情ヲ聞ケリ

一、桜井ニ携行セシメ運送船ノ船長ニ依頼シテ神戸憲兵ノ手ヲ経テ留守宅ニ送ラントセシガ行
違トナリ、大連揚陸シ宿ニ持来リタレバ一籠二亟ハ村上ニ預ケ他ノ二籠三亟ハ女中頭(おふ
みさん)ニ預ケタリ、避難ノ際取残サレタルモノガ日本兵ニ拾ハレ、小生ノ手ニ入りテ南京
ヨリ大連マデ来テ又別レテ命ヲ全フスルコト「カナリヤ」ノ数奇ナ運命トデモ云フモノ哉、
小生ガ凱旋スルヤラセヌヤラ、スルトシテ再ビ大連ヲ通過スルヤラセヌヤラ、通過スル時彼
ガ生キテ居ルヤラ居ラヌヤラ、是又将来ノ謎ノ様ナモノナリ

◇一月二十五日 上海発大連汽船奉天丸ニテ大連ニ向フ

上海モソコソコニシテ24日長谷川司令長官、陸*戦隊司令官、運輸部*田代少将等ヲ訪ネテ暇乞
シ、25日午前十時塚田参謀長ノ司令官代理見送りヲ受ケ奉天丸ニ乗船シ、同十一時出航シ、玆
ニ中支戦場ニ名残ヲ遺シ九百四十ノ英靈ト訣別シテ航路ニ上ル
多少ノ薄霧アリタルモ概シテ遠望シ得、黄浦江岸上陸点附近ノ戦禍ノ跡ヲ横目ニ眺メツツ港
外ニ出ス

此日ハ概シテ風ナク波静ナリ、然シ夕刻ヨリ少シク動揺ヲ始メタリ

平生ナレバ何モ氣ニスル程ニハアラザルモ、全般的ニ衰弱シ且炭火ノ為何トナク心臓ガ弱ク
ナリアル心地スレバ、用心ノ為速ニ就寝セリ

上海海軍特別陸戦隊司令官 海軍
少将 大川内伝七海兵37期
中支碇泊場監 陸軍少将 田尻昌
次18期



南京へ進撃中途

小休止中の中島部隊の兵と馬

金丸吉生軍曹撮影
使用カメラ スーパーシックス

金丸吉生軍曹手記

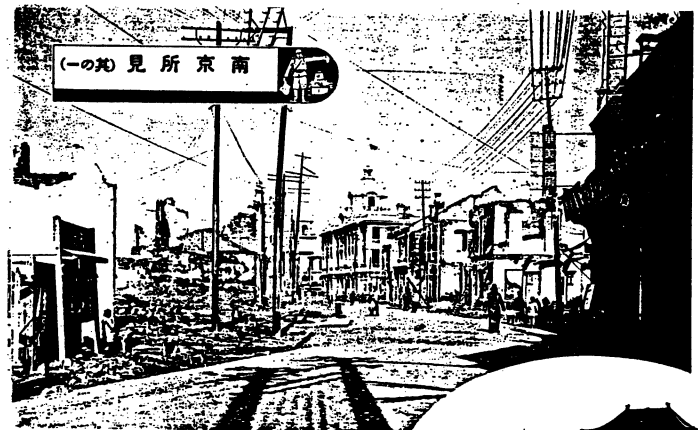
第十六師団経理部

私は昭和十二年八月二十五日第五動員で召集され京都の第十六師団司令部の経理部主計軍曹として入隊し衣糧科の一員となり数日後には北支派遣軍として北支へ向かい、北支の塘沽へ上陸して子牙河遼江作戦に参加し泥濘の中を進撃してやっと局部的に一時安定した十一月初めに、北支寧晋をあとにして石家荘より乗車し北京、山海関を経て大連から輸送船に乗り上海向にけて出航しました。乗船後に南京攻略に参加すると聞かされ驚くと共に気の引き締まる感を覚えしました。数日後に船は揚子江を遼江して白茆口沖で停船し第一線部隊の敵前上陸に続いて上陸し、それより常熟―無錫―丹陽―常州と進撃して湯水鎮へ着いたのが十二月初めであったと記憶しています。

当時のことを回想すると次から次と在りし日の体験が思い出され、今後少し余暇が出来たら詳細に回想録を綴りたいと考慮中です。とにかく敵の首都攻略は一番乗りは我が部隊だとの意気で南京攻撃参加各部隊の熾烈な競争はすぎまじく、第十六師団長中島今朝吾中将でさえ京都野砲兵聯隊の砲撃にじりじりしたのか「俺が指揮する」とばかり自ら丘陵に立って号令をかけているのを目撃しました。ところが敵の迫撃砲弾にあたって負傷せられました。が屈せず、なお元氣を出して前進の指揮をとられたこともありました。

南京攻略はあまりにも進撃が早いので我々経理部の仕事は殆どなく、当時南京街道は兵と車輛と軍馬が一杯で兵站の車はとても前進できず、前線への食糧の支給も紫金山へが、やっとだったと思います。

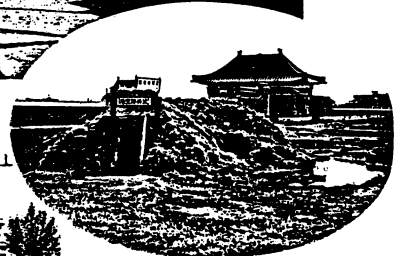
さて南京一番乗り競争は十二月九日の協坂部隊の光華門が一番乗



路馬大園下



野田下



公共防災

りでしたが、これはあとで光華門の一角の占領と知りました。我が十六師団は紫金山攻略に手間取っている歩三三(野田部隊)の情勢に一喜一憂しましたが、漸く十二月十一日頃敗走する敵とこれを追撃する我軍とが入り乱れて南京郊外を下関へ向けて交戦しているとの情報を耳にしました。私は湯水鎮を経て麒麟門付近に居た時、中山門占領の暁は歩二〇(大野部隊)の一部隊と共に城内へ入り敵の財産の徴発をせよとの命令を受けて、十三日の午後になって初めて中山門より入城しました。

たまたま『偕行』五十年五月号を拝見していたら、私の行動と大飼総一郎氏の行動とよく似ているのに驚きました。私はその時約一〇小隊の兵隊と共に中山門より中山東車路を経て中央ロータリーへ行き、それから北へ向かって中山北路を通過して挹江門の方向まで行く予定が、行けば行くほど銃声が盛んで各所に火災もあり暗くなったので、引き返して国民政府の建物近くにあった「南京飯店」という大きいホテルで宿営しました。その時、昼間見た敵の中央病院にあって毛布を借りるつもりでそこへ行ったら、不思議な事に大勢寝ていた中国軍の傷病兵の姿も毛布も何もなくなくなっていました。引き返してホテルの真つ暗闇の中の廊下で飯盒で飯を炊きローソクの光で寝ついたことを覚えていいます。

南京中央ロータリーまでは火災もなく人影もなく比較的静かでしたが、ただ家屋の中はあきれほど乱れて道具類はおろか商品らしきものは何一つなく、棚にあった物まで全部粉々に破壊され足の踏み場もなく、殆どが木の破片ばかりで所々に便衣らしき服を着た者や正規兵等の死体が転がっていました。私は敵の官庁らしい所にはみな標識をしました。しかし、中央ロータリーを通り過ぎると火災

があり路上には兵器や軍服はじめ軍隊の使用したいろいろなものが散乱し、その中に死体が累々として倒れているのを見ました。挾江門近くは戦闘中のためまた付近が火災で近寄れず、死体をまたいで引き返しました。途中、路の両側には官庁の建物が沢山あったことを記憶しています。

さて、その翌日か翌々日の十五日になって、私は師団司令部の置かれた元国民政府の建物中に設置された経理部で命令をうけました。その要旨は「下関郊外にある製粉工場を接収して内部の物品の調査保管と、それを隷下部隊へ支給せよ」との事で、直ちに一コ分隊の衛兵と通訳一名と共に下関へ向かいました。同時に同じ経理部の福地主計少尉は、下関に在る電気会社の修理をして一日も早く南京市内へ電灯がつくようにと命令されました。私は下関へ到着してすぐ左折して、クリーク添いの道路を行くこと千メートルくらいの所にクリークの支流があり、そこに工兵が架設した仮橋を渡ると、すぐそこに大きな製粉会社の倉庫が幾つも並んでいるのが見え、そして倉庫前には大きな広場があることが判りました。

そこで早速倉庫内を調査したところ、小麦粉や麵、大豆等が到底勘定ができないくらい多量にあり、勘定は後回しにすることに決めて休んでいたら突然衛兵が飛び込んで来たので「何だ」と聞きますと、「ただいま工場内を調べたところ一番端の倉庫に敗残兵が大勢いますが、皆抵抗する気配は見えません」との報告を受けましたので現場へとんで行くと、正規や便衣の中国軍兵士が約三百名余り坐って両手をおとなしく頭のにせていました。

「何処へ行くのか」と聞いたところ「処分をしに行きます」との返事でした。

私は「そうか」と言ったものの何となく寒気を感じました。この捕虜は漢西門近くの濠(クリーク)と城壁の間にある斜面になった土地へ連れて行き機関銃で処分し、石油をかけて焼却したことを後に知りました。

それを聞いてやっとなんか判ったことは、私たちの居った製粉会社の倉庫の裏は揚子江でしたが、その反対側には高い堤防がありそれは道路ですがその向こうが水濠(クリーク)で水面幅が約三十メートルくらいあり、その向こうに二、三十メートルのゆるい斜面の土地があったのでその向こうに城壁がありました。そこで数日間毎日夕方から夜になると盛んに銃声が聞こえ、その後で火が燃え上がり毎夜おそくまで青白い焰が燃え続けているのを見ました。だから正確な数は判りませんが一夜に五、六百名として三千名から四千名くらいの処分があったものと想像されます。これが私の見た中国兵処分の実態です。

市内での死体はそんなに多量のものでなく、南京西北部から下関へかけて散乱しており、また歩三三の兵隊の話では汽車の貨車に中国兵を一杯積み込んで線路を押し揚子江へ突き落とされたのが十輛足らずあったと聞きました。また中国敗残兵の略奪や放火の甚しかった事はすごいものでした。なお聖壕の死体はたくさん見ましたが、これは白兵戦の時の死体だと思います。

さて、私の果たした任務の事を少し述べたいと思います。私が受けた命令は製粉工場倉庫にある小麦粉を各部隊の人員に応じて支給

早速、身体検査してから安全を保証し食糧を支給するから倉庫の整理に従えと命じたら、喜んで承知しましたので働かせることにしました。その場にあった多数の兵器や弾薬はすべて別の倉庫へ移し施設しました。これがモトで数日後突然巡視に來られた中島今朝吾中将が発見されて大目玉を喰らい、司令部中に知れわたる事件になりました。

その翌日(十七日頃でしょうか)、報告のため下関の埠頭まで行きますと、敵の乗り捨てたフォードのT型乗用車があり、配線をやり直したら幸いにエンジンが動いたので早速、これを利用することに、それ以来それが随分役立ちました。

そこで経理部との毎日の連絡や野戦倉庫に行く時に(中山門近くにあった)これを使用すると共に南京城はもろんその周辺をあちらこちらと走り回って見ることができました。したがって歩三三(野田部隊)の追撃戦の跡はもろん、下関の付近、揚子江岸道路も見ました。江岸道路には死体の山が所々にあり、それは百名程度のもので真っ黒焦げになっていました。それらはみんな敵冬のことでもあり全部硬直していました。また、対岸の浦口と連絡する鉄道路線には焼けただれた貨車があり、その中にも死体が一杯あり、これらは全部正規兵と見受けられました。

その頃のある日の夕刻揚子江岸道路を軍歌でも歌っているような大合唱が耳に入ったので何事かと止まって待っていると、四列縦隊の中国兵が約一コ大隊ほど大声を発しながら(これは大声で泣いている声でした)、そして、その両側を十メートル置きぐらいに剣付きの三八式歩兵銃を持った日本兵が監視をしながら行進して来たの

することですが、何万袋もある小麦粉ですから相当多く支給しても十二分の量があり、また麵は馬匹を使用している騎兵隊や輜重隊はか野砲隊等に対するものでしたが、これも充分にあったのです。南京市内に行くたびに難民の近くを通りますので、ある日思いついて近くの外資系(米)石油会社のマネージャー(支配人・中国人)にトラックを借りる契約をして、それに小麦粉を積めるだけ積んで漢西門を経て金陵大学校内にあった難民区へ届けに行きました。

その入口は日本軍の憲兵と歩哨が立っていました。私が訳を言ったら直ちに開門してくれたので車を校庭内へ入れ小麦粉を全部渡したところ、中国の責任者から声涙ともに下る謝辞をうけました。こんなに喜んでくれるのならとその後三回ばかり行って行きました。これは私の責任で行ったものです。金陵大学の先生らしい人が私に「日本軍は恐ろしいものだと思っていたがこんな親切な行為は初めてだ」と両掌を合わせ「謝々謝々」と言われたものです。

次は前述の中島中将に大目玉をくらった事件ですが、大倉庫を占領したのをよほど自慢したかったのか石田経理部長が司令官にこの事を報告したため師団長が下関の実状の視察をかねて倉庫へ突然に來られたわけです。私は何も知らず平常通り部隊に糧秣を交付していたのですが、その日(たぶん十二月二十日頃です)は朝から相当寒さがきびしく水も張り、少し雪が積もっていたので私は交付現場で木炭をたくさん、大きな火鉢に入れてその上に両足をのせて(いわゆる股火鉢です)真っ赤な毛糸の厚いジャケットを着て、うつむいて火に手をかざしていたのです。

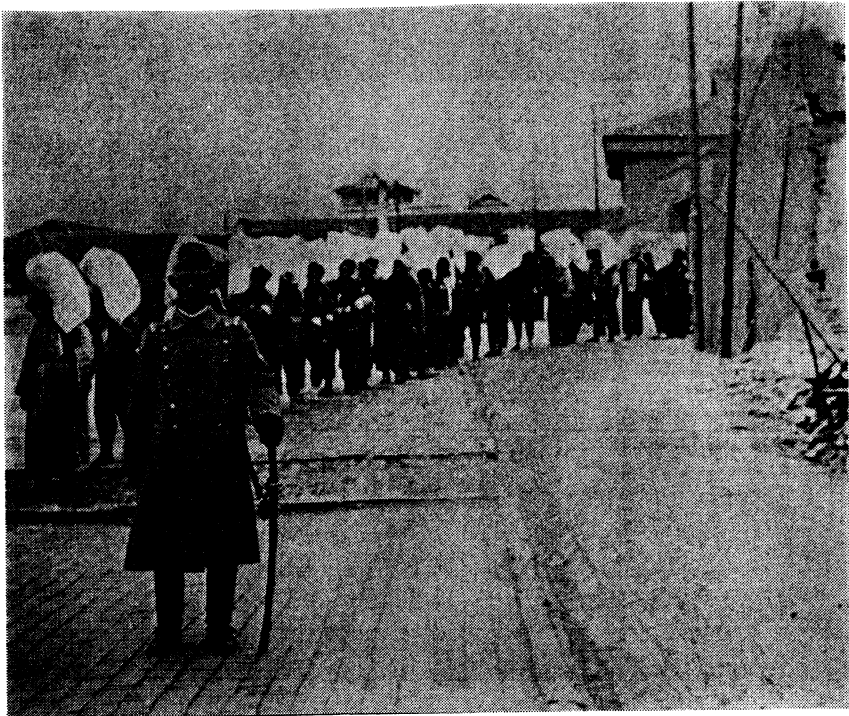
ところが何かザワザワするのでふと顔を上げると、なんと師団長はじめ参謀、副官、経理部長が目前に立っているではありません

か。驚いてそのまま直立不動で立ち上がりました。すると経理部長に「金丸軍曹、今から閣下をご案内せよ」と命ぜられたのであわててそのままの姿で先に歩くと、閣下が「ちょっと待て、お前のその姿は何だ、敗残兵の大勢いる中で身に寸鉄も帯びず無警戒も甚しい。貴公は阿呆と言おうか大胆と言おうか、とんでもない奴だ。もし敵にやられても戦死扱いにはしないぞ」と大声でどなられました。付近にいた上官たちも驚いたような顔付でした。

〔注〕このとき、随行した木佐木参謀の日記によると、中島師団長が下関の製粉工場を巡視したのは十二月二十三日午後のことである。〔木佐木久日記〕参照〕編集委員

私も止むを得ずジャケットを脱いで先頭に立って倉庫を順次案内しました。ここでもた、とんでもない事が起こりました。私が勝手に使っていた捕虜の姿が見えないのをすっかり忘れて、最後の倉庫の前まで行くと扉が閉まっていたので衛兵に「開けよ」と伝えましたら中には捕虜三百名が初日に取りあげた兵器の傍にしゃがんでいました。私も驚きましたが閣下も一驚した様子で、たちまち大声で「これは何だ。こんな者と兵器と一緒にして、もし反抗したらどうするんだ」ときつい叱責をうけました。

実は通訳が気をきかして捕虜を倉庫へかくしたのですが、そんな事とは知らず扉させたのが悪かったので、私の責任で「どうにでもしてくれ」と言った気になりましたが、何とか副官の取りなしで私はやっと解放され、閣下は帰られました。(なおこの通訳は、後に私と偵察に行った時敵襲を受けて惨殺されました。)



ところが後日、経理部長はこんな事を知らせてくれました。明けて昭和十三年正月、軍司令官主催の年賀の席のことです。「中島師団長は『私の部隊の一主計曹長で無腰のまままで三百名の捕虜を自由に使っている大胆不敵な奴がおりまして、大した働きをしております』と自慢しておられたぞ」と石田経理部長は嬉しそうに言ってくれました。(註・私は何時の間にか一階級昇進して、曹長になっていました。呵々)

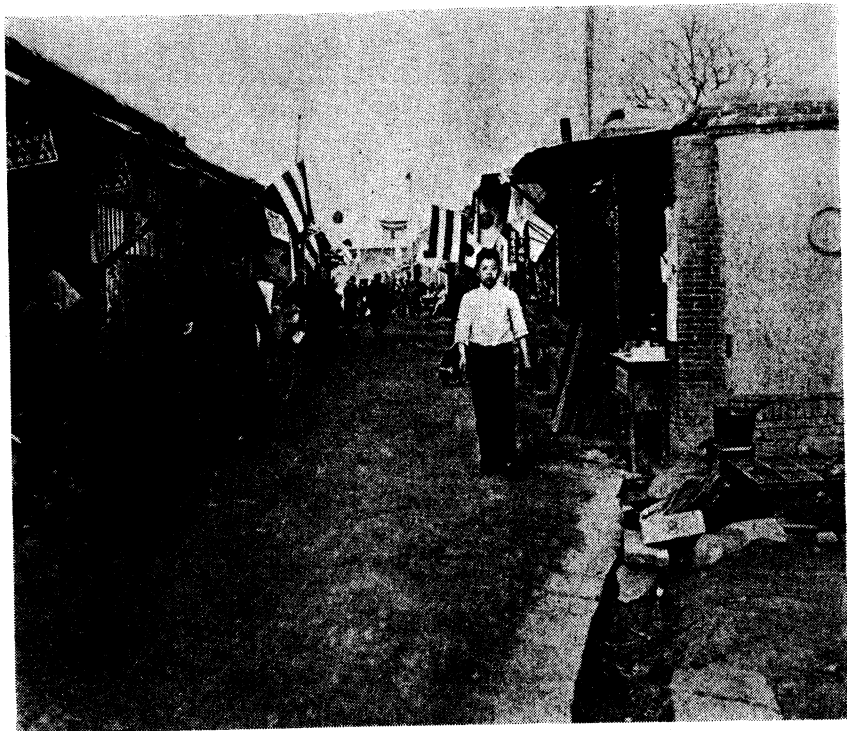
それ以来、私は中島中将に気に入られ朝夕目にとまると必ず言葉をかけていただき、除隊後も時々手紙をもらっておりました。今もお、遺族の方と交際しています。

南京における私の働きが良かったのかどうか判りませんが第十六師団は北支へまたまた転戦することになり、私は昭和十三年一月十五日に最先発の命を受けて経理部の酒井大尉と召集された富田少尉と私の三名で即日上海へ出発し、上海から大連へ直行して後から来る師団各部隊に防寒服その他を大連埠頭で支給することになり、私は約一カ月間大連に留まり、ずいぶん呑気な生活をしました。

それ以後は徐州戦、臨海線沿いの追撃、尉氏での決潰氾濫した黄河の水との戦い、大別山越えの漢口攻略戦等々に加わって昭和十四年八月帰国しました。

下関の製粉工場で中国兵捕虜を指揮して小麦粉を師団の各部隊にわたすのが私の任務であった。ある日、長井少佐が視察に来た。この前日に豪放で有名な中島今朝吾中将が石田経理部長や参謀、副官を帯同して突然来られて小生は捕虜取扱いの不行届きに大目玉を食らったのである。

金丸 吉生



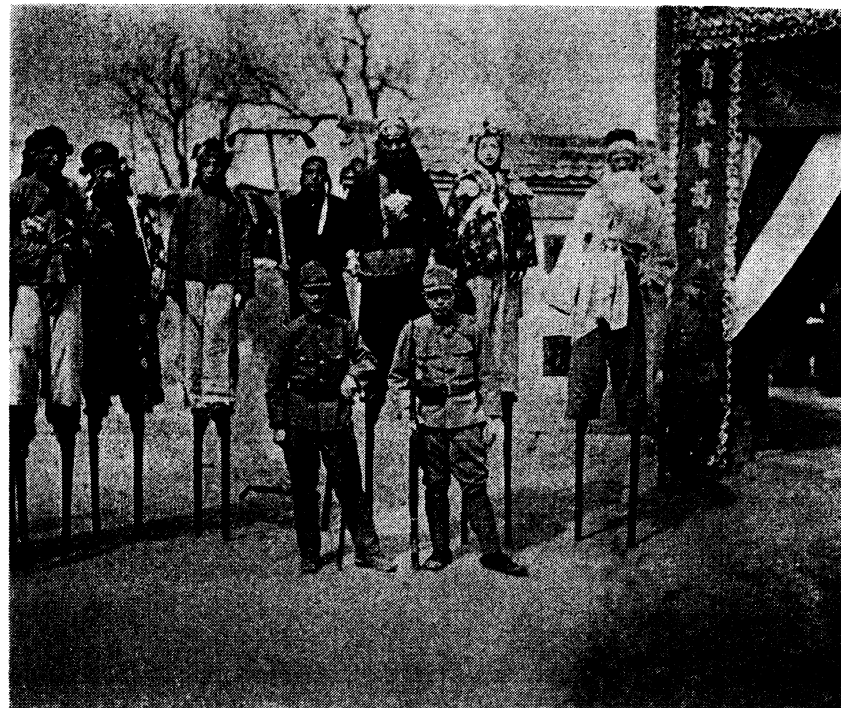
下関製粉工場付近の

住民の迎春風景

金丸 吉生

この3枚の写真は、金丸氏が戦後編んだ戦場写真集から引用したものである。

氏は従軍中、愛用のスーパーストックスを肌身離さず携行し、現像には飯盒、鉄帽などを使用したという。



昭和十三年一月一日下関にて
近くの住民が高脚踊りで祝賀に来てくれた。
(前列左・金丸軍曹)

金丸 吉生

佐々木 到一 少将私記

歩兵第三十旅団長・陸軍少将
18期

本記録検査作新日誌、非を
 ナリと意味本位本報に非を
 活字とせん中俾ありあつた
 思出あり干渉あり外不
 なる人ニ云々故や故りて之
 ありは他人の非を論じし
 門外不云々云々約せしめ
 今カキ………

佐々木到一少将私記原文

三、敵前九十度旋回

◇十二月九日〔昭和12年〕

未明行動を開始したが態勢を整へた時は結局夜が明けてゐた。敵の死体が田圃に幾つでも転がつてゐる中を乾田中の徒小徑を三縦隊となつて前進する。砲兵の進路が一度揚子江岸近くまで進出した後九十度左折しなければ通過できない一本道路であつたのと、兎も角敵を一度江岸まで追撃しなくては目指す南京北側地区への進出が出来ないので、昨八日夜の戦場追撃は少くも敵に脅威を与ふる程度に前方まで進出しなくてはならなかつたのである。併し僅かに二日間の力闘ではあつたが兵の体力はかなり涸渇してゐたのでこの夜間追撃は實際活澗を欠いた、そしてその夜の内に鎮江方面よりする敵の退却が行はれたらしく列車の運行する火光や轟々の音が聞えたのであつた。

旋回の角頂にある東陽鎮附近にこの朝大なる火の手が上がつてゐた。敵は退却する縦隊の側翼を放火に依つて我軍から阻止しやうと試みたらしい。

鎮江から退却する敵に対し無二無算に懸つて行かなかつたこと、可否は別に議論の余地があるかも知れないと思ふが、我支隊の任務は速に邪魔する敵を蹴散らして南京城の背後を遮断しなくてはならないのである、従つて道草を食ふやうな行動は予としては断じて避けることに決心してゐたのである。

併しこの行動は実は無暴「謀」に近い危険性を帯びてゐた、「閣下大丈夫ですか」

「なに大丈夫さ、逃げて行く敵には振り返つてくる丈の勇氣は無い。やつて来れば来た時の話さ」

副官は予に絶対の信頼を持つてゐるから此問答も実は御座なりに過ぎなかつた、併し之が図上戦術ならば甲論乙駁はあると思ふ。慎重な戦術家は少くも三乃至四分の一の兵力は残置したであらう。

前衛、右側衛、後衛を設けなければ危険を感じる行軍部署である、従つて例の如く支隊本隊は僅かに一個大隊に足りないのであつた。

午前十一時新態勢に於て行動開始、幸にして敵は我を追尾して来なかつた。

七日から左翼大孤山に膠著してゐる歩九の一部隊に対して、我支隊に連繫して前進することを要望してあつたが、遂に前進せず、午後に至つて行動を起し我隊の後方に進出して来たのである、元來我支隊の進路は大孤山正面の敵の背後に当るのであるから此方面の敵は夙に退却してゐたことと思はれるのであるが……

兎も角吾等は他人を持つ必要は毫も無かつたのである。

午後二時半我前衛は東流鎮附近の敵より射撃を受けて停止、敵の警戒陣地らしい、依つて直に砲兵に陣地進入を命じ、前衛歩兵の攻撃前進を援助せしめた。此頃右前の高地にも点々敵の散兵壕らしきもの及若干の敵影を認め一部を以て此敵をも砲撃せしめた。

砲弾が盛に命中する中を天空に投影する頂界線を腰を曲げて登つて行く敵を認めた、此方面に一部の我歩兵をも向けたが敵の逃げ足の方が早かつた。夕刻迄に敵の警戒陣地を奪取し、若干前進した後停止。

東流鎮に宿営。

これまで書くことを忘れてゐたが飲料水は毎日水の停滞したクリク又は溜池の水を使用した。冬季のこととて幸に下痢患者が多発しなかつたので大いに助つてゐる。

予は南京附近の地勢を熟知してゐるので、我師団の作戦地域内に当る中山門（東面）太平門（東北角で北面）の攻略は多大の犠牲を払ふに非ざれば成功しないものと確信してゐた、即ち前者は前に跋涉不可能なる幅百米以上の水濠を漕へ、後者は深約二十米の外壕を有し壕底より城壁の頂上まで少くも五十米は有ると見られる峻要の地である、城壁の破壊なぞ容易ではない、夫よりも寧ろ我支隊の行動方面たる紫金山以北の地域に主力を用ひ、一路下関を望んで敵の唯一の退路に殺到するを兵要地誌的の正當なる判断なりとして其旨意見を具申したが師団長の決心は既に主力を中山門に向けるべく決して居ると云ふことで、予はその以後再び云ふことを控へてゐた。各師団がすべて南京城を目懸けて殺到してゐる時機であつたからマラソン競争的の意識も或は有つたかと思はれる。

併し軍司令官朝香宮殿下も師団の主力は紫金山以北に使用するが適當なりとの意向を師団長に漏らされた由であるが既に命令起案後の故を以て御意図には従はなかつた由である。以上は師団参謀よりの内報であつて、師団命令と共に殿下の御意図として下関は敵の唯一の退路であるから有力なる一部隊を出すやうにとの旨を附け加へて此夜予に伝達されたのである。予の意見が容れられると否とは問ふ處ではない。予は三方より迫る敵に対し玉砕を期して任務に邁進すればいいのであつた。

右の師団命令に依れば予の攻撃すべき目標は太平門である、これは前述する如く直ぐ前に素敵に大きな外壕を備へ而かも玄武湖と紫金山の間に沿ふ地域を五十米の射程伸縮に依つて規則正しく撃つてゐる、田圃の土砂を上げ農家の屋根をふつ飛ばし、樹木を薙ぎ倒し、壯觀を極めたが、部隊は射線と避けてゐるから盲射する敵弾の壯觀を見物してゐられたのであつた。併し道路に近くてその上瞬く間に百発以上撃つてきたので実は笑ひごとではない。

我第一線は敵を駆逐しつゝ夕刻迄に堯化門西方一帯の高地を占領することができた。

此日松井軍司令官は守城司令官に対し勅降状を送り午後一時を期して其回答を求められたが遂に答は無かつたと聞く。深更受領せる師団命令に依れば師団は十一日を期して城壁に突入するとある、併し師団長の直轄となつてゐる歩三三は未だ紫金山の最高峯を奪取してゐないから十一日に城壁に殺到することは恐らく不可能であらう（師団長は焦つてゐるな）。後で聞くと依ると十一日には第九師団の一部が光華門の城壁に取り付いてゐる、元來南京城の南面は近接容易な地形であつて古來の此城の争奪は常にこゝで行はれてゐるのである。雨花台の行楽地が比較的平易なる丘阜をなして居て城壁間近まで蔭蔽近接ができるからである。

紫金山の峻要を抜かねばいくら焦つても城壁に取り付くことは不可能である。

此夜歩三三の第一大隊（一中隊欠）及輕装甲車第八中隊を配屬されるとの通報を受けた。

南京攻略後軍参謀より聴く所に抛れば殿下は予の支隊が広大なる

金山西麓の錯雑地を前地に控へてゐる、それで敵の城外支隊を蹴散らしてこれに主力を向け得るや否やは予が知れる地形上の判断では不可能事に近い。

ふと思ひ出したことには一條の間道があつた筈である、止むなければこれに小部隊を向けて所命を果そうと思ふ。だが以前の駐在から十年の歳月が流れ、その間に要塞設備が完成したのであるから実際に於て左様な間道は現存してゐなかつたのである。

楊子江畔の苦闘
前に右に敵と拂ひつ、
みいとせ進む野合の如く

四、敵城外支隊との戦闘

◇十二月十日

地形が相当複雑してゐること、部隊が分散してゐること、又敵の城外支隊が必ず我支隊の外翼から懸つて来るものと判断することに依つて早朝全態勢を此目的に適する如く規正する。

午前九時前進開始、微弱なる敵は輕戦の後退却、これは師団主力方面が同時に紫金山東南麓に迫つたからでもある、午前十一時頃には第一線は馬門南方高地から仙鶴門西北方高地へ進出することができた。

前面の高地には敵の既設陣地がある、滑稽なのは揚子江岸に向つたトーチカの背後が見える、尤もこれは平時南京城の要塞化から見た地域に於て必ず苦境に立つべきを顧慮され、佐々木を大死させるなどの御下命があつた由、そんな有り難い御沙汰はその時は知らなかつたが、兎に角此際一兵でも多いことは実に嬉しかつたのである。當時の戦況は左程困難ではなかつたが、敵は逐次我支隊の右外翼に退避するものと判断され、而かも我後方には到る処敵兵残存して師団主力との交通自在ならず、一般の大勢としては予の支隊が孤立無援に陥つてゐるのが分るわけであつた。事実孤立無援にして三方の敵を受持つてゐるのである。

十二日の夜遙に満洲から来て呉れた元の部下が師団司令部に到着して我支隊の所在を尋ねた時「死ぬ気なら行け」と云はれた由である。

因に予は一兵も増援を請ふたことはない。与へられた兵力を以て必ず敵の退路を遮断して見せるとの確信に満ちてゐたのである。仙鶴門鎮附近の部落に宿營。終夜迫撃砲弾の見舞を受けたが弾道を外れてゐるので平氣だつた。

◇十二月十一日

銀孔山東西の陣地に拠る敵に対し攻撃開始。九時増加部隊到着。是より先師団主力の攻撃に協力せしむる目的を以て一部を紫金山北麓を経て和平門方向に派遣したが、此方面に潜入すべき敵陣地の間隙は無かつた。

午前十一時銀孔山東西の敵陣地を奪取す、この敵は実に頑強に抵抗した、砲兵をして集中射撃を行はしめた為敵の塹壕は死屍を以て被はれてゐた、而かも我歩兵が斜面を攀登して突撃した時にできへ陣地を死守して退かぬ敵兵がゐた。

此日午後我支隊へ協力の為十加二中隊及十五加一中隊来る。

銀孔山を撤退した敵は太平山方向に退却、ここにも既設陣地があつて新たな敵が抵抗する、加ふるに烏竜山砲台の重砲が右側背から、岔路口の敵野砲が左前から撃つてくる、併し我も亦重砲三中队と野砲一大隊を以て之を制圧しつゝ我歩兵は夕刻に至つて太平山の陣地を攻略することができたのである。

然るに夕刻に至つて新たな敵が我支隊の右翼前方に当る万家中に現はれて工事を開始したのであるが、固より敵としてはさもあるべきことであつて終始外翼から我支隊の前進を妨害するのが城外支隊の執るべき行動である。

戦術を学んだ者で無くては以上に述ぶる所の一般情況が果して如何なる情態を呈し、指揮官以下の心境が如何にあるかを適確に知ることは困難であらう。これを今最平易に述べるならば我支隊は目下敵の十字砲火と迫撃砲弾の下に暴露しつゝ高地の既設陣地に拠つて頑強に抵抗する敵を白昼力攻しつゝあるのであつて、而かも絶へず我右翼方面に有力なる敵が存在して妨害を続け、右側背には是又敵が出没して後方部隊を脅威し或は師団主力との交通を遮断せんとしつゝあるのである。斯る環境に在つて尚且つ毅然として達成すべき任務に邁進し得たる所以は信念の力であることは勿論であるが、戰場が予の熱地であつたことも与つて功あるものと信する、而して白昼二回迄も既設陣地を攻略し得たことは重砲の猛撃が協力して呉れた結果であることは疑はないのであつた。

此日師団の攻撃は進捗せずとの通報があつた、察する所歩三三はまた紫金山第一峯を抜くに至らず、又歩一九旅団はその山腹から南方丘阜地にかけて展開し中山門正面の堅固なる陣地に向つて攻めあ

ぐんでゐるのであらう。

これも入城後に聞いた話であるが、この日歩九が歩三三の左後方に当る紫金山の中腹の一陣地を取つたのが早速大きく扱はれ、京都の新聞記者に依つて〇〇聯隊が十一日紫金山を奪取したと打電した由であるが、後日その新聞を見た予の部下の将兵の或者は火のやうになつて憤慨してゐた。實際六十余名の新聞記者が全部交通便利な正面の正道に蟄集し自分自身の一番乗りの記事を電波に乗せるべく氣負つてゐるのであるから、軍隊は相当に迷惑をするのである。今日の戦争に一番乗りは問題ではない、寧ろ縁の下の力持ちとなつて他部隊のために犠牲となるものの働きが貴いのである。

西碼頭に宿営。此日も終夜火光目当てに迫撃砲を撃つて来たが殆んど損害は受けなかつた。

行李の特務兵なんかでも流弾がヒューヒュー来る所にゐて平気で炊爨もし用便もしてゐる、要するに戦度胸ができたのである。

五、主陣地の攻略

◇十二月十二日

終夜咳が甚しくて睡つては醒めして安眠が取れず、一ヶ月来の作戦に疲労したからだにはかなりこたへた。早起きして見たが頭が割れるばかりに痛みどうにもならず、重大時期にと考へて見ても重い頭はやはり重い。

「副官、困つたな、これでは何も考へられん」

「お休み下さい、御計画通り吾々でやりますから」

「うむ」

薬の中に寝転んで見たが激しい銃砲声を聞いては寝ては居れない午前十時頃に至り遂に意を決して飛出し銀孔山に指揮所を進めた。塹壕やその後方の斜面は実に夥しい敵の死体である。

部隊は昨夜命じた部署に就いて早朝から敵の主陣地帯を攻撃してゐる、今日中に之を攻略しなければ敵の退路を遮断することができない。そう考へるから病氣なんかの為寝てはゐられなかつたのである。

見ると前面近くの高地に三八長が突ツ立つて督戦してゐる、(やつて居るな)併し予は直ぐさま電話を以て「軽拳はするな」と云つてやつたのである。指揮官の勇敢なる態度は必要であるが、高い姿勢は敵弾を吸収する、そして損害を受けるものは周囲にゐる者である。だがこゝにも高い姿勢が敵陣地を注視してゐる、敵の小銃弾が盛んにやつてくる。

烏竜山砲台から又撃つてくる、高地の稜線後にゐても砲台からは丸見えである。又この砲台の高射砲は最後迄我軍の飛行機を射撃してゐた、三門斉発の射弾が丁度吾々の頭上に炸裂するのを屢々見た。

我十加が一万余の射距離で制圧射撃を始めた、観測所が現在同じ所に在るので砲撃の結果を刻々知ることができる。命中弾を得たと云つてゐた。

紫金山北麓の敵野砲も亦盛に撃つてきた。

第一線歩兵の攻撃は幸に著々進捗、遺棄死体等に依つて判断するに我支隊当面の敵は第七十八師と四十八師の一部であるらしい、数倍の敵を刻々圧迫しつゝあるのであるから痛快である。

正午頃我右翼前方に在つた敵を撃退し得たのでこゝに再び左旋回

を行ひ南京城北側地区に進出することに決した。一時頃堯化門(地名)附近の雑樹林に於て転進に関する命令を下した後行動に就く、然るに該地を去つて五分間も経たぬうちに敵の迫撃砲弾が予が立つてゐた土饅頭に命中、それをぶつ飛ばした。

紫金山北麓を前進して是より先敵既設陣地の攻撃を開始した歩三三の第一大隊は多数の死傷者を生じつゝも敵を圧迫してゐるので、これを拠点として我支隊主力は左旋回を為さねばならぬ、然るにその進路は砲兵の前進に適せずとの砲兵斥候の報告であり砲兵大隊長も不可能であるとの意見なる故砲兵を堯化門に残し歩兵のみを以て前進することに決した。

本道から畑の中の間道に入つて間もなく忽ち石橋の落されてゐるのに会ひ、工兵小隊に依つて修理を加へる間、兎も角歩兵の各砲隊殊に山砲は苦辛しつゝ畑の中に進入する。

此時師団長の多大なる好意に依つて清酒が一樽送り届けられた。畑の中で鏡を打ち抜いて勝手に飲ませた、予自身始め志氣大いに振い敵を呑むの概がある。

午後三時頃紫金山北麓岔路口附近の敵撤退す、戦は勝つたとの感がある、しかし正面の敵はまだ頑張つてなかなか撃退することができない。

夕刻興街村着、紫金山の裾の寒村。一小隊を直ぐ左の高地に上げて左翼を警戒、前面からは小銃弾がブスブスやつてくる。

此日砲兵の連絡將校に対して云つた言葉、

「南京攻略の最後の日晴れの戦場で地形困難の爲めに砲兵が此戦闘に参加出来なかつたことを聯隊歴史に書くことは厭ではないのか、併し吾々は歩兵だけで戦闘することをなんとも思つてないのだから

砲兵は後方の警備に當つて呉れ」

これがきけたらしい、夜に入つて連絡將校帰来し、砲兵大隊長の報告を伝える、

「来るなど云はれるので一度停止することにしたが飽くまで附いて行くことに決心しました、就ては歩兵及工兵の援助が頂き度い」

「宜しい、後衛から歩兵一中隊と工兵小隊を配属しやう」

無理な要求も武士の情だつた。

第三第九第十一師団の集成騎兵団が戦場に到着した、依つてこれに戦闘正面を割愛する旨連絡將校をして伝へしめたが出ない、最後まで我支隊の後方衛生隊繙帯所の位置に在つて而かもその夜痛い目を見たのである、これは後に述べる。

夜に入つて重迫撃砲隊追及す、道路不良のため多大の困難を嗜めたことは聯隊砲と同じであるが此気魄が無くては戦はできない。

此日深更師団命令と共に受けた通報に拠れば

一、烏竜山砲台攻略の為第十三師団の歩兵一聯隊が鎮江より前進中

二、第十六師団の右翼隊(歩三三)は十二日午後突撃三回の後紫

金山第一峯を占領し続いて天文台に向ひ攻撃中

三、同右、左翼隊(歩一九旅)は孝陵街西方高地を占領

四、第九、第六師団は城の東南面及南面に対し肉迫攻撃中

五、第五師団の国崎支隊は蕪湖にて揚子江を渡河し浦口に向ひ前進中

以上、之を要するに南京の落城は目睫の間に迫つてゐるものと判断されるのであつた。

六、退路遮断

◇十二月十三日

十二日の夜は到る処に激烈なる銃声を聞き、後半夜には砲声さへも聞えた、併し一般の情勢から判断すれば落城は刻一刻近づきつつあるので、予備隊の直ぐ左に在る高地に敵が出てくれば忽ち苦境に陥らなければならず、而かもこゝに僅か一中隊の兵力を割くことができるばかりの手薄だつたに拘らず極めて安易な気持になつた。併しやつと断続して取れるやうになつてゐる師団司令部との無線連絡に依つて師団命令や情報を聴く為に終夜を費し、追撃命令を下達したのは午前六時に近かつたのである。而かも此間銃声が近距離に起り、銃弾が盛んに壁に命中してくるのであつた。

満洲の旧部下が苦辛して持つてきて呉れたするめや魚の干物を分配、そして久し振りにクレイヴンの芳香に接した。此人達から東宮中佐が去十一月十三日杭州湾上陸作戦の花と散つたことを聞いたのである。去八月の中頃大連で別れたのが最後で、此人は満洲移民の生みの親と云はれ、もつと生きてゐて貰ひ度かつた惜しい武人だつた。万感胸に迫る。

焚火を掻き立て、煤けた寝台に横になり忽ち熟睡。

午前八時頃ふと目を醒せば至近の距離に激烈な銃声がしてゐて、通信手や行李の輜重兵特務兵までが銃を執つてばたばたやつてゐる。

「何事だ?」

屋外を走りかけた副官に尋ねる。

「今撃退した所です、紫金山から真つ黒になつて降りてきました」

「敗残兵か?」

「チエツクを腰だめで撃つてくるのです、それが何回も何回も五六百一所になつて」

「鉄砲を取り上げる」

「降伏なんかするもんですか、皆殺しです」

くるわ、くるわ、あつちにもこつちにも実に夥しい敵兵である、彼等は紫金山頂に在つた教導師の兵で血路を我支隊の間隙に求めて戦線を逆討つて出たものであつた。銃声の間に怒号罵声すら聞えてゐる。

家屋に立て籠つていつ迄も抵抗するもの、いち早く便衣に替へて逃走を計るもの、そして三々五々降伏する者は必ず銃器を池の中に投じ或は家の中に投げ込んで放火してゐた、此点は実に徹底してゐた。当面の敵は蒋介石が虎の子のやうにしてゐた師団だけあつて最後迄最も勇敢に戦つたやうである。

以上は一局部の紛戦状況であるが、後に各部隊の報告を綜合して夜半より午前十時頃に至る間の戦況を述べるならば、払曉前我第一線は敵陣地に突入し続て敵を急追し、軽装甲車中隊午前十時頃先づ下関に突進し、江岸に蟬集し或は江上を逃れる敗敵を掃射して無慮一万五千発の弾丸を射ち尽した。此間歩三八は城北に面する五個の城門を占領して敵の退路を絶ち、聯隊長は三三の大隊と共に装甲車に追及して西面滬江門附近に進出し、逃げ遅れた敵と戦闘を交へた。司令部は予備隊たる歩兵一中隊を以て左及後方より突撃し来る前後数回の敵と激戦を交へ、通信手、輜重兵、伝騎に至るまで戦線に加入して敵を撃滅し、その後方を追及しつゝ道路の不良に悩みつ

ゞけた野砲兵大隊は是又夜間敵の襲撃を受け掩護の歩兵一中隊、工兵一小隊と共に零分割射撃を以て敵に応戦、四時間の久しきに亘つて戦闘。更にその後方には後衛として残置した歩兵二中隊が夜半以後又二方面より反復殺到する敵の大部隊と戦闘して之を撃滅した。更にその後方衛生隊附近に集成騎兵団が位置してゐたが、暗黒の裡に敵の襲撃を受けて部落内に突入せられ、人二百馬六十の損害を被るが如き失態を演じてゐる。此騎兵も又その後方に在つた重砲も盛に増援を請ふてきたが自衛力を有する者を顧みる遣は無かつた、蓋し子の部隊は数里の長きに亘つて延申し側面に対して到る処激戦を交へてゐる情態だつたからである。

午前十時頃、我左翼掩護の為高地上に位置せしめた中隊の陣地に對し後方から重砲の試射らしき数弾が飛来し、続いて効力射に移り、あれよあれよと兵隊が騒いでゐるうちに三十余発の砲弾を集中した。山頂は爆煙に被はれて此部隊の損害が目に見えるやうな気がした。血迷つた我重砲が味方撃をやつたのであるが、幸に背囊一個ふツ飛ばされたのみ。因に此中隊も山の上から敵の背後を攻撃してゐる。

前述する如く午前十時我支隊の軽装甲車が最初に下関に進出して完全に敵の背後を絶ち又我歩兵は北面の城門全部を占領封鎖して敵を袋の鼠とし、少し遅れて第六師団の一部が南方より江岸に進出し、海軍第十一戦隊が溯江して流下する敵の舟筏を掃射しつゝ午後二時下関に到着し、国崎支隊は午後四時対岸浦口に到着した。其他の城壁に向つた部隊は城内を掃蕩しつゝある。実に理想的の包围殲滅戦を演じてゐるのであつた。

此日我支隊の作戦地域内に遺棄された敵屍は一万数千に上りその

外、装甲車が江上に撃滅したものと並各部隊の俘虜を合算すれば我支隊のみにて二万以上の敵は解決されてゐる筈である。

午後二時頃概して掃蕩を終つて背後を安全にし、部隊を纏めつゝ前進和平門に至る。

その後俘虜統々投降し来り数千に達す、激昂せる兵は上官の制止を肯かばこそ片はしより殺戮する。多数戦友の流血と十日間の辛惨を顧みれば兵隊ならずとも「皆やつてしまへ」と云ひ度くなる。

白米は最早一粒もなし、城内には有るだらうが、俘虜に食はせるものの持合せなんか我軍には無い筈だつた。

和平門の城壁に登つて大元帥陛下の万歳を三唱し奉る。此日天気快晴、金陵城頭到る処旭日旗のへんぼんたるを見て自然に眼頭が熱くなつた。

中央門外に舎營、美しき寝台あれど寝具なし、南京米を捜し出しでくる。(今夜はゆつくり睡られるぞ)

南京攻略

ほのぼのと明け渡す空に金陵の

城頭高く旭旗はためく

江畔の殲滅戦

野に山にクリークにみつ朝の風

みいさくは曙まわりかちときあかす
皇軍

七、南京攻略の歌

何処まで続くクリークぞ
七日十日のそれならで
水をば渡る幾そたび

さもあらはあれつはものの
草むす屍はかねてより
水漬く屍もなんのその

悠久ここに四千年
千古に流るる長江の
畔に馬を進めつつ

夕べに抜くや紫金山
明孝陵はあのあたり
興亡誰か感無けん

夜はほのぼのと明け渡る
旭日浴びて金陵の
城頭高く日の御旗

海路遙けきひんがしの
みかどのみす日の本に
万歳の声響けかし

万歳の声ひびけかし

南京城頭に立つて最も感慨を深うしたる第一人者として予は自身を確認することができる、それは二個年半の間駐在した旧知の地であるが為ばかりでない、又当時城内の三分の二が畑であり雑鬼の類を殲した古代の都が去つて以後八年近代的都市としてその面目を一新してゐる壯觀に驚くが為でもない、実に予が若冠の明治四十四年以来満洲問題解決を目標として密かに国民党に好意を表しつつけてゐた夢が、彼等の容共政策の為殊に蔣介石の英米依拠の政策に依つてつぶさに不快を嗜め、皇国の前途を憂ひて憤然こゝを去つた昭和四年夏の思ひ出がまさまじと蘇るからであつた。

「今に見よ」

これは私憤では断じてない、信義を裏切る者には後日必ず天譴を下さねばならぬ、これが爾来予の固き信念となつたのである。

紫金山の中腹に眠る孫文の霊は蔣介石等の短見にさぞかし口惜し涙を揮つてゐるだらうと思ふ。近代的都市が一朝にしてスケルトンキャピタルに変じつつある、そしてその火が今炎々として各所に起り黒煙が天に沖してゐるのである。

「国亡びて山河あり」の感が深い。

八、南京城内外の掃蕩

◇十二月十四日

兩聯隊全部隷下に掌握、城内外の掃蕩を実施す。到る処に潜伏してゐる敗残兵を引き摺り出す、が武器は殆ど全部抛棄又は隠匿して

ゐた。五百、千とゆふ大量の俘虜が続々連れられてくる、割合に悪びれてはゐないがその何れを見ても疲れ切つてゐる、恐らく食ふべき何一つの食料が無かつたのであらう。

十二月十一日夜迄は城外下麒麟門迄電灯が点り水道が出てゐた、情報に依るとその日の軍事会議後守城司令官唐生智は江を渡つて逃げてゐる、そして多数の文武官吏及其家族が多くは民船に依つて下流の方向に脱出したらしい。

例の橋本欣五郎大佐の重砲が外国船を射撃したとかしないとかゆふ問題は兵民をゴツタ返へしに満載して溯江した英国船(実は何か分つたものではない)であつたと思はれる。

城内に残つた住民は恐らく十方内外であらう、殆ど難民ばかりである、而してその中に多数の敗残兵が混入してゐることは当然であると思はれる。

金陵大学には一千以上の妙齡の婦女が收容せられ、外交部跡には敵の負傷兵数百が收容せられ外国人医師以下の庇護下に在つて治外法権らしく振舞つてゐた。

守將が逃げた後に残された支那兵程みじめな存在は無いのである、彼等に戦意の程が有りや無しやは自明の理であるが、彼等にはもはや退路が無かつたので死もの狂ひに抵抗したのである。

敗残兵と雖尚部落山間に潜伏して狙撃を続けるものがゐた、従つて抵抗するもの、従順の態度を失するものは容赦なく即座に殺戮した、終日各所に銃声が聞えた。

太平門外の大きな外壕が死骸で埋められゆく。

空屋の中は殆ど掻き捜され且軍裝品が散らばつてゐた、手榴弾や小銃弾は到る処に投げ捨てられてゐる。加ふるに要所々々には地雷

が埋設されてあるので危険此上もない。

城内の大通りはすべて陣内戦と防空を目的に大工事が施され機関部を壊はし或は焼かれた自動車や列を成して棄てられ、その間に被服器材の分ちなく落花狼藉を極めてゐる。国民政府、軍官学校、其他の軍事施設は我空爆のために完膚なき迄にヤツ付けられてゐる。城外飛行場亦然り。

骸骨となつた家屋の焼跡や、今尚盛に火勢を振つてゐる各所の火災、住民は一人も顔を見せない、瘠せ犬だけが無表情に歩いたり寝そべつたりしてゐるのである。

下関の目貫の通りは殆ど全部焼け落ちてゐた、バンドは数百の自動車や乗り捨てられ、数百の死骸が一つ一つ岸から流れていく。

民国十六年二月、国民革命軍が南京に入城して以来正に十年、当時城内の人口三十万から八十万に増加し、農民を擲取してこゝに見て呉れがしの近代都市を建設することに成功した、だが今や樅花一朝の夢と化したこの破壊された都市の惨状を見て誰か感慨無からんやだ。

予が十年前に住んだ家は元裏に墓地があり周囲には近く一軒の家もなかつた、二階の窓から雉を見付けて撃つたことも一度や二度ではなかつたのであるが、それが家屋櫛比し樹木に被はれて捜し出すのに困難した程である。懐かしさの余り屋内に入つて見たが于右任が住んでゐたらしい、隣家は蘇聯大使館の堂々たる建物である。因にこの大使館は其後焼失した、何か証拠隠滅のためではないかとの推測が行はれた。

午後海軍第十一戦隊の連絡將校関口大尉来る。

南京中央門外に舍營。

な特設部隊の聯隊旗、老兵壮兵を交へて剣光帽影は折柄の快晴に晴がましき軍陣繪巻を展開した。

この盛観、建國以来敵の首都を占領して晴の入城式を挙行するはこれを以て嚆矢とするのではあるまいか、もつとも征韓の役はどうだつたか知らないが近代化する〇十万の貔貅が戦勝つて滲として傲らず、只管御稜威を奉体し不動の陣容を示したこの歴史的の盛儀は前代未聞、躍進日本の表徴と云はずして何ぞや。

緒鬚鬚茫々の將兵が肅然としてこの晴の盛儀に参列した記憶は永久不忘末代までの語り草となるであらう。予は軍司令官の近接を待つて部隊に敬礼を命じ、数歩馬を列中より乗出して人員の報告を為す、(よくぞ男に生れたる)感激のこの一瞬、予の身心が昇天して神の靈内に融け込むやうな衝動を覚えた。

將官たる部隊長は逐次扈從、国民政府に至る。

將校以上は旧国民政府の中庭に集合、樓門上に大國旗を掲揚、軍隊の君が代表奏樂裡に敬礼、全員かたづを呑み、眼頭が自然に熱くなる。

大元帥陛下の方歳を三唱し奉る。終つて方面軍司令官の挨拶、

「大元帥陛下の御稜威に依りまして我派遣軍は赫々の戦果を収めこゝに……」

この時軍司令官の瘠せた頬に一すじの糸を引いたのを見た、予は正面列中にゐたので老大将の胸中の動きを明らかにその顔面神経に看取することができたのである、誰かこの無限の感慨に心を動かさぬ者があらう。

数十万の軍人は御稜威を背に、皇國の輿廐を双肩に担つて一致協力し今日の光榮を得たのである。

九、南京入城以後

◇十二月十五日

我第十六師團の入城式を挙行す、師團が将来城内の警備に當るのだとゆふものがある。終つて冷酒乾盃。

各師團其他種々雑多の各部隊が既に入城してゐて、街頭は先にも云つた如く兵隊で溢れ、特務兵なんか如何はしき服装の者が多い、戦闘後軍紀風紀の頹敗を防ぐため指揮官がしつかりしないと憂うべき事故が頻発する。

城内に於て百万俵以上の南京米を押取る、この米の有る間は後方から精米は補給しないとゆふ、聊か糲だが仕方が無い、因に南京米はぼろぼろで飯盒の中から箸では掬へない。

◇十二月十六日

命に依り紫金山北側一帯を掃蕩す、獲物少しとは云へ両聯隊共に数百の敗兵を引摺り出して処分した。

市民ぼつぼつ街上に現はる。

◇十二月十七日

中支那方面軍の入城式を挙行せらる、部隊は中山門より向つて右に上海派遣軍、左に杭州灣上陸軍堵列、定刻方面軍司令官松井石根大将は朝香中將宮並柳川中將の両軍司令官以下、方面軍及各軍幕僚を従へて馬上爾々と入城閱兵を行ひ、唼唼たる喇叭の吹奏裡に各部隊の敬礼を受く、旗竿ばかりになつた古い部隊の聯隊旗、旭日鮮か

七万の鮮血が江南の田圃とクリクを彩つてゐるのは云ふまでもない。

冷酒乾盃、吾等の軍司令官宮殿下も此日特に御機謙麗かにあらせらるゝのを見上げた。

◇十二月十八日

陸海軍合同慰靈祭を城内練兵場に於て執行。

此日雪模様ひの寒風吹き荒び、場を埋めた陸海の精銳は、肅然として声なく今は亡き戦友の靈に對し敬虔なる黙禱を捧げるのであつた。陸海兩最高指揮官の祭文は惻々として將兵の肺腑に迫り、満場只寂々たるのみ。

吾等の軍司令官殿下の参拝を合図に全軍敬礼、喇叭國の鎮め吹奏。

◇十二月廿一日

全軍の配備を整理せられ各師團城内より退出、我師團は南京城を含む周地帯を警備。予は南京地区西部(城内を包含)警備司令官を命ぜられ、城内警備に關しては派遣軍司令官の直轄となる。

◇十二月廿二日

城内肅清委員長を命ぜられ、直に會議を開催す。

◇十二月廿三日

會議。

◇十二月廿四日
同右、査問工作開始。

◇十二月廿六日
宣撫工作委員長命ぜらる、城内の肅清は土民に混ざる敗兵を摘出して不穩分子の陰謀を封殺するに在ると共に我軍の軍紀風紀を肅清し民心を安んじ速に秩序と安寧を恢復するに在つた。予は峻烈なる統制と監察警防とに依つて概ね廿日間、所期の目的を達することができたのである。

◇一月二日
敵機五機大校飛行場を空襲、損害無し。

◇一月五日
査問会打切、此日迄に城内より摘出せし敗兵約二千、旧外交部に収容、外国宣教師の手中に在りし支那傷病兵を俘虜として収容。
城外近郊に在つて不逞行為を続けつつある敗残兵も逐次捕縛、下関に於て処分せるもの数千に達す。
南京攻略戦に於ける敵の損害は推定約七万にして、落城当日迄に守備に任せし敵兵力は約十万と推算せらる。

◇一月廿二日
警備司令官の任を第十一師団の天谷少将と交代。その後再び北支へ転進す。

山崎正男日記



第10軍司令部・前列左から二人目柳川司令官、前列右端谷田勇第三課長。後ろから2列目、左から二人目、山崎正男第一課參謀。

◇十二月五日(日) 晴 湖州〔昭和12年〕

身体ノ拭淨

昨夜ハ風呂ヲ沸カシテ呉レトイフノデ案シミナシアリシ所、露天風呂ナリシヲ以テ感冒ヲ警戒シテ中止ス。惜シキ極ミナリ。依ッテ今朝ハ起床早々湯ヲ以テ頭、顔、腰部、足部ト汚レ易キ所ヲ拭淨ス。行水位ノ氣持良サハ味ヒ得タリ。

事務開始

作戰室ニ出勤シ事務ニ服ス。南京攻撃ガ時間ノ問題トナリ、爾後ノ対策ニ話ガハズム。朗カナル次第ナリ。

〔赤痢〕入院中ノ陣中日誌ノ要旨

十一月二十二日 国崎支隊昇山占領(二十一日午後ヨリ戦闘)。

〃 二十三日 司令部嘉興ニ移動(舟行)。

〃 二十四日 国崎支隊、百十四師団湖州占領。

〃 二十五日 第六師団 平望鎮ニ達ス。百十四師団 嘉興―

長興道追撃。

国崎支隊 湖州。

〃 二十六日 司令部湖州ニ移動ス。

〃 二十七日 百十四師団先遣隊 蘭後(長興北方約十六村)、

国崎支隊及第十八師団先遣隊 小牛山西北側高地

(長興西南方約十六村) 攻撃(奪取)。

〃 二十八日 百十四師団先遣隊 湯渡(一部揚店) 進出。

〃 二十九日 百十四師団先遣隊 宜興占領。

〃 三十日 第十八師団、国崎支隊 広徳占領。

十二月 一日 吉積〔正雄26期〕大佐、土居〔明夫29期〕中佐、松

村〔知勝33期〕少佐来ル。

上海ニ於ケル揚陸完了(或ハ三日トモイフ三日カ

真カ)

〃 三日 国崎支隊 建平占領。

〃 百十四師団上梁埠(南渡鎮西北方四里) 占領。

〃 百十四師団 溧水占領。

〃 第十八師団 十字舖附近占領。

散髪

渋谷軍曹ニ散髪ラシテ貰フ。余リ上手ニハアラザルモ氣持ヨシ。入浴ヲセザルモ身体ハ拭淨シ、頭髮ハ刈リシヲ以テ氣持爽快ナリ。

吉積、土居、松村帰ル

去ル一日到着、第一線ニ至リシ吉積、土居、松村ノ三氏帰り来ル。大本營幕僚ニシテ旧知ノ間柄ナルヲ以テ、予ノ入院ヲ非常ニ心配シ呉レタルモ、元氣ナル予ノ姿ヲ見テ喜ビ呉レタリ。

食事軌道ニ乗ル

昨日ハ非常ニ空腹ヲ感じタルモ、本日ハ漸ク軌道ニ乗リタルヲ以テ、三度ノ食事ト二度ノ間食ニテ甚ダシキ空腹ヲ感ゼザルニ至ル。不知不識ノ裡ニ多量ニ摂取セル結果ナランモ、余リガツガツスル必要ナク結構ナリ。

感冒流行

司令部ノ湖州到着時頃ヨリ司令部職員ニ感冒流行シ、清水〔武男36期〕參謀、藤本〔鉄熊26期〕參謀、大坂〔順次35期〕參謀、吉永朴31期〕參謀等何レモ感冒ニ罹リシ由ナルモ、本日吉積大佐一行ト共ニ帰来セル早坂〔一郎29期參謀部附〕少佐モ高熱ヲ発シ大部弱ル。全部ノ職員ニ目ニ見エザル疲労ガ堆積シアル証拠ニシテ警戒ヲ要ス

ルモノ多シ。

陣中所要品

師団以下ノ司令部ニハ差程必要ナキモ、軍司令部以上ノ司令部ニ於テハ事務所内ニ於テ勤務スルヲ以テ必シモ靴ヲ用フル要ナク、從テ上靴ヲ携行スレバ便ナリ。予ハ軍艦内ニテ使用セル分ノ余分ヲ使用セル為非常ニ便宜ヲ得タルモ、革製ノモノナレバ尚可ナリ。又嘗テ滿洲旅行ノ際購入セル防寒靴ヲ携行セルモ、寒中脱靴シテ執務スル際ノ防寒ニ非常ニ都合良シ。

◇十二月六日(月) 晴 湖州

吉積大佐一行帰ル

吉積大佐一行飛行機ニテ上海派遣軍ニ向フ。松村少佐ニ戦争終了後上海守備軍のモノヲ作ル際ニハ、編制、動員主任者トシテ予ヲ其ノ一員ニ入ルベキコトヲ希望シ置ケリ。

熟睡セズ (六行略)

河村飛行隊ニ感状授与

作戦初期ヨリ当軍ノ指揮ニ入り指揮連絡ニ任ジアリシ河村飛行部隊〔長河村宗彦大尉41期〕ハ其ノ功績拔群ト認メラレ本日感状ヲ授与セラレ。当軍最初ノ感状ナリ。又第六師団ニ対シテハ、去ル十一月三十日附ヲ以テ中支那方面軍司令官ヨリ感状ヲ授与セラレタリ。尚十八師団、国崎支隊、平望鎮占領部隊ニ対シテモ感状授与ノ議アリ。感状授与ノ議ノ多キ作戦ナレバ、其ノ成績ノ拔群ナルヲ思フベシ。

通過軍隊ノ連絡

湖州ヲ通過スル軍隊、治療退院セル患者等ガ自己所屬隊ノ位置ヲ

退院者ノ心理

退院者ハ入院中ノ「ハンデキャップ」ヲ取り戻サントアセル気味アリ、健康ヲ害シタル者亦同様ナリトス。然ルニ入院中ハ自己ノ仕事ヲ他人ガ代理シテヤリ呉レアル為、何モナザザルモ良イ理屈ナリ。而シテ退院シテ仕事ヲ始めントスルモ、折角他人ノ遣リ呉レ居ル仕事ヲ取り戻シ、仕事ヲ取り合フ様ナ氣持ニナリ、洵ニ具合悪シキモノナリ。漸次常道ニ復スルヨリ仕方ナシ。

乾麵麴ヲ煮ル

毎日毎日粥許リニテハ食事が余リニ単調ナルト、白米ノ関係上「ビタミン」B欠乏スルノ虞アルニ鑑ミ一案ヲ考ヘ出シ、乾麵麴ヲ煮テ副食物ト為ス。洵ニ好ク、妙案ナリキ。乾麵麴ノ儘ニテモヨクカメバ差支ナントノ軍医ノ言モアリシヲ以テ、自信ヲ以テ試ミニ煮サセタル所、孰以上ニ軟クナリ予期以上ノ成績ニシテ味亦上々ナリ。思ハズ余計ニ食フ傾向アリ。注意ヲ要ス。

携行薬品

予ハ薬品ヲ携行スルニ当リ、解熱、下痢止メ等対症的ノモノノミヲ選ビシモ、今少シク積極的ノ強壯劑トカ整腸劑トカ「オリザニン」トカ「ドリコノ」トカ「ピオフィルミン」トカヲ携行スルモ可トセン。勿論当人ノ健康状態ニ依ルコトナルモ、積極薬ノ携行ハ必要ナリ。又「アスピリン」ハ少シ携行量少カリシ為、他人ガ発熱シテ「ウンウン」言ヒアルモ「アスピリン」ノ患与ニハ尠カラズ躊躇セリ。モット多ク携行スルヲ要ス。点眼薬ハ先日退院後自動車ニテ追及セル際劇シキ塵ヲ被リ充血ヲ来セル際、早速点眼シテ有効ナリキ。

残留ニ対スル心理

尋ネテ軍司令部ニ来ルモノ多ク、仲々喧嘩ナリ。中ニハ所屬隊ガ遠ク南京近クニ達シアルニ、呑氣ニ滞在シテ幕僚ニ叱ラレルモノアリ。

軍司令部ノ編制改正

軍司令部ニ兵器部ヲ設置スルコトニ関シ、編制改正ニ関スル軍令、陸機密到着ス。直チニ業務ヲ開始スベク仕事ヲ始めタルニ容易ニ数ガ合ハズ頭ヲ悩マス。斯ル簡單ナル編制改正ニテ頭ヲ悩スナンカ洵ニ不甲斐ナキ次第ナリ。今迄何時モ軍令ヲ作ル方ニテ、受身ハ今度ガ初メテニテ良キ修養ナルモ、余リニ数ガ合ハヌト直グ表ガ間違ヒアルニ非ズヤトノ考ガ先ニ立ツ。辻褄ヲ合ソウト苦心スルコトヲ為サヌ難アリ。中央部ニ勤務シアリシモノノ通弊カ？ 然シ仮令一名ト雖數ノ合ハザルハ不愉快ナリ。

軍司令部内ノ空氣

入院十余日ニシテ帰リシトキノ直感次ノ如シ。
気分ハ和ラカナルモ著シク緊張ヲ欠キアリ。其ノ理由ト認メラルルモノ概ネ左ノ如シ。

(1) 流行性感冒患者ヲ続発セルコト。(2) 上陸以來持續シ来レル緊張ノ中ダルミニ達セルコト。(3) 戦況有利ニ進展シ軍司令部トシテ緊急処置ヲ要スルコトノ尠キコト。(4) 戦争ノ峠モ見エテ万事終リトイフ気分ガ起リ始メタルコト。(5) 侍從武官御差遣、中央部ヨリ出張者ノ来着等平時業務ガ始マリシコト。(6) 司令部ガ広壯ナル家ニ位置シ、一向戦地ニ在ルトイフ気分ノ起ラザルコト、又給養モ逐次野戰式ヲ脱シ来リシコト。

予ハ幸ニシテ退院後経過良好士氣亦旺盛ニ大イニ頑張りアルモ、感冒ニ罹ラザル様注意セザルベカラズ。

◇十二月七日(火) 晴 湖州

寒冷

本朝ハヒドイ霜ナリ。相当ノ寒氣ヲ覚ユ。下士官ノ話ニ依レバ、洗濯セシ所直グニ凍リタリト。之ニ依レバ恐ラク零下何度トイフ程度ナリシナラン。

日本晴カ支那晴カ

当地ノ快晴ノ氣持良キコトハ、屢記ノ通ナルガ、本日モ日出後ハ急ニ温暖トナリ氣持ヨキ快晴ナリ。日本ニ於テハヨク日本晴トイフモ、支那ニモ支那晴アリテ寧ロ日本晴ニ勝ルモノアリ。コレモ或ハ日本軍ガ侵入シ来リタル為日本晴トナレルカ。何々？ 北支ニ於テハ編カ居ナクナリテ雷ガ多クナッタトカイフ。日本人ガ来ルト色々ト変化ヲ来スモノナリ。

侍從武官、中山〔寧人33期〕參謀來着

侍從武官後藤〔光蔵29期〕陸軍歩兵中佐正午近ク來着セラレ、軍司令官ノ狀況報告後、聖旨、令旨ノ傳達ト湖州附近ノ戦跡巡視ヲセラル。高級副官清水參謀案内。又同時頃、中支那方面軍ヨリ中山參謀參着、南京入城ニ関スル詳細ナ指示ヲ齎ス。外国首都入城トイフ歴史の盛事ヲ列國監視ノ裡ニ、整齐ニ実施センコトヲ企図シ、細々ト注意ヲ持チ来ル。必要ナルコトナランモ、中支那方面軍モ大部暇

ラシイ。

軍司令部移動準備

司令部ハ明日一部飛行機ニ依リ溧水ニ移動スルコトナリ其ノ荷物ヲ出スヤラ、移動人員ノ割出ヤラニテ又々朝來ゴタツク。軍司令部ノ移動ハ、何時モゴタツクモノナリ。上陸以來最良ノ司令部ノ位置、別ルルニ惜シキ感アリ。

毛皮着キ支那被服ノ使用

当番兵ガ羊ノ毛皮ヲ附シタル支那服ヲ持チ来リ、毛布ノ下ニシテ寝ヨトイフ。有難ク頂戴シテ使用セシ誠ニ暖シ。池谷(半二郎33期)參謀ハ肩掛様ノモノヲ肩ニ巻キ、大坂參謀ハ、立派ナル毛布ト予ト同ジ様ナル毛皮ツキ支那服ヲ使用シ得意然タリ。何レモル後移動毎ニ携行シ、凱旋ニ際シ揚子江ニ投棄セバ可ナリ、ト話シ合ヘリ。予モ亦其氣ニナリ折角手ニ入レタル暖キ服ヲ当分携行スルコトニスル。如何ニモ道德觀念ノ低下セルコトヲ自認セザルヲ得ズ。

輕キ疲労ヲ感ズ

本日ハ侍從武官ノ出迎へ、聖(令)旨伝達ノ待合セノ為合計二時間許リ立ン坊、並ニ之ニ伴フ昼食ノ遅延等種々ノ原因ニ依リ午後三時頃ニ至リ輕キ疲労ヲ感ジ、何事ヲ為スモ厭ニナル。

△五行略▽

敵ノ退却方向ニ對スル狀況判断ノ誤

我が軍ガ湖州ニ到着スルトキ、中支那方面軍ヨリ前進中止ヲ命ゼラレ、三日間ノ停止ヲ為シ、其後ニ於テモ、図ハ第1図▽上ノノ方向ハA▽ニ一モ二モナク南京ニ向フ如ク作戰ヲ指導セリ。是レ敵ハ図上ノ「南京對岸カラ西南方ニ向カフ」ノ方向ハB▽ニ退却スルモノトノミ信ジアリシト、南京ノ防備ハ其ノ南正面ノ薄弱ナルト

池谷參謀臥床

朝、池谷參謀ガ体温計ヲ貸セトイフ。熱ヲ計レバ八度八分、早坂少佐亦七度七分、愈々以テ流感猖獗ナリ。參謀長、藤本大佐モ感冒後ノ下痢ニテ弱ル。第一課職員中過半数ハ粥食ナリ。皆ガコンナニ病氣スレバ、自己ノ病氣モソナニ肩身ガ狭イ様ニモ思ハレズ。何ト身勝手ナル考方ナル哉。

山砲行方不明

下泗安附近ノ戰鬪ニ於テ、追及中ノ山砲ガ敵敗殘兵ノ襲撃ヲ受ケ、駄馬暴レ出シ、遂ニ砲身馬、砲架馬ニ行方不明トナレリ。其報告ニ依レバ、敵方ニ逸走シテ其手ニ帰セシヤ、或ハ駄載ノ儘「クリーク」ニ落チシヤ不明ナルモ、問題トスベキ事件ナリ。參謀長大部御機嫌悪シク、調査ノ要アル旨洩シ居ラレタリ。

時間ノ不揃

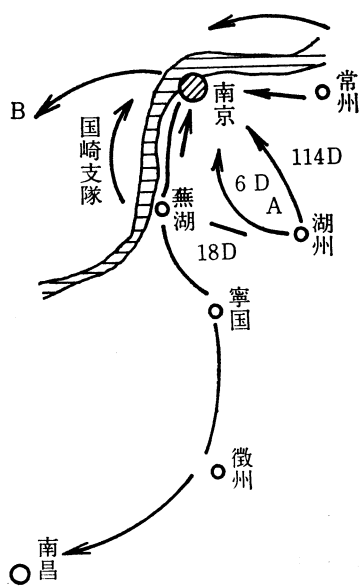
上陸以來正ニ一月。各人ノ持テル時計ノ時間ガ出鱈目トナリ、各々ガ勝手ナ時間ヲ言ヒ、心臟ノ強イ者程自分ノガ正シトイフ。可愛イモノナリ。中ニハ二個ノ時計ヲ二個共壊シ、吉永少佐ノ如キ侍從武官御案内ノ為時計ナシトテ、予ノ腕時計ヲ借用セリ。

◇十二月八日(水) 快晴 湖州ヨリ広徳ニ移ル

軍司令部移動

軍司令部ハ溧水ニ移動スベク一部ハ飛行機ニ依リ、一部ハ自動車ニ依リ。予ハ自動車組。池谷參謀、早坂少佐ハ病氣ノ為殘ル。軍司令部ハ自動車ニ依ラル。

午前五時頃ヨリ当番兵ハ荷造リ、發送ニ大童。現ニ將校ガ就寝ニ使用シアル毛布ヲ荷造スルノニ將校ガ容易ニ起キ出サズ、弱リアル



第1図

ニ因レリ。

然ルニ軍ノ前進開始後數日ニシテ得タル飛行機ノ報告ニ依レバ、敵ハ豈図ランヤ(南京—蕪湖—寧國—徽州—南昌ヲ結ブ)ノ方向ヨリ南昌方向ニ続々退却セルニアラズヤ。コノ時幕僚ノ間ニハ誰言フトナク仕舞ツタトイフ責任感ニ打タレタリ。即チ、敵ノ主退却方向ガ「南京—蕪湖—寧國—徽州—南昌」方向ナルコトヲ予知シアリシナランニハ、湖州ニ於ケル滞在ハ断ジテ之ヲ行ハザルベク、又其後ニ於ケル前進ニ方リテモ、最先頭ノ第百十四師團ヲ北方ニ使用スルコトナク直路蕪湖方面ニ使用シ、其他ノ師團亦先ヅ敵ノ退路遮断ヲ第一トシ、然ル後南京ニ向フ前進ヲ策スルノ企圖ニ出デシモノヲ、実ニ惜シキコトヲ為セリ。

實ニ我軍ガ西北進セル西側ヲ、十余万ノ敵ガ或ハ鐵路ニ、或ハ水路ニ陸統トシテ南走セルトハ實ニ皮肉ナリトイフベシ。南京攻略千慮ノ一失ナリトイフベシ。

モ可哀相ナリ。午前九時三十分漸ク準備整ヒ、警備兵、司令官、幕僚、輸送指揮官、荷物ノ順序ニ「トラック」、乗用車ノ長蛇ノ列ヲ為シテ行進ス。途中橋梁トイフ橋梁ハ悉ク破壊セラレ、工兵ガ一々之ヲ修理シアルモ、応急処置ナルヲ以テ通過ニ多クノ時間ヲ要ス。内一個ハ修理ノ為一時間弱ヲ要ス。午後一時頃下泗安ニ於テ屋食、午後三時三十分広徳着。兵站司令部支部ニ宿營ス。

途中ノ景色

湖州以西ハ山アリ畑アリ河アリ、其ノ風景愈々内地ニ近似ス。湖州以東ハ「クリーク」地帯ナルモ、ソノ西ハ丘阜地帯ナルヲ以テ内地ヲ旅行スルノ感益々深シ。途中演習地ニ格好ノ地形アリ。演習課出身ノ柳川軍司令官垂涎唯ナラズ。途中道路側ノ家屋ハ悉ク焼却セラレアリ。当地方ノ家屋ハ土塀ナルヲ以テ、焼却セラレタル家ハ土塀丈ガ残り、天井ハツツ抜ケナリ。湖州以東ハ多ク煉瓦ヲ使用シアル為焼ケルト共ニ崩レ落ちアルヲ通常トス。山間ニ至レハ人口相当稀薄ニシテ寂シキ所多シ。

我カ軍ノ通過セル時期ノ關係上、稻ハ全部刈リ取ラレ切り株ノミ殘レリ。

兵站自動車小隊全滅ノ跡

広徳東方二、三里ノ所ニ、自動車約二十三輛ガ路傍ニ焼却放棄セラレアリ。數日前、国崎支隊ニ彈薬ヲ補給シ、其ノ帰途約數百ノ敵敗殘兵ニ襲撃セラレ、小隊長以下全滅セシ所ナリ。路傍ニ「某々奮戦死之所」トノ標識ガ此処彼処ニ散見セラルルモ哀レナリ。湖州事變ノ際、松尾輸送監視隊全滅ノ悲惨事アリ。抵抗力渺キ孤立部隊ノカカル場合ノ惨事ハ氣ノ毒ノ極ミナリ。

内地ト同ジ河ヲ見ル

長興―広徳間殊ニ広徳東方ノ河ハ、其ノ状態全ク内地ト同様ニシテ、水ノ流れ、河原ノ露出シアルコト、流線ガ右岸、左岸ニ移動シアルコト等、全ク内地ノ河ヲ見ルノ感アリ。懐カシノ感深シ。此ノ水ナレバ飲メバ内地ト同ジ様ナラン。

兵站司令部ノ宿舎

広徳兵站司令部ハ広徳ノ県政府ニ位置シアリテ、其ノ一室ニ宿泊ス。寢具ナキモ、室ハ立派ナリ。壁ニハ紙ヲ張りアリ、北支、満州式ナリ。広徳ノ町ニハ簡單ナル城壁アリ。内地ニ在ルトキ海軍飛行隊ガ広徳飛行場ヲ爆撃セル新聞記事ヲ讀ミ、其ノ折ニハ広徳トイフノハ何処ナランカト人ノ事ノ様ニ吞氣ニ考ヘアリシニ、今日ノ前ニ広徳ノ町ヲ見、其ノ土、其ノ水ヲ見ル。感慨無量タラザルヲ得ンヤ。広徳飛行場ハ町ノ北方三軒ニ在リテ、海軍爆撃ノ彈痕三個アリテ、格納庫モ破壊セラレアルガ如シ。

陣中ニ於ケル日本婦人ノ繪葉書

昨夜漫談中偶々婦人問題ニ移ル。時ニ池谷參謀ガ此ノ繪葉書ハ繪葉書略ヲ出シ、參謀長ヨリ貰ヒタルモノナリトイフ。吉永參謀之ヲ見テ、「日本ノ女ハ矢張良イナ」トイフ。余リ別嬪ニアラザルモ、久シ振リニ見タル大和撫子ノ姿悪キモノニアラズ。參謀長ガ靜岡ヨリ持參セラレタルモノナラン。上陸以來一月、佐世保出發以來一月十日、戦局モ漸ク一段落ヲ告ゲントスルニ方リ、人心ガ自然ニ婦人ニ向ケラルルモ自然ノ勢ナラン。

敵ノ総退却ニ対スル觀察

軍ガ杭州灣ニ上陸シ、一部ヲ以テ上海戦線ニ協力セシメシ以來、支那軍ノ急速ナル崩壊振リ、実ニ予想以上ニ迅速ナルモノアリ。今マデ子ハ上海戦線退却ノ際ノ不手際ニ起因シ収拾スベカラザル状態

事ノミニ依リ曰ニ敵ヲシテ南京放棄ヲ決心セシメタルモノト見ルベシ。聞ク所ニ依レバ、嘉興附近ニハ莫大ナル「セメント」ヲ貯蔵シアリキト。或ハ杭州灣方面ノ上陸部隊ニ対シ、嘉興要塞ヲ建設スル企圖ナルニアラズヤ。

兵站司令部ニ於ケル一夜

夕食ハ兵站司令部、同支部長ト軍司令官、幕僚トガ会食ヲ為ス。子ハ依然粥食ナルモ「カボチャ」ノ煮タルモノヲ食ツテ見ル。明日ノ腹具合如何。本日ノ昼食ハ先ニ光岡〔明32期參謀部附〕少佐ガ上海ヨリ求メ来レル「パン」ヲ副官部ニ分配シアリシモノヲ、今岡〔宗四郎28期〕副官ヨリ返シテ貰ヒ其レヲ食フ。余リウマクナキモ仕方ナシ。夕食後軍司令官ヲ中心ニ戰術、戰史、英雄等ノ話ニ花ヲ咲カセ時間ノ経ツノモ知ラズ。

有末中佐弟ノ軍司令官訪問

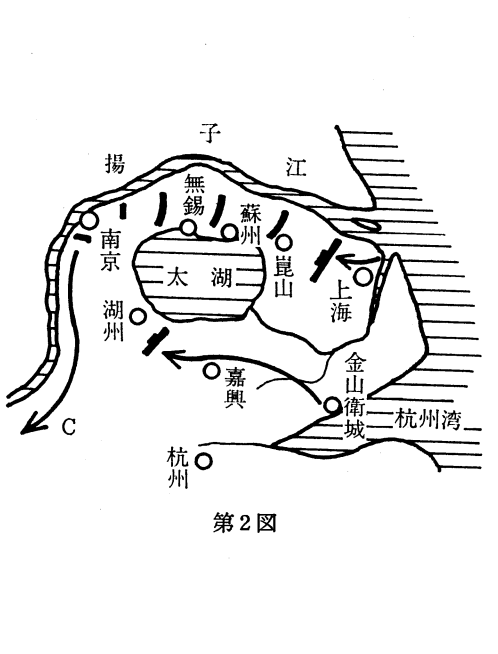
有末〔精三29期〕中佐ノ弟君、応召ノ見習医官トシテ当兵站司令部ニ於テ勤務シアルガ如ク、夕刻軍司令官ニ挨拶ニ来ル。有末中佐ハ軍事課ニ於テ一年間机ヲ並ベテ勤務セシコトアル先輩、弟君モ非常ニヨク似テ洵ニ良キ兄弟ナリト羨シク思ハレタリ。

第一線ノ進出状況遅々タリ

南京ニ向フ追撃ニ移リテヨリ以後ノ第一線ノ進出状況急ニ遅クナリ、国崎支隊ノ建平ニ於ケル駐留、第百十四師團ノ溧水以北ノ前進遅延等、軍司令部ヨリ見テ居ルト、齒痒キモノアリ。此ノ間、第十八師團ノ七日ニ於ケル寧國占領、第六師團ノ第百十四師團ヘノ追及ノミハ稍々見ルベキモノアリ。

侍從武官戦線巡視ニ出發

侍從武官後藤中佐ハ吉永參謀ノ案内ヲ以テ、我々ノ前方ヲ前進、



第2圖

ニ陥リシモノト認メアリシ所、敵軍ノ南京ヨリノ退路ガ寧國―南昌道方向ニアルコト明ラカトナリシ今日ニ在リテハ、我軍ノ杭州灣ニ地歩ヲ獲得シタル瞬間ヨリ、彼ハ南京放棄ヲ決心セルモノト見ルラ至当トスル意見ヲ抱クニ至レリ。其ノ理由次ノ如シ。

南京前方ノ防衛線ハ、昆山、蘇州、無錫ノ三線ニシテ、何レモ太湖北岸ノ於テ東面セルモノナリ。而シテ太湖南方ハ地形大兵ノ使用ヲ許サザル為、防衛極メテ薄弱ナリ。然ルニ如何ニ太湖南方ガ大兵ノ使用ニ適セズト雖、右記ノ要圖ハ第2圖ニ依リ明カナル如ク、南京ノ退路ガ(揚子江右岸に沿う)△C△ニシテ、嘉興、湖州ノ防備ガ完備シアラザル今日、我が軍ガ杭州灣ニ上陸セルコトハ、其ノ

寧國方面第十八師團司令部ノ視察ニ赴カレ、爾後第六、第百十四師團方面ヲ経テ、來ル十二日溧州ヨリ飛行機ニテ當軍ヲ離レラルル筈。

第六師團補充人員ノ広徳通過

第六師團補充人員ノ引率者某少佐、兵站司令部ニ挨拶ニ来リ、軍司令官ニモ申告ス。其ノ言フ所ニ依レバ、二十四日上海ニ上陸以來途中一日松江ニテ滞在セルノミニテ、約二週間ニ六十里ヲ行軍シ、南京迄尚四十里ヲ余シ、而モ第六師團ハ南京ヲ指呼ノ地ニ進出シアリ。如何ニアセルモ四十里ノ行程ヲ如何トモスルコト能ハズ、南京攻撃ニ間ニ合ハザルハ明瞭ナリ。引率者モ無理ニ急イデ行ク気魄モナク、軍司令官モロデハ急イテ行ケト言ハルルモ、内心已ムヲ得ザルベシトノ御考ナルガ如シ。實際、予、後備兵ガ百里ノ道ヲ上海ヨリ南京迄行軍サセラレテハ、引率スル方モ、引率セラルル方モ、並大抵ノ苦勞ニハアラザルベシ。況ンヤ一向ニ敵ノ姿ヲ見ザルニ於テオヤ。

移動用自動車

移動ノ際ノ自動車ノ行軍序列別紙要圖ノ如シ〔略〕。井上〔靖26期參謀〕大佐以下四名ガ同車シテ四十里ノ行程ヲ走ラザルベカラズト悲觀シアリシ所、第三課ニテ課用ノ自動車二輛ヲ携行シ、一ニハ金子〔倫介39期〕、小畑〔信良30期〕兩參謀、一台ニハ山崎、瀨川〔素雄33期參謀部附〕兩少佐乗組ムコトニナリ、結局四名乗ルベキ車ニハ井上大佐一人乗ルコトニナリ、非常ニ楽ナル旅行ヲ為シ得タリ。瀨川少佐ノ言ニ依レバ、余リ各課、部ガ割拠シアル為、第三課モ負ケヌ様上海ニテ自動車ヲ購入セリト。其レガ今日予ノ乗用セルモノナリ。又井上大佐ハ四人乗組ノ無理ナルヲ察シ、第二課用ノモ

ノヲ提供シ其ニ小畑中佐ト二人乗組ムベク予定シ、予メ荷物等ヲ積マシメ置キ所、朝トナリテ其ノ位置ガ判ラズ、同大佐ハ早朝ヨリ御機嫌ノ悪キコト。ドウモロ八釜マシキ人ニハ好ソデ手違ヒガ多イ様ニ思ハレテナラズ。

「マスク」眼簾ノ必要

自動車ノ塵ノ甚ダシキコトハ已ニ二回ニ互リ経験セルモ、「マスク」ノ必要ヲ認ム。将来寒クナリシ場合ノ感冒予防ニモ必要ナルベシ。又古市（砲隊34期）野戦電信中隊長、入院中同室）大尉ハ眼簾ヲ準備シ来レリト。即チ春夏ノ候炎天ニテ地図ヲ見ル場合ニ使用ストノ言ナリ。或ハ色眼鏡ニテモ可ナラン。

湖州以西ノ地形ニ鑑ミ、編上靴、巻脚絆ヲ長靴ニ取換フ。皆ガ予ノ長靴ノ程度ノ良キニ驚ク。今迄使用セザリシヲ以テ当リ前ノコトナリ。

敵機ノ広徳襲撃

兵站司令部職員ノ言ニ依レバ、数日前敵戦闘機一機突然広徳上空ニ現ハレ、一旋回ノ後機上ヨリ機関銃射撃ヲ為シ、数名ノ負傷者ヲ出セリト。生意氣ナリトイフベシ。

◇十二月九日（木）晴 広徳ヨリ洪藍埠ニ移ル

昨夜ノ安眠ト金子参謀ノ妄発

昨夜ハ兵站司令部ニ寝具ノ設備ナシトノ言ニ行李ノ中ヨリ毛布ト支那服トヲ取り出シ、震ヘ乍ラ寝ニ就クベク決心セル所、後ニ至リ毛布ヲ貸シテ呉レルコトナリ、金子参謀、田村（清44期）副官ノ三人ガ同ジ床ニ就キ、暖ク眠ルヲ得タリ。朝ニ至リ金子参謀ノ曰ク、「暖カカリンハ結構ナリシモ妄発セリ」ト。同参謀ハ最年少ノ

一 第一百十四師団、第六師団ハ將軍山、牛首山ノ敵陣地攻撃中。敵ハ漸次減少シアルモ未ダ奪取ニ至ラズ。

二 国崎支隊ハ大平府東方ニ在リ。

三 第十八師団ハ蕪湖東方ニ在リ。

四 南京入城式委員ハ、山崎参謀ト新藤副官ニ決定。明日句容ニ向フコトナリ。

洪藍埠ニ於ケル一夜

洪藍埠ニハ、軍司令部以外ノ宿営部隊ハ軍通信所ト軍司令部ノ輸送ニ任ジタル兵站輜重兵中隊アルノミニシテ、警戒甚ダ不十分ナリ。依ッテ道路ヲ通過スル小銃部隊ヲ物色シ、辛ウジテ一通信部隊（注・野戦電信中隊ノ一小隊）ヲ発見シ、当地ニ宿営スル様交渉ス。其ノ通信部隊ハ偶然ニモ予ト同時ニ入院セシ古市大尉ノ部下ノ石川小隊ナリ。実ニ世ノ中ハ狭シ。参謀長以下第一課参謀ハ全部先行シアルヲ以テ、本夜ハ第一課ノ唯一ノ参謀トシテ書類ノ整理、警戒、明日ノ出発等ニ関シ退院以來ノ会心ノ活動ヲ為ス。人間ハ矢張り活動スレバ愉快ナリ。

軍司令官ハ独リ寂シカラント思ヒシニ、独立通信社長（ト言ッテモ兼社員、兼小使ナラン）阿部某ナルモノ来リ、懇意ト見エテ、随分永ク話シ込ミ、却ッテ情報等ヲ申上グルノニ邪魔トナレリ。

夜一時頃就寝セルモ、冷エ込ミテ十分熟睡出来ズ。

◇十二月十日（金）曇 洪藍埠ヨリ句容ニ移ル

軍司令官出発

戦闘司令所ナル秣陵関ハ軍司令部ノ宿舎ニ適セザルヲ以テ洪藍埠ヲ宿舎トシ、昼間ノ位置ヲ秣陵関或ハ東善橋ニ設クルコトトシ、軍

参謀ニシテ年齢三十二歳、乗船以來一月ト十日ニシテ妄発ス。矢張り若キモノハ元氣アリト言フベシ。

移動ヲ続ク

午前八時四十分前日ノ乗組ヲ以テ広徳ヲ出発ス。途中ノ景色前日ニ変ラズ、路傍ニ立派ナル桑樹ヲ見、養蚕ノ行ハレアルヲ判知シ得。途中普栴渡ノ橋梁通過ニ若干ノ時間ヲ要シ、十字舖ヨリ北行、建平ヲ経テ午後三時過洪藍埠ニ到着ス。

参謀長以下ノ先発員ハ已ニ秣陵関ニ至リ、洪藍埠ニハ下士官ガ残りアリシノミニナリ。設営ニ関シ、又軍司令部ノ位置ニ関シ、参謀長以下ノ先発員トノ間ニ十分ノ連絡ナク、ヤヤ遺憾ノ点アリ。

方面軍参謀長以下来着

方面軍参謀長塚田（攻19期）少将以下公平（匡武31期）参謀、中山参謀、深堀（游亀28期）中佐来着。洪藍埠宿舎ニ於テ南京入城ニ関シ打合せヲ為シ、約一時間ニシテ句容ニ帰ラル。右ノ打合せニ基キ、金子参謀ヲ秣陵関ニ派遣シ、軍参謀長以下ヲシテ之ガ処置ヲ為サシム。

洪藍埠ノ軍司令部位置

溧水ニ予定セシ軍司令部ハ、設営者ノ言ニ依リ軍司令部位置ニ適セザルヲ知り、急ニ洪藍埠ニ変更シタルモノナリ。御寺ノ如キ立派ナル建物ナルモ、設営ノ時間ナキ為何トナク物寂シク感じタリ。之モ設備ヲ整ヘ暫ク腰ヲ落チ着ケルコトニスレバ、万更捨テタルモノニハアラザルベシ。当位置ハ中途半端ニシテモ参謀長以下トモ分離シアルヲ以テ、明日ハ秣陵関ニ移ルコトトス。

午後九時頃金子参謀（注・秣陵関ヨリ）帰り、設営ノ新藤（多喜男32期）副官亦午後七時頃帰着ス。兩者ノ報告ニ依リ、

司令官ハ午前八時四十分出発、所要ノ人員ヲ随ヘ前方ニ出ラル。

予ハ新藤副官ト共ニ句容ニ至ル為、昨日方面軍参謀長ヲ送リタル自動車ノ帰着ヲ待チ、其ノ間殘留員ヲシテ設営ノ整備ヲ為サシム。午前十一時過自動車帰り、途中道路、橋梁ノ破壊セラレシ苦痛ヲ訴フ。然レドモ任務上如何トモシ難ク、御苦勞ナルモ午後再び予等ヲ句容ニ送り届ケルベク命令ス。

殘留設営者ノ状況

後ニ残サレテ設営ニ任ズル者ハ、戦況ノ緊迫シアルデナシ、急イデ書類ヲ作レトカ或ハ送レトカト言ハレルデナシ、夕刻迄ニ所要ノ休養設備ヲ完了スレバ足ルヲ以テ、極メテ呑気ニ何処カラカ寝台ヲ持チ来リ設備ヲシアリ。第一線部隊ト後方部隊トノ心理ノ差ヲ、軍司令部内ニ於テモ如実ニ現ハセリトイフベシ。

南京降伏勸告

昨日ノ状況ニモアリシ如ク、南京主陣地ニ於テハ相当ノ抵抗ヲ為シアルガ如キモ、之ハ単ナル申訳ノモノニシテ、無抵抗ニテノ城ノ明ケ渡シハ、如何ニ支那ト雖之ヲ為シ得ザル所ナルベシ。

方面軍参謀長ヲ軍使トシテ勸告状ヲ撒布シ、本十日正午敵ヨリ降伏ノ軍使来ラザルトキハ、敵ニ降伏ノ意志無キモノト認め、一挙攻略セラルル筈ナリ。果シテ正午ニ軍使来タリシヤ否ヤ。軍司令部ヨリ離レテ殘置セラレアル為、コノ劇的「チャンス」ヲ把握シ得ザルハ遺憾ナリ。

6D藤原参謀負傷

6Dヨリノ電報ニ依レバ、同師団ノ藤原（武31期）少佐ハ戦線視察中左手首ニ負傷シ入院セリトノコトナリ。同少佐ハ6Dヲ負ヒテ立チアリシ勇敢ナル参謀ナルニ、南京入城ノ直前ニ負傷セラレント

ハ氣ノ毒ナリ。又兵ノ噂ニ依レバ、軍司令部ノ自動車運転手モ一名負傷セリトカ戦死セリトカ言ヒアリ。戦場ノ常トハ言ヘ戦死トカ負傷トカ聞ケバ、何トナク心ヲ痛ムルモノアリ。

句容ニ向フ

自動車運転手ノ自動車ノ手入、食事ノ終了ヲ待テ午後一時三十分出發ス。自動車運転手及護衛兵二名ニ対シ昨日來ノ苦労ヲ多トシ、各々「バット」五個ヲ与フ。運転手ハ多ク貫ヒアリシ為余リ喜ビノ様子ナカリシモ、護衛兵ハ大部喜ベリ。昨日ノ方面軍參謀長ト同様苦勞スルモノト考ヘアリシ所、出發直前ニ酒井〔美喜雄 23期〕高級副官ガ飛行機ニテ來リ、其ノ言ニ依レバ飛行機ハ長興ヨリ溧水ニ着陸スル所ヲ誤テ句容ニ着陸シ、再ビ溧水ニ引返セリトノコトナリ。然ラバ我々モ飛行機ニテ行ケバ易タト句容ニ至リ得ベシトノ考ヲ生ズ。其ノ内新藤副官來リ、二時四十分ニハ定期飛行機ガ溧水ニ來ル筈ニ付交渉セントイフ。出發直前之モ來着セル山田〔雄一 41期參謀部附〕大尉ハ、藤原參謀ヲ飛行機ニテ上海病院ニ送り届ケタル帰途立寄リタルナリ。急ギ自動車ヲ駆テ飛行場ニ向フ。問モナク連絡機ヲシキモノ飛來シ着陸ス。自動車ノ下車地ヨリ飛行機マデ相当ニアリ、護衛兵ヲ走ラセテ飛行機ノ出發ヲ見合ヘセシム。漸ク間ニ合ヒ、操縦士〔地方人〕ニ交渉スレバ、「行キマス」トイフ。万事OK。早速搭乘自動車ヲ洪藍埠宿营地ニ返シ、午後二時二十分離陸ス。飛行機ハ操縦士、機関士ノ外座席三ヲ有スル輕輸送機ニテ極メテ輕少、速力モ余リ速クナク乗心地「百パーセント」。全ク思ハヌ儲ケ物ヲシテ飛行機ニ乘リ得、而モ難路ノ行軍ヲ避ケ得タリ。

途中ノ空中觀

地上風景ガ内地同様ナリシト同ジク空中モ何等ノ差ナン。田畑ノ

トニシテ、新藤副官ハ憲兵隊長宿舍ニ、予ハ軍司令部ニ宿泊ス。

同期生集ル

司令部ニハ、三十三期ノ御厨〔正幸〕、大内〔競〕ノ兩少佐アリ。之ニ方面軍ノ中山〔寧人〕少佐、大本營ノ松村〔知勝〕少佐ト予ト合計五名ガ相會シ、又陸大四十期生ハ、當軍ニ長〔勇 28期〕、寺垣〔忠雄 28期〕、川上〔清志 30期〕、北島〔熊男 29期〕ノ四中佐、大本營ノ松村少佐、方面軍ノ深堀中佐ニ予ヲ加ヘ七名（其ノ内松村、予ノ二名ハ兩方ニダブルモ）ガ相會シ互ニ健康ヲ祝シ、支那事變ハ我々同期生ニテ「リード」等ト快氣炎ヲ揚ゲツツ談話シ、洵ニ愉快ナル一夜ナリキ。

南京城頭日章旗飄ル

午後一時遂ニ南京攻略ノ命令下達セラレ、第九師団歩兵第三十六聯隊ハ南京城壁ヲ占領シ、第一番乗トシテ日章旗ヲ掲ゲタリト。軍司令部内何レモ笑ヲ含ミ、御目出度ノ頻發ナリ。蓋シ勸告ノ期限タリシ正午ニ遂ニ軍使來ラザリシ為、敵ニ降伏ノ意志ナキヲ認メ、平和接收ノ方針ヲ放棄シ、威力奪取ヲ命ゼラレタルナリ。我第十軍方面ノ狀況ハ不明ナルモ一番乗ハ上海派遣軍ニ譲リタルモノノ如ク判断セラル。武士ノ情トシテ当然ナリ。我軍ヨリ早く出征シ、上海戦線ノ膠着以來、晴レタ気分モナカリシ上派遣軍ニ花ヲ持タセテ南京一番乗セシメタル雅量ハ、日本武士トシテサモアルベシト自ラ慰ム。

句容司令部ニ於ケル各官ノ談片等

各種ノ人々ト漫談中ノ参考事項。

作戦地境ノ切り方ニ苦シム

各師団ハ、堅固ナル陣地ニ向フコトヲ避ケントシ、或ハ良好ナ

「ウネリ」「クネリ」ハ、我國耕地整理未済ノ地ト同ジク、池ノ多キコトハ予想外ニシテ「クリーク」ナキノ地方ニ於テハ、専ラ水田用水ヲ池ニ依リアルナラン。大小ノ池ガ無数ニ棋布セラレアルコト奈良平地、伊丹平地ニ似タルモノアリ、或ハ池ノ數ハ其以上ナラン。山ハ「ハゲ」山ニテ急峻ナラズ、從テ耕地トノ關係明瞭ナラズ、我々素人ハ空中視察ノ際山ヲ見落ス危險アリ。

又所々部落ヨリ煙上ル。仁德天皇ノ民ノ籠ノ煙ニアラズ。皆是レ火災ナリ。新藤副官「兵火」ノコトヲ述懐シ、予モ亦全ク同感ナル旨答フ。

句容着

飛ブコト約二十分、早くモ句容着。二旋回ノ後着陸。操縦士モ初メテノ着陸ト見エテ慎重ナリ。句容飛行場ハ立派ナリ。我海軍機ニ爆撃セラレ格納庫、飛行機ノ残骸アリ。但シ格納庫ハ修理スレバ使用シ得ル程度ナリ。

飛行場警備ノ高射砲隊ノ自動車ヲ借用シ司令部ニ向フ。機関士ハ初メテ來レル飛行ナレバ、何カ記念ニナルモノヲ呉レト、高射砲隊ノ兵ニ頼ミ青電刀ヲ貰ヒ喜ンデ帰レリ。

句容ニ於ケル上海派遣軍司令部

司令部ハ句容縣政府ニ位置シアリ。市役所トイッタ所ナリ。全然破壊等ヲ蒙リアラザル為立派ナルモノナリ。其ノ上仲々ヨク整頓セラレアリテ、實ニ感心ノ外ナシ。事務的ニナリ過ギアリト言ヘバ或ハ然ランモ、實ニ整然タリ。内地ノ役所トシテモ恥カシカラヌ程度ナリ。一利一害アルベシト雖當軍ノ學ブベキ所多シ。新藤副官ト同行シアル為副官モ將來ノ設營ニ関シ自悟スル所アリシナラン。

中支那方面軍參謀長以下モ同所ニ宿泊シアリ。明日打合せスルコ

ル補給路、或ハ良好ナル宿营地ヲ作戦地境内ニ取り入レントシ、村落ノ東端ナリヤ西端ナリヤニテ議論スルコト多シ。

二 日本人ハ利己主義ナリ。

作戦地境ノコトニ於テモ、他ノ為ニ仁ヲ為スノ精神ニ於テモ予想外ニ利己主義ナリ。

三 砲兵（野砲）ニ尖銳彈不要。

四 兵器修理機關整備ノ必要。

五 南京占領後ハ、津浦線ニ沿ヒ一軍ヲ進メ北支那方面軍ト手ヲ握リ、支那大陸ノ海岸ヲ含ム地域ヲ占領シ、蔣介石ヲ地方軍閥ニ蹴落シ、彼ニ海港ヲ与ヘザルコト。

六 上海派遣軍ガ一挙南京ニ追撃シ得タルコトハ、3 D、101 Dヲ先

ヅ殘置シ、次イデ11 D、重藤支隊ヲ抽出シ、南京ニ到ラシメタルハ9 D、13 D、16 Dノ三師団ニ過ギザリシコト、西方ニ至ルニ從ヒ支那軍ニ荒サレザリシ糧食ノアリシコト等ニ因ル。

七 患者輸送部本部長ガ大尉ニシテ、其ノ下ノ班長ニ少佐ガアリテ困リタルコトアリシト。

八 歩四四ノ某大隊長ハ次カラ次ヘト戦死シ、事變發生以來四代目ノ大隊長ナリト。

九 戦死者ノ多キ部隊ノ郷土ニ於テハ、隊長ノ作戦下手ナル為ナリトカ、或ハ隊長ガ若イカラ戦死者ガ多イトカ評判シアリト。

十 101 Dガカカル情況ニ陥リシハ、指揮機關ノ不備ニ起因セルガ如ク、指揮機關ニハ現役ヲ充当スルヲ可トス。

◇十二月十一日（土）晴 句容ヨリ洪藍埠ニ至ル

昨夜ノ宿營

句容ノ上海派遣軍司令部ハ非常ニ事務的ニ整備セラレアルコトハ既述ノ通ナルモ、夜間ノ寢室モ一室ニ吉積大佐、松村少佐ト予ノ三人分ヲ整然ト準備シアリ。然ルニ毛布ガ非常ニ少ク、寒キコト甚ダシ。従来ノ經驗ニ依リ「ローソク」、燐寸、懐中電灯（上海ヨリ購入シ来レルモノヲ貰フ）ヲ携行セル所、非常ニ便宜ヲ得、吉積大佐、松村少佐ニ対シ準備ノ周到ヲ自慢セリ。

南京入城式打合
午前九時ヨリ中支那方面軍、上海派遣軍ト共ニ打合セテ為ス。塚田少将、公平中佐、村上（宗治26期）中支那方面軍副官、中佐、大坪（一馬30期）上海派遣軍參謀、中佐、上海派遣軍副官某大尉、山崎少佐、新藤少佐会同ス。

未ダ南京占領ノ進捗状況不明ナル為、細部ノ打合セテ為スコトヲ得ズ。大綱ノミヲ話シ再度集ルコトトス。コノ程度ナラバワザワザ集ルコトモナカリシト感ゼラレタリ。方面軍ハ余程暇ト見エテ、入城式トカ慰靈祭トカノコト許リ考ヘ居ル様ニ思ハル。

松村少佐ニ依頼

心配ニ堪ヘザル日記帳ノ補給ヲ松村少佐ニ依頼シ、東京ヘノ帰途上海ニ於テ日記帳ヲ購入シ送付セラレ度旨依頼ス。又先ニ軍司令部ノ編成改正ニ関シ各種ノ疑義ヲ生ジタリシニ、偶然松村少佐ニ会同シタルヲ以テ、書類ハ無キモ種々懇談シタルニ、「ドウモ」誤リハ中央部ノ規定ニアラシク、結果ハ軍ノ希望通り実施シ、中央部ハ之ヲ承認スルコトトシテ話ヲ纏メル。コレニテ安心シテ編成改正ヲ為シ得ルコトナレリ。偶然ノ幸福ナリキ。

洪藍埠ニ帰ル

入城式（ニ関スル打合ワセ）終了後直チニ帰ルコトトナリシモ、

供シ、主トシテ米作地ナリ。常州、無錫、蘇州何レモ相当ノ町ニシテ、蘇州ハ殊ニ大ナリ。太湖ハ琵琶湖ニ優ル円形大湖ニシテ、水ハ著シク濁ル。湖中ニ大ナル島アリ。ココノミハ我軍ノ攻撃シアラザル為、住民ハ悠々野良ニ仕事ヲ為シアリ。

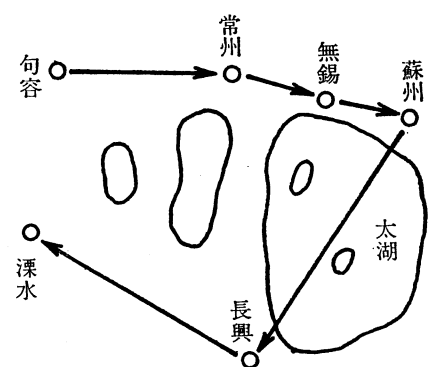
奇遇

常州飛行場ニ於テ旧語学将校藤森（幸男37期）大尉、句容飛行場ニ於テ及川（源七23期）恩賞課長、渋谷少佐、下山（俊作33期）少佐、蘇州飛行場ニテ恩賞課ノ佐藤中佐ニ会フ。藤森大尉ハ本年八月語学校（東京外国語学校）在学中動員トナリ、勇躍戦線ニ向ヒシ將校ニシテ、今常州飛行場ニテ相会シ、互ニ健康ヲ祝スルモ奇縁ナリトイフベシ。

右手ニ負傷

句容飛行場ヲ出発スル際、最後ニ飛行機ニ乗り「ドアー」ヲ閉メントスル瞬間、飛行機ガ滑走ヲ始メ急ニ「ドアー」ガ閉リ、右手ノ拇指ヲ挟マレ爪ヲ破壊セラレル。去ル九年十二月ノ自動車ニ依ル事故ト同ジ事故ヲ繰リ返シ遺憾コトナシ。而モ右手拇指トイヘバ事務官トシテ致命傷ナリ。飛行機ハ遠慮ナク空中ニ飛ビ上リ、指ハ挟マレ仕方ナシ。ヤットノ事ニテ左手ニテ「ドアー」ヲ開キ右手ヲ外ス。手袋ヲ取レバ見事ニ爪ハ壊レアリ、コノ前ノ經驗ニ依リ骨ニ異常ナキコトハ確カナリ。上衣ノ裡ニ収メアル繻帯包ヲ取り出し、隣席ノ飛行將校ニ仮繻帯ヲシテ貰フ。ヤットノ思ヒニテ着陸セシガ常州飛行場ナリ。見レバ陸軍飛行隊アルラシク、直チニ飛行機ヲ待タセテ天幕ニ至レバ、一軍医中尉アリ。飛行場ノ天幕内トテ十分ノ手当モ出来ザル様子ナルモ、コノ前ノ經驗ニテ早く爪ヲ取ルヲ可トセント決心シ、躊躇スル軍医ヲ催シテ一挙ニ爪ヲ取ル。痛サ序ニテコ

帰ルベキ足ナク北島參謀ニ御願ヒシ飛行機ヲ出シテ貰ヒ、中支那方面軍ノ村上中佐ト共ニ蘇州ニ至リ、蘇州ヨリ定期便ニテ溧水ニ帰ルコトトス。



第3図

正午頃句容発。乗用機「フォーカス」（内地ノ航輸ト同型）同乗者村上中佐、新藤少佐、阿部某（独立新聞社長）、某飛行將校ト予ノ六名ナリ。句容ヨリ常州ヲ経テ無錫ノ上空ヲ経テ蘇州ニ着陸。蘇州ニ於テ定期便ニ乗換ヘ長興ニ出テ、長興ニ於テ「ビーチ」機ニ乗換ヘ溧水ニ帰ル。

経路下図（第3図）ノ如ク句容―溧水路ニ依レバ極メテ短時間ノモノヲ所謂空ノ漫步ヲナシタル次第ナリ。戦場ニ於ケル座興ナリ。

空中観

昨日ト大差ナシ。低地ニハ「クリーク」、其ノ他ハ池ヲ以テ灌溉ニ

ノ前ノトキ程痛カラズ。寧ロ後ヨリ塗布セラレタル沃度丁幾ノ方ガ遙カニ痛シ。応急手当ノ後再ヒ飛行機ニ搭乗、前記ノ経路溧水ニ帰ル。溧水ニ帰レバ野戦予備病院ノ看板アリシヲ以テ、初療ノ完全ヲ期スル為診断ヲ受ク。軍医ハ傷口ヲ見テ爪ノ取りアルヲ知り之ナラバ大丈夫デス、二、三日ハ繻帯交換セズコノ儘ニ置クヲ可トスト言ヒツツ大袈裟ナル繻帯ヲ為シ、肩ヨリ三角巾ニテツル。「ソナナ事ヤメテ呉レ」ト言ヘバ「コウセナイト傷ヲ大切ニシナイ」ト言ヒ承知セズ、堂々タル負傷者ノ姿トナリテ病院ヲ出ツ。途中テ会フ兵ガ負傷者ト思ヒ（勿論戦傷者）同情ノ目ヲ以テ見テ呉レルノモ何トナク恥カシ。

洪藍埠ノ軍司令部位置ニ歸リ案シミノ日記ガ書ケズ大弱リ。已ムナク參謀長ノ当番兵ニ要旨ヲ口述シ、後日清書スルトキノ資料トス。音楽学校ヲ卒業セル者ナリトイフモ字ヲ知ラヌコト夥シ。東京放送局、ビクター専屬トシテ伴奏ニテ始終ラヂオ放送ヲ為シアリトノコトナリ。

旅客機負傷

予ガ長興ヨリ溧水迄乗レル「ビーチ」旅客機ハ前日何処カラカ小銃弾ヲ受ケ、胴体ニ負傷シアリ。敵飛行機ガ活動シアラザル為、戦線近クニ旅客機ガ飛ビ廻リアル「コトニ因ルモノナランカ。」敵機ガ出沒シアラバ到底ナシ得ザル所ナリ。

各要地占領日次

- 蕪湖 占領 (18 D) 十日
- 大平府 " (国崎) "
- 將軍山 " (114 D) 九日
- 牛首山 " (6 D) "

◇十二月十二日(日) 快晴 洪藍埠ヨリ秣陵関ニ至ル

昨夜ノ睡眠

コノ前ノ経験ニテ夜間ノ心配ヲ為セシモ余リ痛マズ、コノ調子ナラバ悪化スルコト万ナカルベシト判断ス。之モ思ヒ切ッテ爪ヲ取リシ御蔭ナラン。然レドモ病者ノ心理トシテ人ヨリ痛カロウト同情セラルレバ、其同情ニ甘ヘ又ハ同情ヲ買ハンガ為痛クナイトハ言ヒ難キモノナリ。大シタコトハアリマセン位ノ所ニテ胡麻化セリ。

食事ヲ逐次平食ト為ス

九日夕食ハ一口、十日朝食半分、十一日朝食全部、十日夕食全部、普通食ト為シ逐次平食ト為スノ修練ヲ為シ、十一日飛行機ニテ帰還ノ際ニモ機上ニテ乾麵麵包ト牛缶ヲ食ヒシモ何等ノ故障ナク、概ネ全快セルモノト認メラル。

秣陵関ニ移ル

午前九時出発、軍司令官ト共ニ秣陵関ニ移ル。軍司令官ハ昼間秣陵関ニ、夜間洪藍埠ニ位置セラル。途中緑口鎮付近ニ於テ戦車ノ為自動車ノ通行ヲ妨ゲラレ正午稍々前辛ウジテ秣陵関ニ着ク。途中ノ風景特記スルモノナシ。不変後方部隊充滿シアリ。

秣陵関司令部

阿片吸場所ラシク阿片吸ノ寝台様ノモノ、浴場等アリ。非常ニ狹隘ニシテ事務実施上ノ不便ナルコト李宅ニ次グ。寢室モ事務室モ同ジ場所ニテ、辛ウジテ書記室ヲ分離シアルノミ。一見シタル所、誠ニ雑然タリ。句容ヨリ帰リタル目ニハ一層甚ダシキヲ思ハシム。

湖州ニテ先遣者ト分離シ、引続キ句容ニ至リ第一課主力ト分離スルコト八日以来五日間、何ガ何ヤラ手が着カズ茫然タリ。又手モ少々痛ミ不愉快ナリ。

唯敵ノ銃砲声ノミニテ弾丸ノ雨飛セザルヲ遺憾トス。

途中ノ景色

南京南方丘陵地ニテ一般ニ土地乾燥、死骸相当ニアリ。コノ方面ノ兵ノ死骸ハ便衣ニ似タル藍色被服ヲ着用シアリ(南方ニ於テ「注・杭州湾上陸の時」見タルモノハ「カーキ」色)。散兵壕中ニ斃レアルモノノ身辺ニハ小銃薬莖アリ、手榴弾アリ、防毒面アリ、其ノ奮戦、敵ヲ天晴レノ感ヲ懐カシム。又、敵陣地ニハ鉄条網、鹿砦ノアルモノ、「トーチカ」ノ構築中ノモノアリ、敵ノアワテテ陣地構築セルコト手ニ取ルガ如シ。

帰途ハ夕霧迫ル午後六時頃。野道ヲ通レバ、赤イタ日ノ満洲ニアラザル夕日ノ南京ニ、何レモ同シ赤イタ日ハ感傷的ナリ。

美味ナリシ夕食

本夕ハ洪藍埠ニ帰ル予定ニナシアリシ所、急ニ自動車が出発シ間ニ合ハズ、秣陵関ニ宿營ス。別ニ手ノ手当ヲ為ス要ナキヲ以テ心配ナク泊ル。夕食ハ鶏肉ト葱ノ「ゴツタ」煮、小鳥ノ丸煮、カボチャ、野菜煮等仲々ノ御馳走ナリ。南京陥落ノ愉快モ手伝ヒ、腹ノ自信モツキタルヲ以テ徹底的ニ食フ。後藤侍從武官モ同席、野戦料理ニ舌鼓ヲ打タル。加之「ジャボン」「チョコレート」等ヲ加ヘレバ今夜ノ分量ハ莫大ナル量ニ達シ、山田大尉曰ク「少佐殿大丈夫デスカ」ト。久シク押ヘタル食欲急ニ爆發セリト見ルベキカ、モウ大丈夫ト思ヒ乍ラモ内心不安ナリ。然シ余リノ美味ニ思ハズ満腹セリ。

家郷通信

大坂参謀曰ク「本夜ハ吉日ナレバ家郷通信ノ便ヲ図ラン」、ト皆ガ急イデ手紙ヲ書ク。予ハ手ノ負傷ノ為筆ガ取レズ残念デ耐ラズ、試ニ筆ヲ取ッテ見レバ満更読メナクモナシ。依ッテ軍事課ト千代子

南京城壁占領

午後〇時三十分、第六師団歩兵第四十七聯隊ノ緒方大隊ガ光華門〔注・中華門ノ誤記〕ヲ占領シ、日章旗ヲ揚ゲタリトノ報アリ。即チ昭和十二年十二月十二日昼十二時南京城壁ヲ占領シ日章旗ヲ挙グト、中央部其ノ他ニ報告シ、將校、下士官、兵全部ヲ挙ゲテ乾杯ヲ為ス。管理部ニテ準備セル「ジャンパン」ガ間ニ合ヒ皆ガ喜ブ。管理部ノ御手柄ナリ。「ジャンパン」今日ハ非常ニ甘ク、割合ニ多ク飲ミ、「ホロヨイ」気分トナル。

先ニ句容ニ在リシ時、第九師団ガ東南角ヲ占領セリトノ報ニ有頂天ト為リアリシモ、軍ニ於テハ、アノ占領ハ虚報ナルベシト言ヒ居レリ。

侍從武官後藤中佐ハ、コノ良キ日ニ軍司令官ニ居合ハセラレ、感激ノ場面ニ直面シ良キ復奏ノ資料ヲ得タルヲ喜ビ、直チニ侍從武官長宛打電セラレタリ。

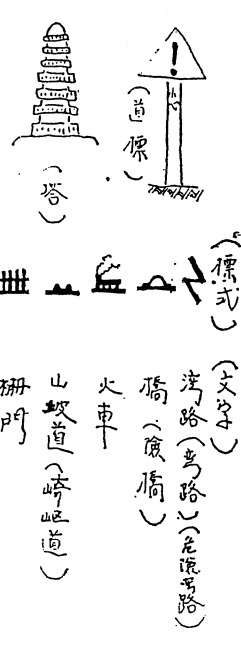
戦線視察

軍司令官、侍從武官ハ午後、第十四師団、第六師団視察ニ赴カル。予ハ指痛ノ為見合ハセタルモ、轟ク砲声ニ「ジット」シテ居レズ、山田大尉、渋谷軍曹ト共ニ自動車ヲ駆テ第六師団ニ至ル。途中ニテ武官ノ一行ト会ヒ、之ニ随行シ6D司令部ニ至ル。南京城南方高地(注・雨花台)ニテ、城壁ヲ瞰制シ得ル好適ノ地ニ位置シアリ。

砲声、銃声股々、当方ニハ銃砲弾来ラザルモ、前面ニハ砲弾ノ炸裂、火災、城壁ノ崩レ等手ニ取ル如ク、殊ニ城壁ニハ47 i t 23 iノ掲ゲタル日章旗ガ眼鏡ニ映リ愉快ナリ。全般ノ景色ハ日露戦争ノ画ニ似タルモノアリテ、所謂戦争絵トイフモノノ実感ヲ味ヒ得タリ。

宛トニ出ス。勿論健康ニシテ奮闘シアル旨ヲ報ズ。或ハ妙ナ字ヲ書キ疑問ヲ懐クヤモ計ラレザルモ、恐ラク気付クコトナカルベシト思フ。飛行機ニテ内地ニ送り、福岡カラ航空郵便ニスルトノ話ナリ。

支那ノ道標及塔



支那ノ道標ハ日本ト大差ナキモ概ネ上ノ様式ナリ。仲々面白シ。敵敗残兵ノ後方擾乱

先ニ下泗安付近ニ於テ兵站自動車ノ遭難アリシニ、再ヒ同所附近ニ於テ航空廠ノ燃料、器材輸送ノ途中、敗残兵ノ襲撃ニ会ヒ戸田少佐以下多数ノ遭難者ヲ出セリ。其他長興飛行場ノ襲撃、平湖附近ノ逆襲等約四回ニ互リ後方擾乱アリシト、コノ調子ナラバ寧ろ少ナキ方カ。

◇十二月十三日(月) 晴 秣陵関

腹痛マズ

◇五行略◇

昨夜ノ夢

◇七行略◇

南京城占領ノ浮沈